毎月一回

家庭雜誌

十五日發行

重要目次

第百四拾號

大日本女學會

總裁　小松宮妃殿下　　副總裁　鍋島侯爵夫人

●本會贊成員は有栖川宮大妃殿下　華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方九十四名

趣旨

本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義録を發行し入學すべき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應じ輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期すされば此講義録は學ぶべきよすがなき者の師友となり一家の主婦として齊家保育の任に當る者の指針となり女學校に入學し居る者にも參考書として適當なり●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれば今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に

會員を募集す

志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第壹巻より送本差支なし●本會講義録は女學講義と稱し畏くも　皇后陛下御覧を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一巻の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月卅錢束修卅錢●會則希望者は郵券貳錢添へて申込みあれ●

學科及び講師

●修身（女子修身談）細川華族女學校長か從來同校に於て演説せられたるものに係る（禮法）佐方女子高等師範學校教諭●國語（國文）關根學習院教授（作歌、大口御歌所錄事（作文文法）今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歴史（日本歴史萬國歴史）大森文學士●地理（日本地理萬國地理）喜田文學士（地文）脇水理學士●理科（物理化學）近藤工學士（博物）石川理學博士（生理衛生）未定●家事（家庭教育）三輪田高等女學校講師（家事經濟）後閑女子高等師範學校教諭（家事衛生）三宅醫學博士（小兒衛生）三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝（活花點　●史叢、下田華族女學校學監●小説、逍遙學海紅葉三大茶）田邊東京女學館講師　家●お伽譚、漣山人●詞藻●質問應答●雜録●雜報

目下第四巻迄發行せり

東京市麹町區土手三番町二十八番地

大日本女學會

德富健次郎著

青山白雲

紙數約二百頁

本月中旬發行

「青山白雲」は名の如く青山白雲なり。短篇の小說あり。實話あり、逸事あり、紀行あり。記する所一ならずして、之を貫いて走るは白雲と青山と。百忙世界、熱鬧社會、一閑地を得て心神を養はんとするの士は、幸に一讀せよ。

故橫井平四郎著　男橫井時雄編　（明治廿三年一月初版（爾後缺品））

小楠遺稿

小楠翁肖像及遺墨石版數葉入

洋裝美本　紙數大約六百頁

定價　上製金壹圓五拾錢。並製金壹圓。郵稅拾貳錢

故松平春嶽侯題字

勝安房伯序

由利公正子手翰

長岡護美子題詩

故元田永孚男後序

維新の末路攘夷鎖國論横行の日に當り、獨り其流の外に立ち卓然として世論を排し洋々開國を唱導せしもの、東に佐久間象山翁あり西に横井小楠先生あり、共に是れ識力五洲の外に逸し眼光百載の後に徹するの人豪、而して象山翁の事蹟は嘖々として世の既に知る所、小楠先生の生涯に至ては未だ大に悉さゞるもの尠きにあらず、先生と親交ある松平春嶽侯長岡護美子勝安房伯由利公正子元田永孚男等此に慨あり、悠悠に先生の遺子時雄氏に勸め其の遺墨の未だ甚だしく散佚せざるに及んで之を蒐收して一書と爲さしむ、小楠遺稿即ち是なり、嗚呼今世に在て苟くも濟世の策を講じ經綸の務を談ぜんとする士君子、請ふ一本を購ひ寒燈耿々の下試みに之を繙け、其の雜著に於ける文武一途之說海陸軍問答書富國强兵の二論處時雜議其他數多の建白書等に接しては以て先生が當時に處する滿腹の經綸を窺ふに足るべく、其の幾多交友に寄するの尺牘に接しては以て先生が一世を推倒するの慨を見るに足るべく、其家人に寄するの書に接しては以て先生が情緒の濃かなるを察するに足るべく、其旅行見聞錄遊學雜誌講義文章に接しては以て先生が萬古を開拓するの識見を知るに足るべく、其の東遊小稿小楠堂詩草に接しては以て先生が胸中緯々として閑日月あるを想見するに足るべし、而して讀者は更に眼光をして紙背に徹せしめよ、豈たゞ先生の經綸と性情とを知るのみならんや、亦た之に依て以て維新改革の因て來る所を悟り自から一部開國の歷史を讀むの看あらん

（四月中旬製本出來）

發行所

東京京橋區日吉町四番地

民友社

正岡子規君閲並序
高濱虚子君序
下村爲山君畫
上原三川君
直野碧玲瓏君
共編
河東碧梧桐君序

新俳句

紙數四百頁定價
廿五錢郵税六錢
挿畫四季三十葉入

新日本の生活は、多くの點に於て革新せり。政躰も革新せり。醫術も革新せり。戰術も革新せり。而して最も多く文學美術に於て革新しつゝあり。小説の如き、繪畫の如き、音樂の如き、詩歌の如き、其最も著るしきものに非ずや。

俳句に至ては革新の氣運殊に昭明較著にして、芭蕉を外にし、蕪村を外にしては數百年來、單に遊戯文字、道樂仕事、謎語的、兒訓的のものとして、滔々たる天下廢人遊民の占有に歸し、文學上の價値としては何の見るべきもの無りし俳句も、今や全く、文學上高等的、獨立的、不朽的のものとして識認せられ、且製作せられんとするに至れり。而して勃然たる新派革新の氣運は、各々形勝の地に據て東西相呼應し、今や殆んど蜻蜓洲の首尾を震撼し去らんとす。豈亦た盛ならずや。

彼は芭蕉、蕪村を經て、第三期に俳神の金冠を戴かんとしつゝあり、又た戴くべきの詩人なりと、或者をして絶叫せしめたるは、俳句の革新に偉功を奏したる正岡子規子に非ずや。上原三川、直野碧玲瓏二子、聊か斯道に得る所あるを以て、暇餘同好諸子の句を輯め子規子の閲を乞ふ。子規子これを校訂する極めて峻嚴、二萬有餘の俳句、僅に三千餘を存するに至れり。則ち此書、三川、碧玲瓏二子の共編と云ふと雖も、實は子規子の選と謂て可なるに非ずや

而して本書の繪畫に至ては、畫家にして俳句に善き下村爲山(別名牛伴)君の筆に成るものにして、意匠斬新、筆勢超忽、眞に本書の光彩を添ふに足る。

萬葉集は萬葉時代を代表し、古今集は延喜時代を代表す、數百年の舊套陳態を一掃して、明治革新の精粹を蒐集代表する者、夫れ唯本書なる哉。夫唯だ本書なる哉。

發行所
東京京橋區日吉町四番地
民友社

愈よ新刊發行せり

塚越芳太郎著

熊澤蕃山

紙數五百六十四頁
定價八十錢
郵税八錢

豪才を以て一世を睥睨したる物徂徠をして、人材には即ち蕃山、學問には即ち仁齋と曰はしめ、又仁齋の道德、蕃山の英才、余の學術と合して一となす、即ち聖人と謂ふべしと曰はしめたるものは、實に彼蕃山に非すや。江戶三百年を貫流したる反面思潮の源頭に立ち、經世の才、濟民の畧、滔々たる儒學者流中に於て別に一頭角を擢でたる者は實に彼蕃山に非すや蕃山の蕃山たる所以は、江戶政府の大政策たる鎖國弱諸侯主義の流弊に對して、之が變通の策を畫したるに在り。特に私德公德の最も尊ふべきあり、出處進退の仰て師とすべきあり。其生涯は永く士人の標式たるに堪ゆ。若し夫れ時代の變通を要すべき點よりして之を觀ん乎、今の時は多少蕃山の時の如き也。今日の學者政治家の世に處するを見るに、又彼蕃山の如きものを思はざる能はず。然らば即ち此の書の今日に出る、必ずしも時事の萬一に補なきにしもあらざる可し。

東京市京橋區日吉町
發行所 民友社

家庭雜誌

定價表

	（金前）	（市外郵稅共）
一册	拾錢	拾一錢
六册	五拾七錢	六拾三錢
十二册	壹圓八錢	壹圓二拾錢

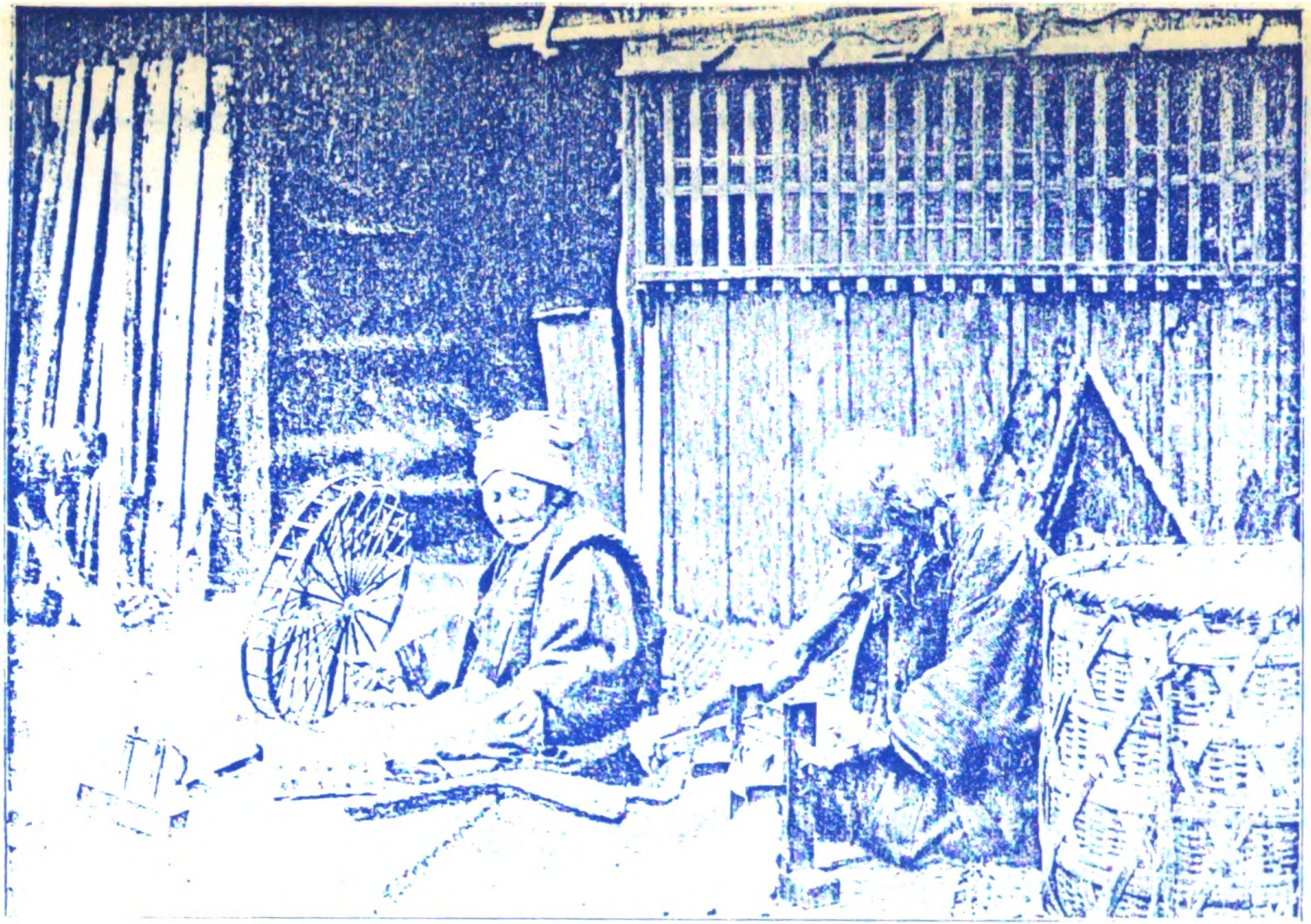
廣告料 一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌 每月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番
發行兼印刷人 吉崎圓吉 編輯人 金子佐平
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十一年三月十五日發行
家庭雜誌第百拾四號

目錄



小川一眞製

平和

家庭雜誌第百十四號
(明治三十一年三月十五日發兌)

社説

家庭的茶話會の事

蘇峰生

たまさかに人を訪れれば、其人は留守なり。尋ねたる人も不本意なれば、尋ねられたる人も、尙ほ悔やし。斯るヿは世間有勝ちのことにあらずや。又た折角來客あるも、時としては此方には難有迷惑を感ずるヿなきにあらず。或は餘儀なき他客の來りつゝある塲合と云ひ、或は家内に何か差障へありと云ひ、或は自分に何か仕事ありと云ふ塲合に、無遠慮にも客の長坐するか如きは、如何にも困り入りたるヿと云ふ可し。

時としては面會も爲し度く、話しも爲し度しと思ふ人も、別段の用事なき爲めに、訪問するヿを欠き、思はず無沙汰なして、遂ひに其の閾の高くして越へられぬ樣なるヿもなきにあらず。

我邦に於ては、交際の機關、如何にも不整頓にて、交際は一の慰樂を人生に與ふる具とならずして、却て苦痛を與ふるが如き意外なる結果を見るヿなきにもあらず。

記者は此の欠點を補はんが爲めに、家庭的の茶話會でも催ふしたらば如何と思ふ也。英國杯にては一家の主婦か、折〻其の家の親しき人々を茶に招くヿあり。其の時刻は午後四時頃より七時頃迄にして、別に何たる趣向もなし、唯だ茶を呑むの外には、淡泊なるパン菓子、ビスケットの類を喫するのみ。而して其の茶は、主婦か茶道具を客間に持ち出し、自から煎して供するものにして、日本の茶の湯とか云ふ程に面倒のものにあらず。云はゞ日本にて粗茶を煎する位の事に過ぎず。

而して其の給仕も男の客が手傳ひし、菓子とても客が持ち廻りて女の客に差し出すとなれば、如何にも造作なきことにして、費用とても何程の事にあらず。而して二三時の笑語に、互ひに清白なる交際を温からしむるは、如何にも妙趣向と云ふ可きなれ。

所謂る我が社會に行ひ度きは、此の流儀の茶話會なれ。我邦に於ては如何なる親しき間柄と雖も、其の家族の如きは、殆んど疎遠にして、甚しきは二十年來の親友にして、其の親の有無を知らぬものあり。否な朝夕親しく交際する友人にして、其の細君の顏を見たることなきあり。如何にも不都合の至りと云ふ可し。されば土曜の午後なり、何かの休日などに、一家の主婦たる人か、預しめ其の招待す可き人々に通知して、茶話會を開きたらば如何に樂しかる可き。或は珍らしき客あらば、此の客をも伴ひ來る人もあらむ。茶さへ呑ますれば差支なきからには、別段の準備を要せざる可し。是れ實に面倒なく、出費少く、而して興味尤も多きものにあらずや。

但だ我邦に於ては、斯く清白なる意味に於て男女打ち寄ることなく、とても直ちに實行し難しとする人あらば、せめて男子ばかりの茶話會にても、女子ばかりの茶話會にても、催ふしたらば如何と思はる。我か國民は未た田舍者の風を脱せず、人さへ見れば人みしりするの癖あり。一寸坐に未知の人あれば、イヤにしかつめらしくかしこまり、澄まし込み、切口上となり、何となく双方より近く可らざる中垣を生ずるが如きは、如何にもつまらぬ風俗と云ふ可し。

且つ斯る茶話會なれば衣物杯も、別段着飾るの必要はなかる可し。ふだん着のまゝにて差支なかる可し。今日客を招くと云へば、何とか仰山らしくせねばならぬ事と心得、客に行くと云へば又た左樣心得居る間は、とても交際の健全なる發達は、得て望む可らず。世の

風俗改良に熱心なる人は、何んぞ一たび之を試みざる。

婦人と勞働

人は働く爲めに作られたるもの也、働くものには富と安心との酬ひらるゝのみならず、身躰の健康も精神の快愉も當座に於て既に之に報ぜらるゝを見ずや。論より證據、人は相當の勞働をなし、其日を有益なる事業に用ゐたりと思ふ場合に於て、其夕休息するに及び、一日を回顧して如何に自ら心身の快愉を覺ゆるぞ。粗食をなし水を飮みても、其甘美なること限りなかるべし。古人が夕顔棚の下涼みを人生快樂の眞味となしたるも、夕顔棚の下涼み其物が人生快樂の眞味なるにあらず、一日を有益なる勞働に用ゐて休息する時の快味を指したるものゝみ。加之一日を有益なる勞働に用ゐて心身の快愉なる場合に於ては、其人の氣象自ら和平にして人に接するにも温良に、一家藹然として、所謂地上の天國も其間に在らんとす。

若し之に反して一日を遊佚に過ごしたる如き場合に在りては、其夕に於て自ら省みて心に疚しく、何事か慊らぬ思ひあるは、實に得も言はれぬ不愉快なるべし。單り得も言はれぬ不愉快を感ずるのみならず、其身躰も何となく工合惡しく、美味を食へども甘からざるは、差當り其日の遊佚に對する自然の冥罰にあらずして何ぞ。

此くの如く人に勞働なるものゝ缺くべからざることは、其快樂と相伴ふを見ても之を知り得べきのみならず、其身躰の健康と相伴ふことも、亦决して輕々に看過すべからざる事實也。

流るゝ水の腐らぬことは、古の人も屢之を稱したる所、機械の如きも、日常之を用ゆるものは、錆び腐る如きことなきこと、何人も知る所の如し。機械は使ひ耗ら

すによりて廢物たらしむることは容易ならざるべしと雖、錆び腐らしめたるが爲めに廢物に歸せしむることは多くの時日を要するまでもなし。人の身躰も亦此くの如し。過度の勞働は勿論身躰の健康を害することなからざれども、遊佚怠惰の人の健康を損することは更に甚しきものある也。必ずしも過度の勞働をなすには及ばざるべしと雖、人たるもの毎日必ず適宜の勞働をなすべきことは、飲食衣服の缺くべからざると共に決して缺くべからざることゝたり。

以上は始より分りきつたることにて、何の珍らしきこともなき話しなるが、世の中次第に進歩して、行住生活共に便安を増すに從ひ、次第〱に勞働の不足を感ずる人あるに至るは、人情の免れ難きことゝも也。特に婦人に在りて、中流以上のものが勞働不足の爲めに、身躰の健康を損じ、精神も亦從て常に快暢の趣を缺くことあるは、世上往々見る所にあらずや。身躰の不健康、精神の不快暢は、延て家庭の和樂を害し、甚しきは樂しき人生をも空しく憂愁の中に消磨するものあるに至る。

去れば人は何人と雖、是非共適度の勞働をなさゞるべからざるが中にも、取り分け勞働不足に陥り易き婦人に在りては、最も勞働の貴重なることに注意し、たとへ身婢女の使役すべきあり、出入車馬の送迎すべきものある身分なるにもせよ、成るべく自身に家事に任じ、相當の勞働は身自ら之を執るやう勉めざるべからざる也。是れ人の天職なるのみならず、亦實に其人の幸福を増すべき基本なれば也。



論説

小兒仕付方

定伯

子たる者の個性を察るとは、その親たる者に若く者なしとは、古聖も宣へれば今更ら言ふにも及ばざれど、殊に其の母たる者は、懐胎中の境遇を詳かにし、又た分娩後に於ける保育の勞を躬からし、且つ子を看護する所の時間も、父たる者に比ぶれば、遙かに大いなれば、子の素性を認識することも、父よりはいと〱明確なるべき理りなり。されども蓼虫の蓼の辛きを知らざるが如く、自覺の明無くて、僅かに其の己れの偏性頑癖もて、其の子を同化するに止まりて、女性の本分的大任たることゝは知らず、あたら美じき子を賊ふ者あらば嘆息の至なるべし。

子供をば完全にしつけんとなれば、左の數個條は、事の豫備として誠に大切なる所なり。

第一　家庭の構成に於て申分無かるべし。即ち一團欒を爲す所の親族、及び從者中には、不潔的成分の人無く、無用の人無く、長幼相互の恩愛威令、克く行はるゝを謂ふなり。

第二　家業とせる生活の業は、純潔なるべし。

第三　家禮は、極めて堅固に設けらるべし。

第四　家族相互は、純正簡明なる言語を選ぶを以て、其の家風と爲すべし。多語及び妄語を戒め禁ず可し。

第五　事毎に規律正しかる可し。

第六　質素と勤儉とを以て、家の美德と爲す可し。

第七　家人各々一己の私あるとなかるべし。

大要右の如し。而して右の諸箇條は、何れも家庭敎育の大本なれば、聊か細述したきものあれども、別問題

に馳するの嫌ひあれば、それは他冊に譲るべし。

「シツケ」といふ詞には、從來躾方と云ふ文字を使はれ、近頃では、又た訓練とか、訓育とか、種々變つた文字の用ひらるゝに至れり。蓋し「シツケ」とは、猶ほ着物の「シツケ」絲に於けるが如く、人の人たる性情を馴致せしむる所以の、義方の教をいふものなり。

仕付の目的とする所は、子供の意志を純正にし、且つ又た堅固に仕立つるに在り。子供の言行思念が、一として非道義的たらず、如何なる場合にも、人の人らしき態度を失はずば、其の家庭の仕付方は、極めて完全なることを證するものなり。

仕付の仕方は、即ち右の目的にて、子供に向つて提出するに、常に既往と似寄りたる所の境遇、若くは事件を以てして、以て頭りと似寄りの意志を起さしむることを第一とすべし。故に家庭の萬事は、簡易を主とせられて、子供をして、其の居れる境遇の古態なるや、斬新なるやを明かに自覺せしむるに足り、又た間々或る既知の行爲を繰返さしむべき、必要あらしめねばならぬものなり。要を以ていへば、習慣の勢力は、仕付の上に最も多く資用せらるべき所、意志の好習慣を作るは、仕付の能事とこそ知らるべきなれ。

抑ゝ各家庭の、生活の事情の、屢ゝ變更せざるは、小供の仕付の爲めに、太だ喜ぶべき所たり。然れども、その規則の正しきに過ぎて、小供の意志を一樣不變たらしむるは宜しからず。簡易々々とて、百事を空々平如たらしめて、愉快の前提たる喜悅を打消すも、亦た大いに宜しからず。又た心身の必要量に過ぎたる快樂を與ふることあらば、意志をして、忽ち萎靡因循ならしむべし。是れ殊に懼る可き所なり。

是れより以下、仕付方心得として、緊要箇條なりと信ずる者を臚列す可し。爰に一言す可きは、孔夫子の其の門弟子に對して、宜へりし教說訓言は、悉く吾人が

修身上の金科玉條たるのみならず。其の說き方、言ひ振の巧妙なること、實に人が人を仕付くるの摸範たること是れなり。中にても論語の述而篇、鄕黨篇の如きは、誠に仕付方の奧秘を闡明せられて、些の遺憾あることなし。故に、苟くも子供を完全に仕付けんと欲せらるゝ人々は、孔子の遺書を反覆せらるゝを以て、其の最も捷徑なりと信ずるものなり。

(一)家庭の生活的秩序は、なべて必ず堅固ならざる可からず。而して父母たる者の、意志の確乎不拔と、態度の靜穩不亂は、右の堅固なる諸秩序と、共に駢進すべき所の要件たり。而して如何なる塲合にも、父母の己れを持することは極めて、敬肅にして、容貌、辭氣、顏色の變調を示さず、唯だ子供の行爲に相應じたるの處置を爲す可きものなり。同一の行爲を處するに、時としては嚴に、時としては寬にし、或ひは禁制し、或ひは默許し、又た或ひは懲罰を加へ、或ひは冷笑に附するが如きは、愼みて避く可き所たり、いはゆる望レ之儼然、卽レ之也溫、聽二其言一也厲、また曾子の謂へる動二容貌一斯遠二暴慢一矣、正二顏色一斯近レ信矣、出二辭氣一斯遠二鄙倍一矣などの金言は、父母たる者の、終始服膺せざるを得ざる所なり。要するに、斯くの如きは、子供をして、善の善たり、惡の惡たる所、及び父母長者の言を信憑せしむる所以、卽ち其の意志を定着しむる所以たるなり。而して、子供の善行に對しては、必ず稱揚を加へて、以て意志は、必ず實行し得べきものなるとを覺知せしめ、間がな隙がな試みまく欲せしむるは、愈々益々其の意志を落付かしむる所以なり。一新慣習の素を得しむる所以なり。

(二)小供は、一旦好行爲を爲すとも、時ありて茫然自失の態に至り、而して不規律、不實着、不謹愼、及び無極の見識を爲すが如き、イタヅラモノとなること多し。之を輕躁と云ふ。されど、こは小兒の稟賦たる快

活とは全く異なり、彼れは心身の健康力、機敏性、及び追求心の勃々たるを現はす所のものなるも、是れは單にシダラ無き擧動に過ぎざるものなり。蓋し之を矯むるは、仕付の本分なれども、去りとて叱責、又は懲罰を以てせんとするときは、輕躁をして、更に執拗を加へしむるの恐れあれば、それよりは、寧ろ子供の爲さんとする所の行爲に就いて、若々しき結果あらしむるの手段を取るに若かずとす。是れ即ち子供の短所を遇するに、己れの長所を以てするなり。要するに、輕躁の結果を寛假せざるは、仕付の一大要務にして、孔子の開示せられたる三愆、三戒、三畏の如きは、之に就いて、深く參考せらる可きの値あり。

(三)小供の懶惰は、前の輕躁に反したる惡患にして、長後閑居不善を爲すに至る所以なり。之に附いて、仕方の務む可き所は、何がな蚊がな、其の活潑を挑發し得る所の方便を施し、殊に勞少くして成功速く、從つて愉快ある所の事柄を宛行ふにあり。又た々々活潑なる伴侶と遊戯せしむるにあり。而して之に對して、叱責、懲罰の効力無きは、前者と同じ。

(四)小供をして、當然に意志せしめ、又た機敏に決定せしむるは、是れ亦た仕付の努力す可き所たり。而して斯かる意志の作用は、自經驗の認識に由來するものにて、彼れの記憶は、以て事々しく行爲せざるも、行爲せば、必ず如何なる結果のあるべきかを、克く前知するを常とす。然れども、父母たる者は、子供のヨモヤ爲まじと思ふことたりとも、之が爲めには、寧ろ警告を加ふるを以て、深切なりと知るべし。

子供が、偶得の經驗は、概して仕付の爲めにはならぬものなれば、父母は、常に彼れが經驗範圍の擴張を助けざるを得ず。又た意志が、誤まりて不正の方面に働きたるときは、其の行爲の結果の至ること、至明至速ならましかれど、是れ常に期待すべからざれば、其の

結果を判然せしむるためには、或ひは明らさまに其の氣焔を助け、或ひは特別手段もて之をおだて、以て其の較著なる結果を知らしむるに若かざるなり。又た子供に、道義的理想の稍々發生するや、己れが善は、以て之を他に誇示せんとし、悪は、以て之を隱蔽せんとする了見に迫られて、漸く嘘誕の癖を釀生し、愈々詐辯を逞くし、増々背約を作ちず、甚しきに至りては、實に先天的嘘言者かと思はるゝ者となるも少からず。此等に對しても、叱責乃至訓誨は、殆んど無効なれば、寧ろ嘘言の結果として、必至の困苦、不利益に遭遇せしむるの、剴切なるに若かざるなり。之を要するに、因果應報の關する所を心覺せしめて、以て彼れの意志を鍛はしむるは、最も好き仕付方なり。

(五)子供の賞罰なるものは、即ち右の必要より設けられて、行爲の自然の結果に加へらる可きものなり。故に、子供の勤勉せる場合と、懶怠なる場合と、同一に自由自適の休息を許さるべきにあらず。譴怒は鼓舞せざる可からず、倨傲は壓屈せざる可からず、善く自由を用ひば、更に大自由を與ふべく、之を濫用せば、直ちに之を剝ぐ可し。この他、信任を私せざるや、食言せざるや、又た誠實は果して保障を要せざるやなどについても、父母たる者は、何にまれ精密に穿鑿して、苟くも妄愛の爲めに眩盤することなかる可し。

爰に賞罰について、大切なる注意は、なべて賞罰の程度は、行爲の善たり、悪たる程度と比例しむべきこと、又た同一の賞罰を頻に用ゆまじきこと、又た賞罰の手段は、單一に賞罰の意味のみにて施されて、任一罰法よりして善行の偶生することありとも、其の結果に對して褒賞するが如き、混雜の措置あるまじきことなどなり。

史談

閨秀美談

櫻川生

（一）北米合衆國々旗

新英洲十三州の人士が英國政府の壓制に抗して起ち、大に費府に會して獨立の宣言書を布告し、自由の旗幟を獨立閣に翻へし、七年間の苦戰に國家の精華を盡くし、幾多の熱血と熱涙とを流して自由を擁護し、北米の新天地に共和國の基礎を置きしは歴史上の花とも見るべく、ワシントンの劍、ゼツフアルソンの筆、パトリツク、ヘンリーの絶叫、フランクリンの奔走等は人々の熟知する處なるが、百代の後ちも翩翻たる星條の國旗を仰ぎ見て當年の活歴史を忍ばしむる合衆國々旗が一閨秀――ベツシー、ロツス夫人――の手に成りしとは知るもの殆んど稀なり、いでや少しく物語らむ。

ロツス夫人幼名はグリスカム孃といふクエーカー派の信徒たり、父は建築師にして費府の獨立閣の建築に與りたるを以て名あり。グリスカム孃後ちに費府著名の室内裝飾匠ウエブストルのヂヨン、ロツスに嫁す。

時しもウエブストルの工場にて衣服の裁縫を請け合ひしが其仕立方甚だ容易ならず襞積を取るに至つては幾多の工女を苦しめ何人一人成し就げ得べくも見へざりしが、ウエブストルはグリスカム孃の夙に裁縫、縫箔其他に秀でたる由を聞き居たりければ孃に托するに此の難事を以てせり、孃は此の依賴に應じて來り多くの工女が手放したる仕立をば見事に縫ひ上げぬ、ウエブストルの喜びの程察すべきのみ、彼は早速にも其父母に申し送りてベツシーを己が工場に傭ひ入れんとを請

ひ、孃遂に來りて此處に其の妙手を揮ひぬ。幾何もなく意外なる申込は意外なる邊――ジョン、ロッス――より來りぬ、ロッスは遂に孃の愛の手を得て結婚しぬ。

新夫婦は樂のしき家庭を形造りて各其業務に勵みたりき、折しも北米の人民は其の母國と葛藤を生じ、壓制に逆つて叫ぶ聲高く、自由の聲各處に轟き、義勇の民、愛國の士踵を接して起ち、將軍劍を按して勇み、健兒銃を撈ふて奮ひ、慈母其子を戒め、貞婦其夫を勵まし、殺氣新英州の天地に漲り、戰雲遂に破裂して曲直を干戈に訴ふるに到りしかば、ロッスも如何でか躊躇すべき或夜デラウエーア埠頭の附近に火藥庫を守るの際、不幸にして敵丸に斃れぬ、憐むべしベッシーは燕鶯の契り未だ全たからざるにはや已に寡婦として殘され、紅涙潸々襟を濕ふして好事誠に魔多きをぞ嘆じける。

乍去徒らに悲嘆の涙に暮れて已むべきにあらねば自ら心を勵まして己が業務を盡しゐたりしが、數月ならざるに總督ジョージ、ワシントン、ベッシーの叔父なる大佐ロッス及び國會の委員等ロッス夫人を訪れて、ワシントンは一の略雛形を示し、此の考案に基きて然るべき旗幟を造り得ざるべき乎との御掟なり、夫人は身に餘れる面目を謝し、果して成し就げ得べきや否やは測り難けれど、如何樣に乎試みまゐらせんと答へつ、圖按を見れば描かれし星は六角にてありければ、ワシントン始め居合はす人々に星は五角なるべきこそ正當なる形なれと申し進めたり、星の形の五角なるは我儕と雖も知らざるにはあらねど、星の數は一つならで數多く要するものなれば、五角の星を造らんより六角のものは角目も正しく造り得らるべしとて斯くは描きたりと答を聞きもあへず、紙片を片手に、壁に懸けたる鋏取ると見るより速く、折目正しく紙片を折りて、剪

むと見るまに五角正しき星燃き見る人々の眼に映じつ。

此の様を目撃し叔父ロッスはいふも更なり、ワシントン始め委員等も此れはと計り感に入り、六角の星を改めて五角の星となし、其他夫人が申し出でたる考案にも賛同の意を表したり、かくて別室にある夫人の卓子に己が考案をばかく〳〵なりと示しけるに、然らば旗幟の考案は御身に一任したり、星の配合、條の配列、全躰の配置も御身の好み通りにて可なれば願くは其の雛形を造り給へよとて委員等は立ち去れり。

夫人は勇み立ちぬ、種々の意匠を凝らし、慘憺たる經營の末に苦心の結果見事なる旗を造り出したれば、此れを國會に提出して首尾は如何にと待ち居たりける、國會の委員等は相會し相議しこれを以て合衆國々旗に採用すべき樣報告せり、夫人の喜び知るべきのみ、かくて夫人は國會委員に多數の國旗を造り出すことを命ぜられぬ。

面目光榮は身に過ぎたり、其の責任亦た甚だ重からずとせず、顧みて纎弱の身果して此の大任に堪へ得るやに至れば剛氣の夫人も暫しか程は危ふまざるを得ざりき、多くの國旗を造るには少なからぬ材料も要すべく、多くの材料は少き金の得て購ひ得べくもあらず、夫人の胸を惱ましたるは此の一點なりき、乍去天は自ら助くるものを助く、思ひ掛なき多額の金員は思ひ掛けざるに夫人の卓上に落ち來りぬ、這は夫人の叔父ロッスが他の委員と分かるゝや獨り急いで家に歸り、速かに金員を調へて夫人をして會計の不如意を嘆ずるを勿らしめたる也、且つ叔父は此の金員を以て費府に在る旗布をば悉く買ひ占むべきとを告げたり。德孤ならず必らず隣あり、夫人は心を決してこの大任に當りぬ。

夫人は既に充分なる金員あり、充分なる材料あり、前

には輝く希望あり、後には寄るべき叔父の同情あり、たゞ己が成功を思ふの外他に慮るべきことてなし、心樂しからざらんや、氣勇まざらんや、夫人は拮据精勵、只管此の大任を全うせんが爲めに盡しぬ。古き記錄は堆積せる古紙の中より發見せられたり、其の記錄に曰はく『デラツエーア河艦隊の旗製造の爲めベツシー、ロツスに十四磅十二シルリング二ペンス（我が二百五十圓許り）を支拂ふべきこと』とは一千七百七十七年五月國會が會計に命ぜし處なりしなり。

星移り物變り、今日に於て夫人の手になりたる原始の國旗が如何なり往きしや知るに由なく語るに人なきは返すくも口惜しき限なり、傳說はいふ、こはレース埠頭、又は其附近に繋ぎ居たる艦檣により試しの爲め微風に飜へしたりきと、遂に其確かなる事實を詳にせず、然りと雖も當時兵馬倥偬の際、志士一身を國家に献げて死を鴻毛の輕きに比したるの時、幾多の興味ある事蹟も可惜堙滅して逸失せしことの多かりしを知らば、今日に於いて此事實も遘として稽ふべからざるを怪まざるべし。

功名の花は唯り戰場のみに限らんや、愛國の事蹟豈に男子の專有のみならんや、苟くも誠意誠心義務の道を辿らば光榮の冠は期せずして頭上に落ち來らむ、貴賤を問はざる也、男女を論ぜざる也、光榮ある合衆國々旗を仰ぎ瞻るものよ當時の活ける歷史を思ふと共に、慘澹たる意匠を此旗の爲めに凝らしたる無名の英雄あることを記臆せよ。

（二）嫩葉の栴檀

フローレンス、ナイチンゲル孃幼少の時、孃が家の獵犬足を傷けて其苦痛堪へ難く見へたり。醫師を招きて治療を請はんとするも犬は傷の痛みに猛り吠え、近づかば嚙み喰はんとて醫師も近くに由なく、其疵を撿する術もなし、如何はせんと當惑の色を現はして匙

を投じける折しも、幼きフローレンスは絕えて恐るゝ景色もなく、獵犬に近いて紅葉の如き手を延べて頭を撫でゝ哀はり、宛から慈母の赤子に語る如く

『可愛さうに可愛さうに』

といひつゝ怒り狂へる獵犬を鎮めたれば、犬も綿羊の如くに柔和に宛も足の痛みを訴ふるものゝ如し、かくて醫者は漸くにして獵犬に近づき其疵口を撿するの機を得たり。醫師曰く

『疵淺くして骨に達せず唯だ甚く脈傷せるのみなれば布を熱湯に浸し疵を蒸して腫を引かしむべきなり』

『そはいと容易の事なれば私の手にても善く爲しうべき事なり』

と、湯を沸かし、甲斐々々しくも獵犬の疵口を蒸し、麗に晴れ渡れる春の一日を獵犬の看護にぞ費しける、フローレンスの最初の患者は足を傷けにし獵犬なりき。

クリミヤ戰爭の當時幾萬の壯丁病疫に呻吟せる時卒先して天外の異域に病者を看護し、幾千の勇士に感謝の涙を以て天使とまで稱せられたるフローレンス、ナインテンゲールの愛腸慈眼は既に幼少のときに胚胎せしものなり、一頭の獵犬にだも忍びえざる涙こそ孃の一生の大事業を成さしめし源なりけり。

ビスマーク公と其夫人

梅　馨　生

余は前號の紙上に獨逸婦人を說き、兼てビスマークと其の夫人の情交を叙したりき、然るに尙ほ語るべき多くの事を殘せり、公と夫人との情交の親密にして公の夫人を思ふと如何程切なりしかは、夫人卒りて後ち公の失望落膽亦た前日の人にあらざるによりても知らるる事なるが、夫人の尙ほ疾て床に在り病勢漸く迫りて生死の間に呻吟し幾多の名醫は匙を投じて施すの術な

きを嘆じ家人親戚は額を集めて其呼吸を窺ひつゝありしにも拘らず、公は夫人に萬一の事あるべしとは夢にも思はず、枕頭を離れずして偏に其の全快を祈りつゝありき。蓋し此の忠實無二の生涯の伴侶が、自己を棄てゝ此世を去るべしとは、公の假にも信ずる能はざる所なりしなり。

「四十七年間常に余の傍に在りて余を導けるものは彼女なりと」とは、夫人の死後公の人に向て語れる所なり、人は妻は夫の半身たるべきを説けども、公の如く眞に夫人を認めて割くべからざるの半身となしたるものはあらず、抑も公の妻を娶らんとするや、初めより伴侶と云へる情の深く其の心を動したるが爲めなりき、千八百四十四年其の親愛常ならざりし姉マルビナの他に嫁するや、公は掌中の物を奪去られたるが如く、當時早已に政治上の大希望を抱き且つ其父の所有地を管理すべき職務を有せしにも拘らず、物淋しさに堪へずして、一年の後ち其父の歿するに至りては、茫然として殆と自失せるが如く、當時其姉に與へたる書中に「余は孤立恃むべき人なし是非とも近く妻を迎へざるべからず、余は實に寂寥にして人の戀慕しさに堪へず」云々と書送りたるとすらあり。

公の伴侶を求むるが爲めに亂れたる心事は、鹿の其友を呼ぶよりも切なるものありき、されども公には擇ぶ所あり、固より徒に其痴情を滿足せしめんと願ふ匹夫にはあらず、公は有ゆる交際場裏に出入し國中年頃の佳人は殆と知らざるものなかりし程なるも、一人の公が注意を惹くに足るべきものなく、其の己に心を寄する婦人をさへ輕蔑して顧みず、容易に婚姻談等は起るべくも見へざりしが其の一たびフローレインと會するや、公の運命は立ろに定まれり。公は一見して其の滿腔の愛情を傾注すべきは此人を措て他に之れなかるべきを感じ、又た其の意中の人も確かに自分をば愳

からず思へるとをも信じたり、兩個の心相唱へ相和し而して「狂ビスマーク」がパットカマー家の拒む所となりしにも拘らず、遂に難關を排して能くビスマーク流を以て其の戀愛するの妻をも得たりしとは前に說けるが如し。

「フローレインは實に理想の獨逸婦人なり」とは公の誇顏に其姉に書送りたる言なり、理想の獨逸婦人とは何ぞや公は之を解釋して曰く「彼女は全然家政的にして而して妻として最も忠實に、何時にても夫のために其身を犧牲にするを厭はず」と余の前號に獨逸婦人の特性として說明したる所實に玆に存す。

「我が妻の我に如何ありしかは到底卿等の思及び得る所に非ず」とは公の人に明言したる所にして眞に公と夫人との情交の琴瑟の如く又た膠漆の如くなりしは其の互に往復したる手紙の一字一句に於て之れを見るべく、而して公は遠く魯西亞に在るの時又ポルーア或はガスティン等に在るの時と雖も、夫人に寄するに其の好む所の花を以てし幾年の後も曾て其の結婚の往日を忘れたるとなく之を紀念して生涯に幸福の日光を齎したる日なりと云へり。

千八百五十九年公は普耳西亞公使として聖彼得斯堡に駐在中、四月一日附を以て夫人に送れる書中に曰く「余は今や十二年目にて始て卿と離れて余の誕生日を迎へたり」と其後の書中には曰く「此地到る處の風景實に美しと雖も卿と別れて獨り之を賞するに忍びす」と又曰く「願くは維也納よりサルスパーグに至り卿と共に蜜月旅行を再びしたく思ふなり」と而して公は戰中と雖も夫人の消息を聞くを無上の樂とせり、夫人の佛國を惡むと實に蛇蝎の如く、且つ之を明言するを憚らざりき、セダンの戰爭の前後なりけん、公偶まアルベート伯と陣中に會食の際伯の問に對して「我が妻は至極健全なれども其の怒氣に惱むもの丶如し、彼女は佛國

の全く亡び佛人の悉く鏖殺されんとを願へり」と答へ、之は彼女よりの手紙なりとて讀上げける中に左の文句ありと曰く「妾は良人に送るに一卷の聖書を以てせん佛國に在ては良人の到底之を得ると能はざるべきを思へばなり、其の詩篇の中には如何に佛國の滅亡に關する預言の記載されたるかを見給ふべし、神を無視する人民は此地球の表面より遂に亡び去らざるべからず」と。

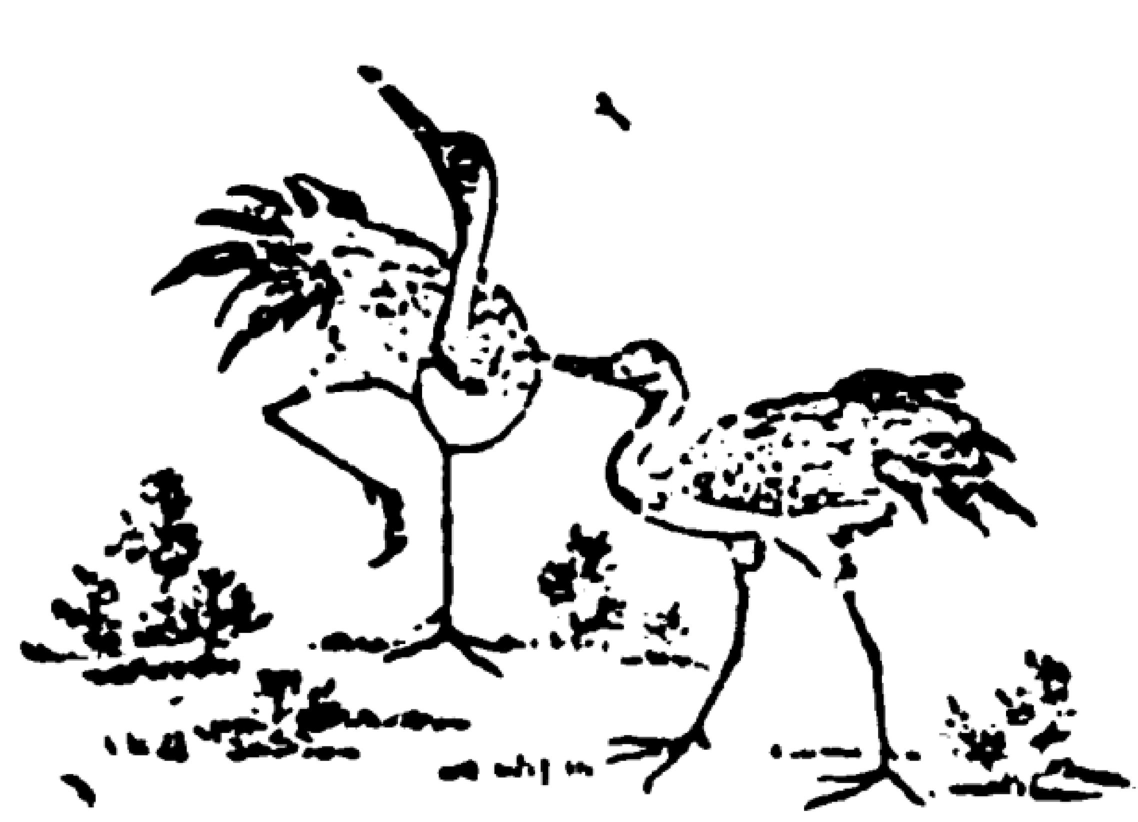
左れど其全心を良人に捧げたる夫人の眼中には公の外他物を止めず、此の不世出の良人を愛し之に事ふるがためには忙しく此等の他國に關する感情及び議論等を存するの餘地なく殊に公の一朝其權力を失して多年其一手に握りたる宰相の印綬を解かざるべからざるに至ては、痛恨亦た他を省るの暇なく、互に相慰め相勵まし多事なりし過去を話して其晩年を樂まんとせり。

序に少しくビスマーク公の生ひ立をも語らんに、公はプランデーバークの一小村落の先祖代々に傳り來れる第宅に生れたり、父は陸軍に將校たりしを以て公も自ら軍人の氣風を有し七歲にして學校に昇りたれども、怠惰にして課業を事とせず、長じて大學に入るに當ては暴食暴飲爭鬪を好み、遊獵に耽り、講堂に在るよりも酒店に在ると多く、亂暴書生の標本となれり、偶ま一酒店に醉て器具を毀ち巡査を嘲弄せるため、法庭に召喚せらるゝや、公は長き乘馬靴を穿ち巨犬を引て之に臨めるため、大に譴責を受け若干の罰金を課せられたるとあり。然ども父の死後公は全く別人の如くなりて頗る眞面目に思慮深き人となれり、能く其の資産を保護し耕作人及牧夫等を監督し其收獲を賣て利を得るに妙に、亦能く貧民を恤み事を處して明快此の小天地に在りて他日大國民を御すべき術を覺れり。

而かも公の亂暴なる性質は全く止みたるには非ず、一日親族の年若き婦人等が一室に會合しつゝあるを窺ひ

私かに四匹の小狐を引き來り、卒然之を室内に放ち貴婦人等の驚き走て小狐の荒れ廻るに任せ、亂暴狼藉室内の器物を破壞し盡したるとあり、又或時は其の知己の士官等を酩酊眠に至らしめピストルを耳邊に放て之を覺醒したるとあり、又曾て一地方の舞踏會に出席し、三十哩の長程をあるきづめにて夜をあかし家に歸れるとあり、然とも此狂少年は好で歷史を讀み詩歌を誦し政治を研究し數國の國語を解しゲエテを好みセキスピーアを愛せり、而して公は樹下に横臥し喫煙の傍ら其の愛國の精神を鼓舞すべき詩句を暗誦したる時を以て、年少時代の最大快樂となせり。公の素養は實に此裏にも存せしなり。

「狂ビスマーク」は決して狂せるにはあらざりき、大人物となるべきもの丶爲す所は尋常人のはかるべからざるものあり、而して年若きフローレインの人言をも省みず、公を愛して其半身たらんとせるは誠に見る所ありしが爲めにして、夫人年漸く長じて益其の公に於て誤らざりしを認め、公の名愈高きの日は夫人は全く滿足して公を崇拜したり、夫人の公に於ける此の如し、而して其死後の今日に於て尚ほ夫人を思ふと生ける人に於けるが如く近代の歷史上に最も活劇を演じたる此大人物の記憶の中にフローレインの面影の外、亦た他物を有せざる公の、其後を追ひつ丶あるを見る。英雄涙ありとは公の如きをいふべきか、よく剛によく柔なる夫妻の情交は公に於て見ることを得べし。



談叢

火ふき竹

獨歩

この頃は無音にのみ過ぎつ。書き送るべき物語なきやとの、角ある御言葉きくもつらし、無きにあらず、わが怠けしなり。怠けしには理由あれど言はじ。たゞ君がほゝゑみ玉ふにまかすべし。

曩の日の吾文を、一月二十日の夜の團居にて讀みあげ玉ひし由、其をり泣きしものは無くて笑ひしものゝみなりとは、本意なし。彼物語の底にひそめる意、深くもくみ取り玉はざりしやうなり。さては又、わが文の拙なかりしや、いづれにもせよ、彼物語の意は笑ひてのみ止むべきたぐゐにあらず。

兎も角、此度はわが近頃聞きし話のうちにても、取わけて罪なく哀ふかきを書きはべりぬ。次の團居のをり、讀みあげ玉ひなば、母上叔母様などは涙うかべ玉はんに。それもわが文拙くば甲斐なけん。いざ心をこめて書きはべるべし。

維昌といへる稚子ありけり。この子の母なる人は今歳四十七才。この物語をわが聞きはべりしは此母の口よりなれば其心して讀み玉へ。

維昌六歳の頃とか。或日いつもの如く家をいでゝ近邊の巷を遊び暮しつ、ゆくりなくお瀧てふ老婆が店にいたりぬ。こは大福餅など並べ、往來の人の立寄りて茶飲む爲に細長き腰掛二つばかり据え、片隅に茶釜など据古たるを置きし、小やかなる掛茶屋なり。お瀧は其ころ六十あまり、一人の娘を力に、この店を開きてより六とせが間、兎も角もして煙をたて、餅は賣れど半は立寄る人の情にて暮せり。

維昌の父は――町の醫家、醫を業として富み且つ榮え、妻お信との間に六人の子までなし、維昌は其末子なり。家はお瀧の茶屋と左まで隔たらず、維昌がこの店先に來りて、腰掛の角に止まる蜻蛉捕へんとあせりしことも日毎のやうにて。夏の日中は富田家の車井の音かすかに此店にて聞かれぬ。

ころは秋の半すぎ。維昌は茶店の前に立ちて、その怜悧き眼をみはり、茶店の裡をのぞきぬ。この時老婆は茶釜の前に蹲踞りて釜の下を吹き居たるが、火はたやすく燃えつかずして烟のみ立あがり、老婆の呼吸も塞がらむばかりなる、眼には涙ながるゝを掌もて拭ひつ、なほも吹きたつるさま、維昌は稚ごゝろにも氣の毒に思ひてか、つか／＼と内に入りて

「坊が吹いてやらうか、婆さん。」

と聲をかけしにお瀧は驚き

「おや維坊さま、おけむいのに、外に出ゝお遊びなさいよ、婆はけむいから泣いて居ます。」

と眼を拭き／＼笑顔つくれば、

「婆さんは泣いて居るのかい、けむいと涙がこぼれるからいけないね。維坊が一つ吹いてあげよう。」

と可愛ゆき頬をふくらし口先とがらして、茶釜の前に顔さし出せば、

「維坊さま、泣きますと母様に叱かられまするよ。」

と言ひも終らぬに、維昌は煙を眼に入れて、

「けむい／＼。婆さんの處にはひう／＼竹無いのか。ひう／＼竹で吹けばよく燃えるが。」

と涙ふき／＼釜の下を退きてお瀧婆の顔を見上げ、

「ひう／＼竹で吹くとよく燃えるが。」

と物知り顔するに、婆々は可笑しく、

「火吹竹は婆の處に無いで困ります。」

「さうか。」

と維昌は大人ぶりて小首傾けつ、暫らく物を念ずる樣

なりしが、
「坊は後にくるぞ。」
と言ひすてゝ、茶店を立出で、家には歸らで其儘忠藏が許に行きぬ。

忠藏といふは十三の童なれど、はやく母に別れ、父は富田家の世話にて僅かに其の日を過ごす程の身の上ゆゑ、童ながらも富田家の子達を大事にあつかひ、別けても維昌のいふ言葉は何事にも逆はず、蜻蛉釣の相手にもなれば、馬にもなるに、維昌も忠藏無くては日が立ゝぬ樣なりし。

〰〰〰〰〰〰

「維坊さま先達の水鐵砲はもう壞しましたか。」
と忠藏は維昌が渡す一本の竹を受取りて言へば、
「壞はしはしないよ。」
「それで又た水鐵砲ですか。」
「だまつて坊のいふやうにして呉れ。」
忠藏は右手に鋸をもちて、維昌のいふがまに／＼に切、
「維坊さま、これでよう御座いますか。」
「節の眞中に穴をあけるのだ。」
左きゝの忠藏は口元に笑味を湛えつ、
「そんなら矢張り水鐵砲でさあ。」
「なんでもいゝから坊のいふやうにして呉れ。」
忠藏は維昌に逆らはじと、竹筒の底に穴あけて渡せば、維昌は受取りて、忠藏には物をもいはず、走りいでぬ。

〰〰〰〰〰〰

「婆さん、そら持て來たよ、ひう／＼竹を。坊が今、忠藏にこさへてもらつたのだ。」
「まあ維坊さまは。」
とお瀧は暫らく呆れて維昌の顏をみつめぬ。其眼には早くも涙うかべり。
「婆さん未だけむいの。これで吹くとけむくないよ。お前にあげよう。」

老婆は身にしみてうれしく感じ、維昌を抱きて、

「維坊さまの下すつた火吹竹でふくと、もうけむい事はありません、婆は死ぬるまで此ひう〳〵竹で吹きますよ。」

「坊が死ぬるまでお吹きよ。」

「まあ維さまはこれから未だ〳〵百までも千までも生きてお居で御座いますのに、あんな事をお仰つてさ。婆々はもうぢきに死にます、死んだらお道にひう〳〵竹をやります。」

お道とは娘の名なり。

維昌の歸りゆきし後にて、お瀧はお道と共に、稚ごゝろの眞の情を語りて、まことに泣きぬ。

〰〰〰〰〰〰

百までも千までもと老婆が壽ぶきし維昌は翌年の春、七つにて世を去りぬ。野邊をくり終てし日、お瀧は蠟燭三本を紙につゝみて、富田に至り、ひそかに母に遇ひて恥しげに差出し、維昌の佛前に供へ玉はれともとめぬ。母はお瀧の貧しきをよく知れば、氣の毒に思ひて受取らぬに、老婆は泣く〳〵火吹竹を取出して、事の始終を語りつ、

「私はこれまで人樣のお情で日を過して居ますが、維坊さまの火吹竹くだされた時ほど、しみ〴〵うれしく思つた事はござりません。これは婆がほんの志で御座りますれば、佛前に供へくださいませ。維昌さまよりも此婆がうれしふ思ひます。」

母は初めて火吹竹の事を知り、いまさら我子可愛ゆく、いぢらしく、婆と顔見合はして暫らくは物をも得いはざりき。

其夜維昌の佛前なる此三本の蠟燭の志、取わけて母には哀れに見られしとぞ。

〰〰〰〰〰〰

老ひたる母が亡せにし稚子の上を語りいづるこれに增、

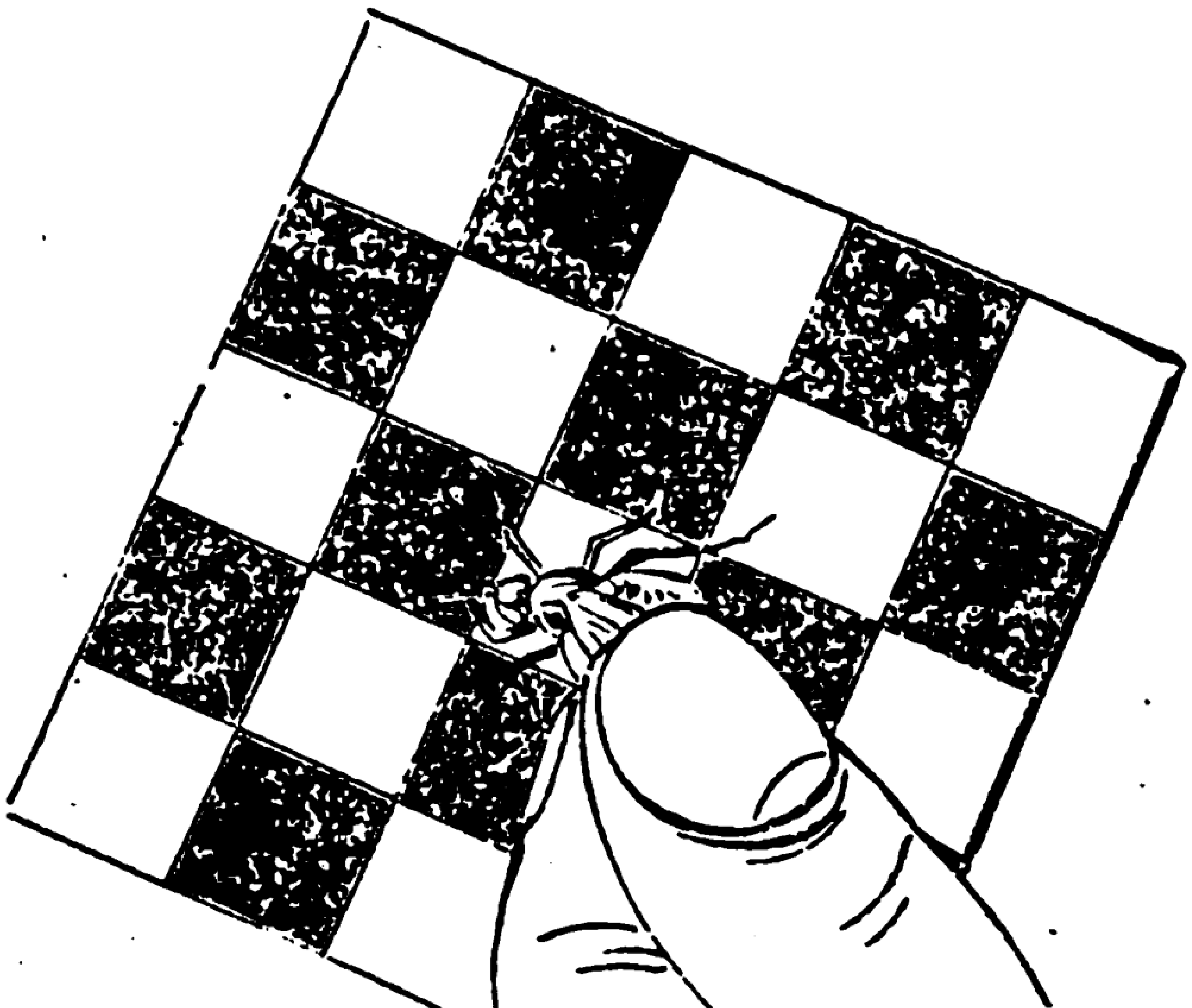
す哀はあらじ。あの兒が何歳のころ斯ることはべりきなど事細かに物語りする、その言葉に華こそなけれ、聞くものゝ心を動かすは、巧なる小說も及ばぬ處あり。圓居の君達も、わが此文讀みては泣き玉はぬとも、此母が口づからの物語きゝ玉はゞ、あはれとおぼさずやは。

蟲の力

R. Y. 生

凡て小さき蟲が割合に恐ろしき力を持つ事は人の屢く口にするところなれど、余は未だ一度も實際に之を見たる事なかりき。されば何時か是非とも之を試みばやと思ひ居りしに、恰も昨日偶然蠅と蟋蟀とを捕へしにより、直ちに試驗に取りかゝりぬ。

余は先づ第一に蠅を引き出したり、蓋し此の蠅は時々砂糖壺より砂糖を盗み出し、又菓子皿より羊羹を掠めし嫌疑ありしによる。而して裁判の結果證據不充分にて確かに窃盗犯に該當すべきや否やは知り難かりしも、兎に角其の盗賊の一類にして殊に情を知つて之を

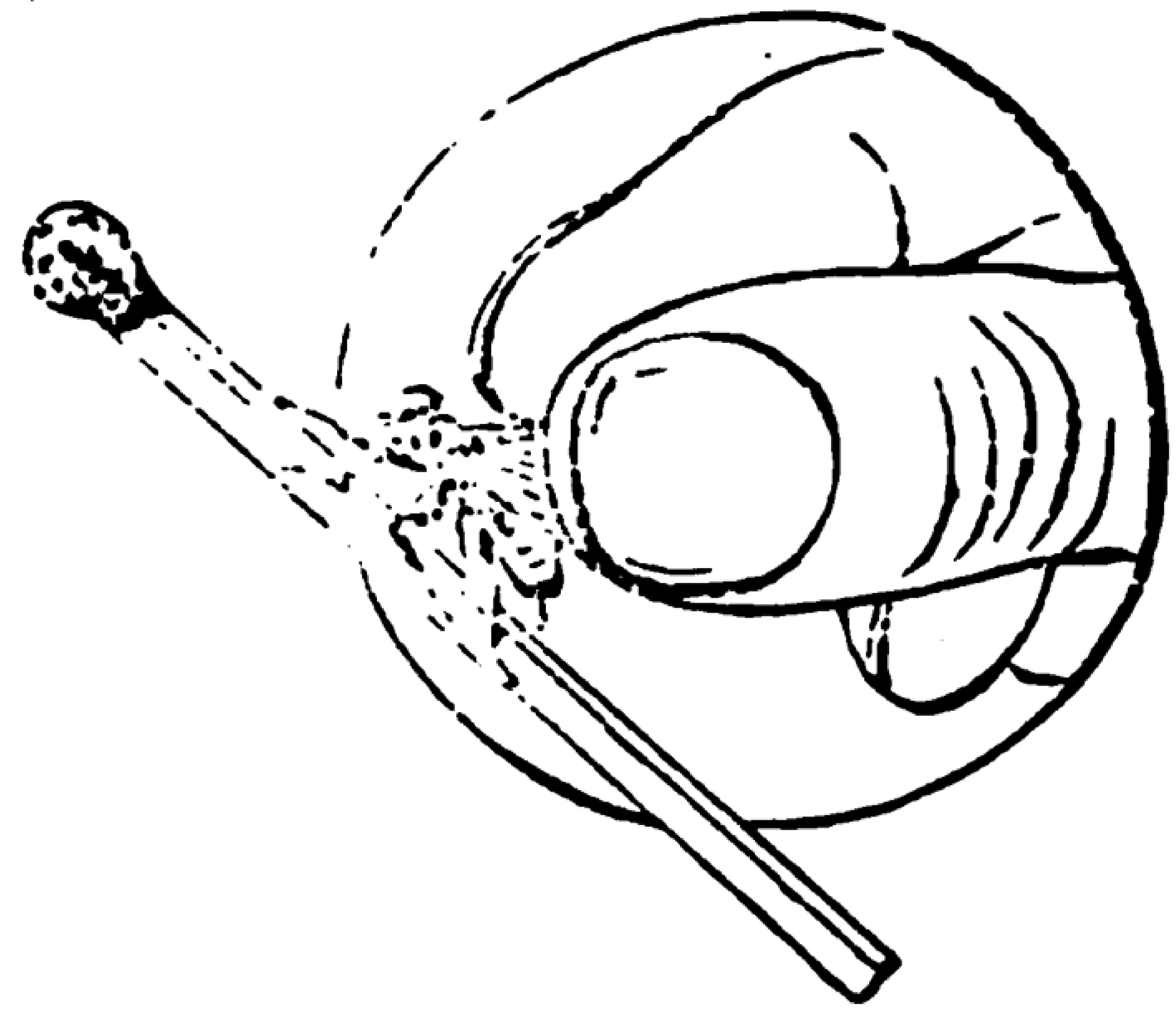


第一圖

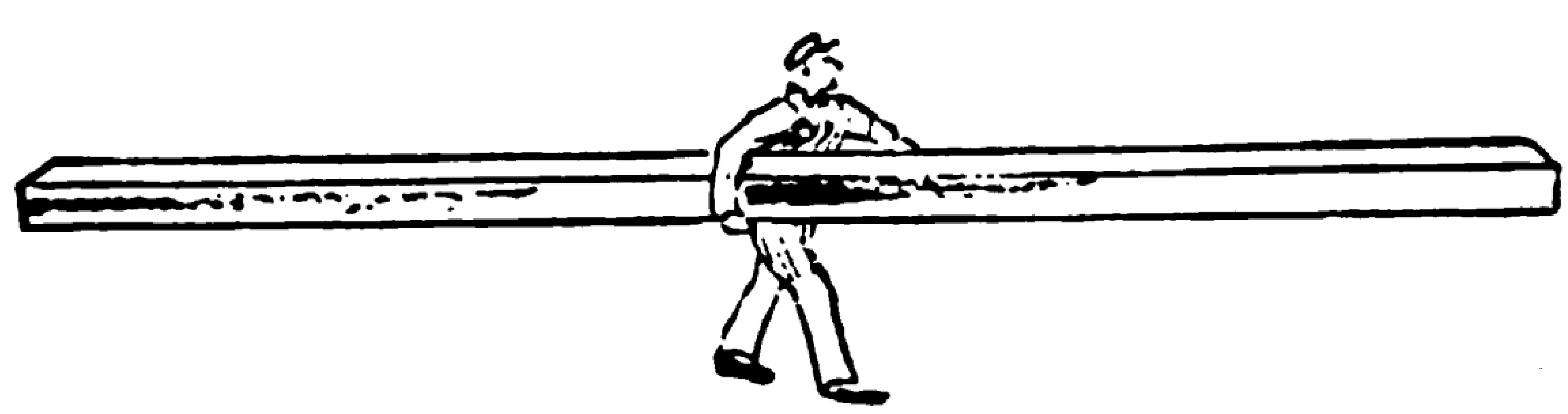
隱匿したるの罪跡さへ明かなりしにより、善い加減法螺第八百條に照らし、輕懲役一時間監視三十分に處し、机の上にて規定の勞役に服すべき旨宣告したり。

宣告畢るや余は直ちに件の蠅殿三郎に命じ、紙屑を丸めて之を曳かせんとせしが、動かざること山の如く、

之れにては未だ亜も過ぎる故ならんと思ひ漸次小さくして豆粒ほどになせしかども、蠅殿尚之を曳くの勇氣なかりし、玆に於て余は蠅の全く物を曳く力を有せざることを見たり。然れば今度は其の物を擡ぐる力を試みんとして、次郎が幼穉園にて造り來りし市松形の折紙を其の足の下に置きしに、蠅殿少しも惱む色なく、安々と擡げて剩へ縱横に之を振り廻しぬ。尤も此は余が手より離れ去らんとして、全力を盡してアセりしならんかなれども、其の狀恰も淺草の玉乘にて、小供か大なる盥を自由に廻すが如く、調子を取りて動かすさま、如何にも面白き事の上なしなりき。第一圖に示せるは乃ち其の寫眞にして、紙の大さは殆んど蠅の廿五倍あり、之を人に比較する時は五尺の身の丈の人が二十間四方の敷物を自由に振り廻すと同じ割合にて、到底當人の力のみにては爲し得べき事にあらず。さるを蠅殿は少しも苦しき樣子なく。輕業然玉乘乎として振廻はせしは、大力無双小錦、鳳凰も宜しく三舍を避くべしとや稱せなん乎。



第二圖

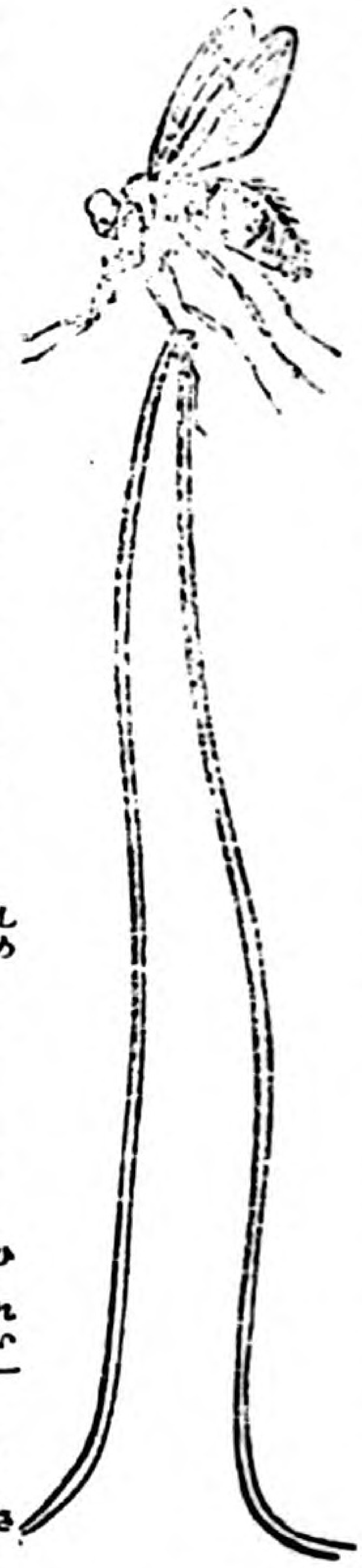


第三圖

是にて蠅の力の大躰を知り得しかば、今度はマッチを一本取り出して、よもや是をはと思ひつゝ摑ませしに、始の中こそ擽々にして逃げ廻りたれ。羽を捕へて否應なしに足の傍まで押し付けゝれば、蠅殿斷然決する所ありしと見え、ヨシと云はんばかりに握りしめて八分間ほど離さゝりき。面して其マッチの

長さは蠅の躰の七倍なりし故、之を人にすれば丁度、尋常の男が三丈五尺の大丸太を小脇にかい込んで突つ立ちしと同じ事なり。即ち第二圖に示したる力の比例は第三圖に示したる力の比例に同じ、豈に驚かざるを得べけんや。

第二の試驗は之にて畢り、時間も丁度三十分を經過したれば、一先づ休憩を命じ其の精勤の賞として、砂糖一塊を與へしに、蠅殿捕はれの身をも忘れて、嘗めるは〳〵忽ちに嘗め盡くして、直ちに例の如く前足を合せては擦り合ひ、後足を合せては擦り合ひ、大分恐悦面をなしはじめたり。之にて前三十分間の勞苦も帳消しとなり、元氣も餘程回復せし樣子故、余は又第三の試驗に取りかゝりぬ。第三の試驗とは四圖にて上に示したる如く糸を足に結び付けて飛ばしめし事なるが、讀者先刻御承知の通り蠅の脚には比較的非常に長き毛の存する事故、糸を結び付くるためには約廿分程の時間を要し、余の指も大分疲れたる如く蠅の足も亦餘程疲れたる事ならん。然れば或は之がために蠅殿折角の元氣を墮して其のまゝグニャリと參りはせずやと氣遣ひしに、案外にも余の手の其の羽を離るゝや否や、一打強く羽ばたきして天井遙かに舞ひ上りたり。之が若し上野の公園か由井ヶ濱にて、蠅殿、鶴かスペンサーに身を變へたらんには、やんやの喝采天地も破るゝばかりなるべきものを、悲しや四疊半の小座敷に見物は余一人の事なりし故、御本人は大々的得意なりしならんかなれども、褒

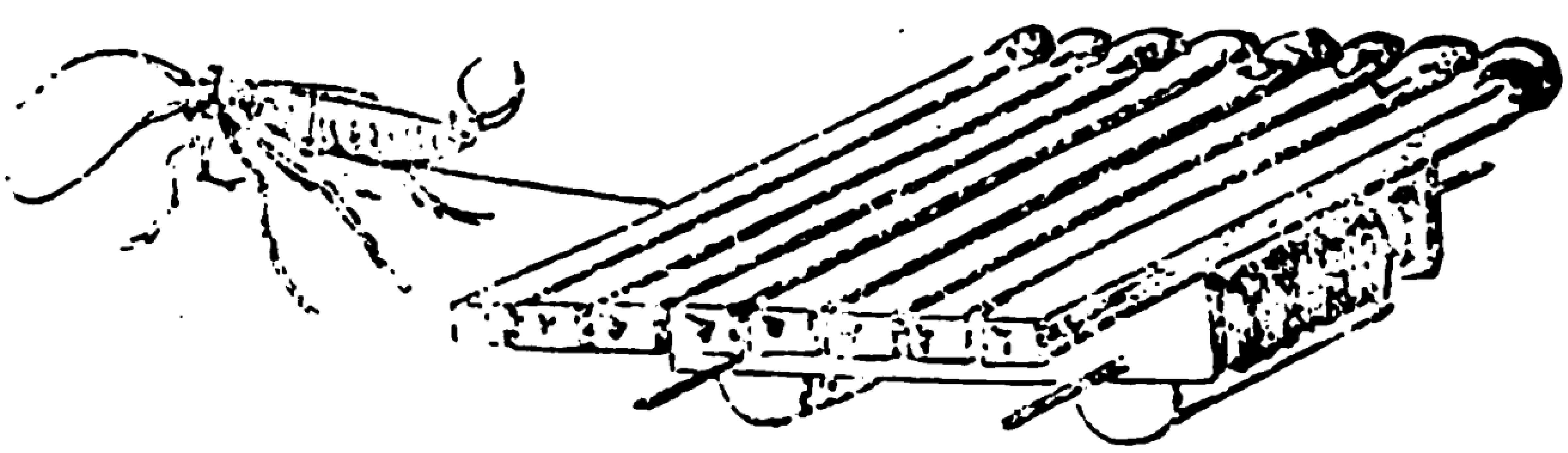


第四圖



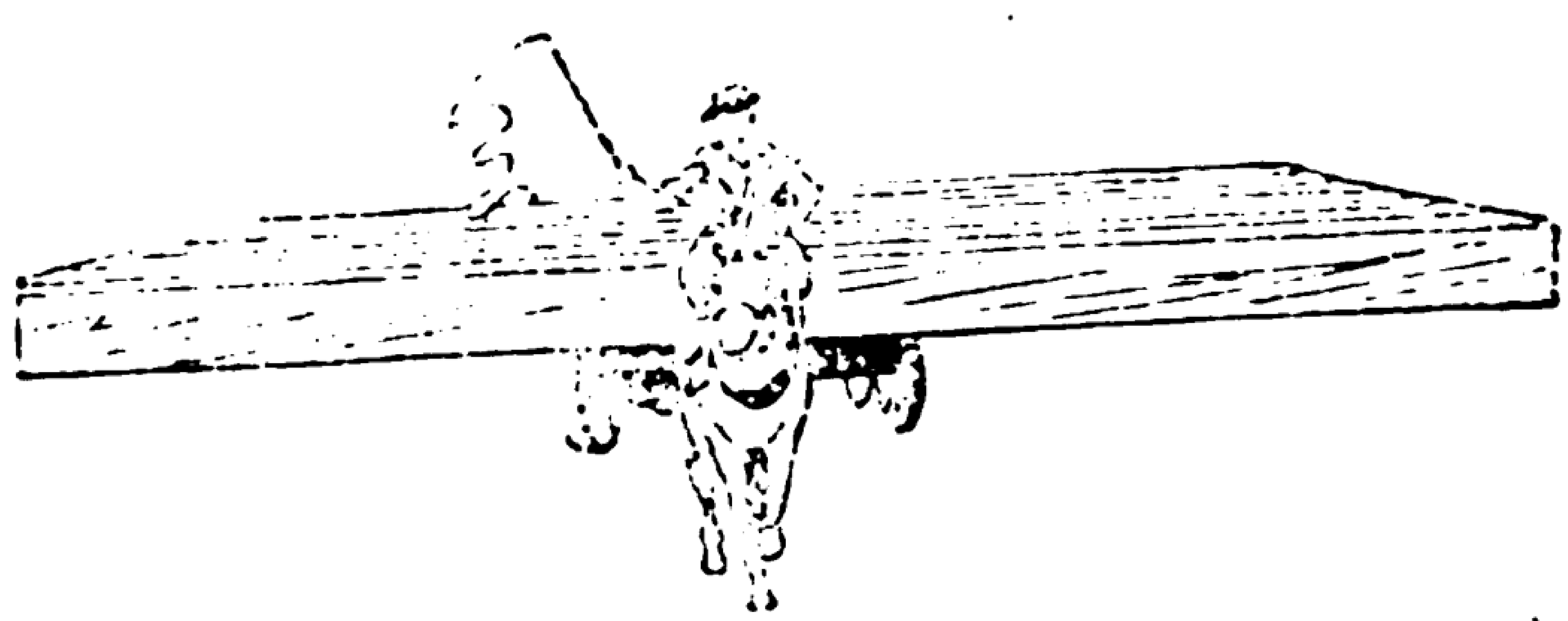
第五圖

むるものとては只の一人もあらざりき。



第六図

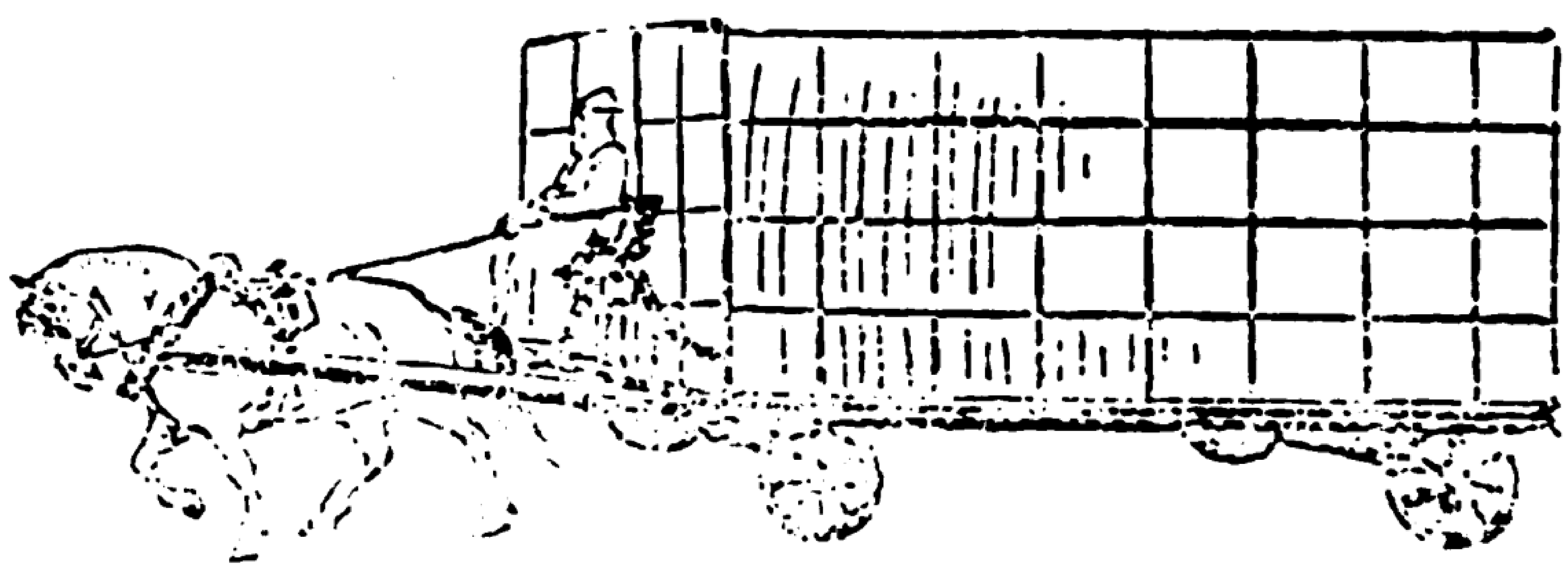
扨又例の如く余は之を人の力に比較せしに、糸の長さは丁度蠅の廿倍ありし故、色々考へたる後漸く第五図に示したるが如き比較表を作りたり。即ち蠅が糸を引きて飛び上りしは水夫が二丈有餘の碇綱を持ちて、之を自在に廻轉せしむると同じきなり。玆に於て余は益々蟲の力の實に驚くべきものなる事を知りぬ。殊に零點を持ち來りて其の目方を比較するに當り、此の感念深ふして暫しはアッケに取らるゝを禁ずる能はざりき。即ち最初蠅の目方を秤り、次に紙、糸、マッチを秤りしに、糸は左までにあらざりしがマッチは蠅の四倍、紙は其の十倍ありき、然れば人の目方を通例十六貫とする時は、今蠅の擡げたるものは、一寸八十貫より百六十貫に當る割合なり。怪と云はん乎、奇と云はん乎、余は寧ろ之を許するに語あらずと云ふを以て適當なりとせん。



第七図

此にて蠅の試驗も畢りし故直ちに特赦放免し、此度は瓶の中より先に捕へ置きたる蟋蟀を取り出したり、蓋し甲蟲類に屬するものは、一般に他の昆蟲よりも力强きものなれば、此にて又一試驗せんと思ひしなり。而して早速太夫身仕度に取り掛らせんとせしが、中々狡猾にして手の中にさへヂッとして居る事なく、彼方に走り此方に拔け、稍ともすれば逃げ去らんとするにより、

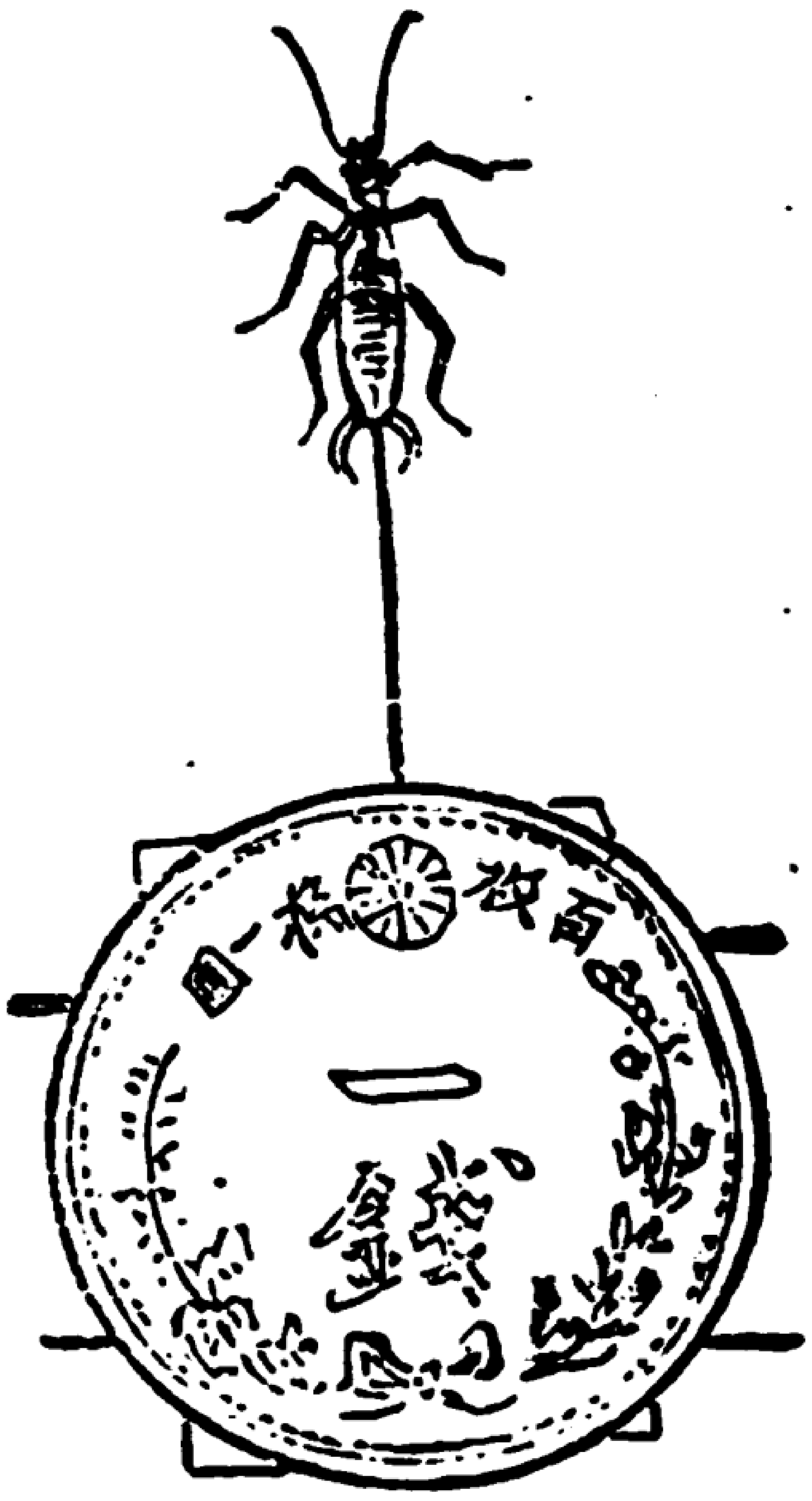
餘儀なく余は紙にて之を包み、少しは殘酷の様なりしかども、無理に首丈け引きずり出して漸く糸を結び付けたり。斯くて名刺の古にて荷車を造り。鉛筆の芯を



第八圖

拔きたるに針を通して車とし、之を太夫に曳かしめしに平氣の平左で飛び廻り居る故、今度はマッチを一本づゝ車の上に載せて、遂に第六圖に示せる如く、八本まで積み載せしが、太夫は尙元氣よく机の上をアチコチ曳き廻りたり。茲に於て余は又其のマッチと蟋蟀とを秤に掛けしにマッチ八本の重さは合せて蟋蟀の軀量の廿四倍なる事を見出したり。而して其の長さはマッチ一本が蟋蟀の四倍に當れる事故八本にては卅二倍の勘定なり。之を馬に比較する時は第七圖に示したるが如く、若し又其の材木を四角に切りて積む時は、當に第八圖の如きものとなるべし。世界何れの處に行きなば斯る重荷を安々と曳き行く馬あるべき乎。否啻に馬のみならず、如何なる獸と雖も恐らくは之に勝れる力を有するものはあらざらん。

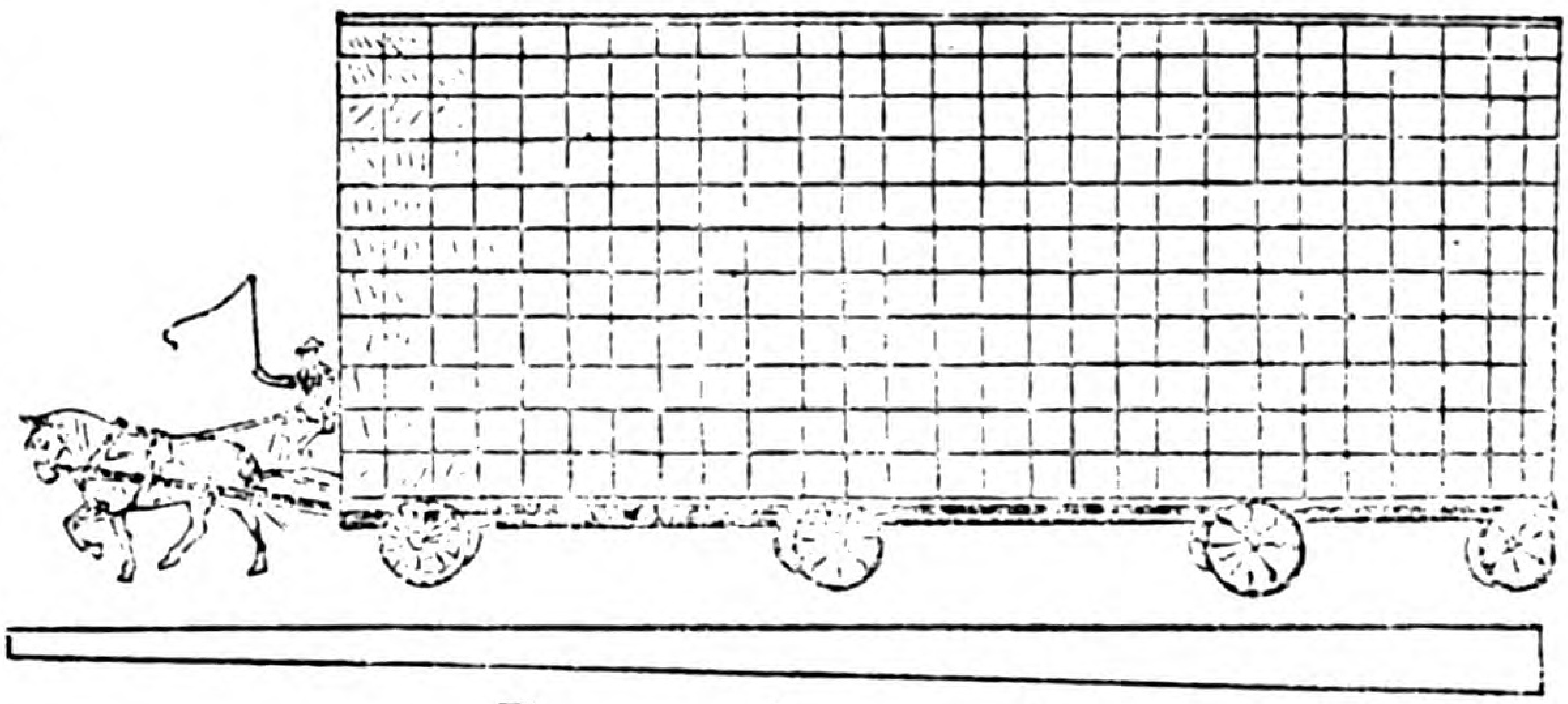
余は蟋蟀の力は決して斯くの如きものゝみな



第九圖

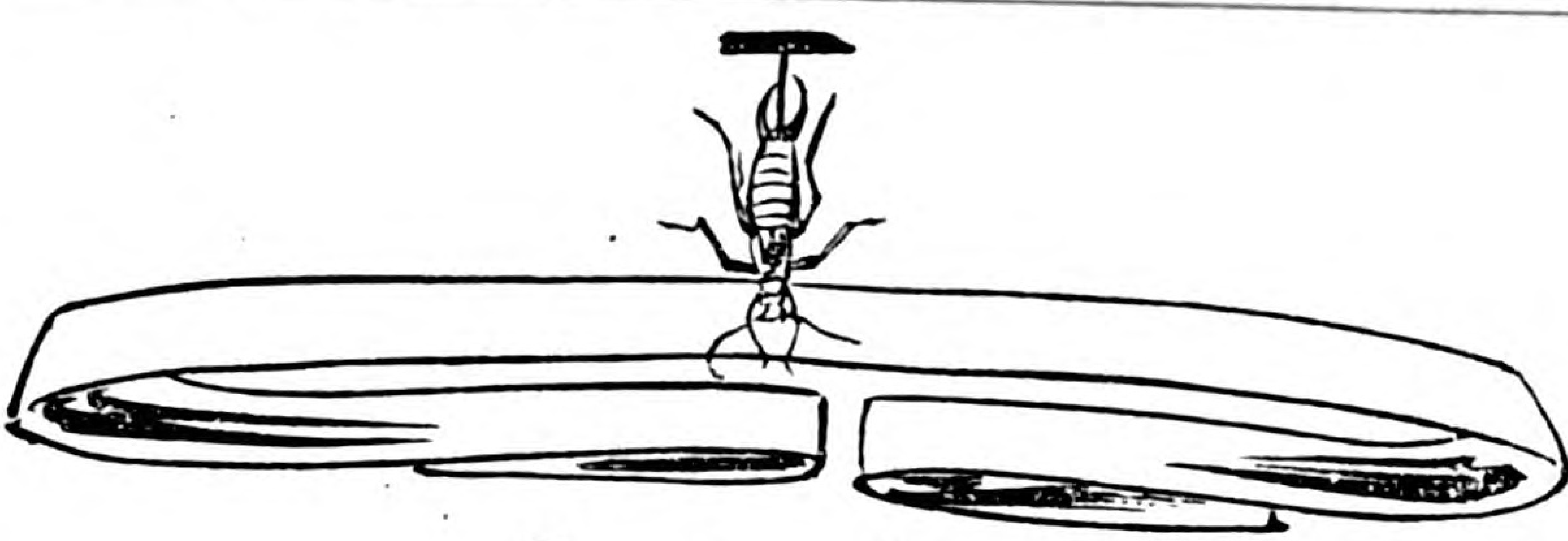
らず、其の荷の種類と積み方によつては、或は尙多くの重荷を曳きうべしと思ひし故、今回はマッチに更ふるに一錢銅貨を以つてし、机を少し傾けて、後より一寸押してやりしに、ヨモヤと思ふたる余は實に一驚を喫せざるを得ざりき。蟋蟀は余が押すと同時にそろそ

ろ歩み出して、ヨロ〳〵ヨロケながらも途に机の端まで曳き行きたり。もとより机を傾けたりとて僅か一二寸の事なれば、車が自然に滑り下りる等の事はなく、全く蠼螋が其の力によりて曳きしなり。之を又例の如く馬に比較する時は馬は實に第十圖に示したるが如き、非常なるものを曳かざる可からず、其の目方の比例は丁度銅貨は蠼螋の二百五十倍に當ること故、一匹の馬が二百五十四の馬を曳く割合なり、殊に



第十圖

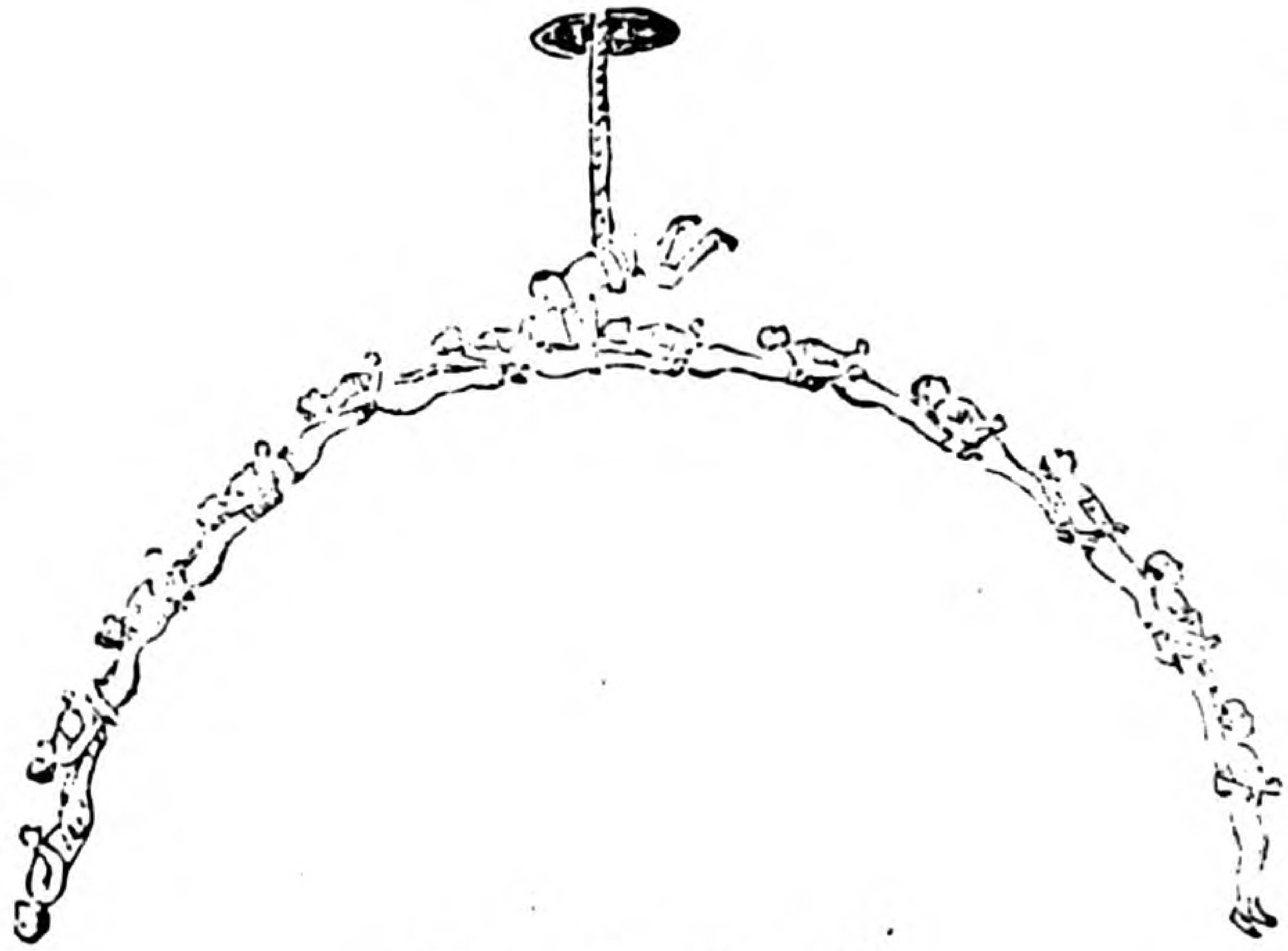
其の荷車の重さも蟲の躰の四十六倍あるほどなれば、如何に道が坂なりとて、此は到底其の力の及ぶべきにあらず。試に湯島の切通しか神田の明神あたりに行きて、如何に通運の荷馬車が其の目方に十四五倍せるものを曳きてすら倘汗タク〳〵と悩み居る乎を見ば、蠼螋の力の大なる程度も幾分か了解することを得べけん。



第十一圖

最後に余は御客様方御宿元への御土産として、千番一番のカ子合なる輕業をなさしめたり。即ち太夫の尻に糸を結びて、洋燈の釣手に逆さに

つるし、西洋紙の細長く切りたるものを其の頭の處に持ち行きたり。然るに太夫逆さつるしの苦に堪え兼ね、此の紙にても傳はりて逃れんものと思ひてか、前足二本にてシッカと之を握りしにより、余は直ちに紙を持つ手を離せしに、蠼螋太夫持つたまゝにて遂に之を離さゞりき。玆に於て余は早速、其の紙の長さを計りしに丁度蟲の躰の廿倍あり、其の重さは十二倍ありたり。人に比較すれば比例は恰も第十二



第十二圖

圖の如くにして、後之を屢余の友人に示せしに彼等は遂に之を眞とせざりし程なりき。

此にて余の試驗は畢りぬ、而して其の結果として余は余のノートに左の答案を書き記したり、則ち

世界にて尤も力の強きものは人にあらず獸にあらず渺たる一個の昆虫なり。

家庭

食物の話（承前）

前號に於て化學的分解につき蛋白質、脂肪含水、炭素、鹽分、水分の大別あることを說きたるが、されば何れが滋養分に富むからとて單に其物のみに偏寄らざる食料を撰擇すること最も必要なり又た以上何れも躰の實質を作り或は費耗を補給するに於て各効用あるものにて例へば蛋白質にのみ偏すれば窒素の供給は十分なる

も炭素鑛物質には不足を告げ脂肪澱粉のみに偏すれば又た共に一部の營養を缺くに至り或は植物性食物に消化し難き細胞質を有すればとて澱粉を特有し其の水分は血液を適度に稀薄ならしむるの効用あり又た滋養分に富むとて動物性食物に偏すれば壞血病を惹き起す惧あるを以て偏寄るべからざること誠に明白なり而して滋養分の量は躰質健康年齢時刻季節風土職業習慣等に依り各其補給する處を異にし其滋養分量の割合は適度ならざるべからず即ち躰質に於ては神經質、多血質、膽質、淋巴質等に從つて補給を異にし强健なる者は汁虛弱なる者より、又た幼者は躰の實質を增進する爲めに何れも多量の滋養分を要し老者は衰頽を補はん爲め特に滋養質を撰擇するの必要あり朝に淡泊なる物を用ゐ夕は躰温保持の爲め滋養質の多量を要し山間の住民は鹽分を多く要する等食品の分量配合調理に付き注意すべきなり

さて右の如く己れが健康の度を計りて食物の撰擇を爲すこと必要なるが如何なる物が肥肉を增加し元氣を興進せしむるかといふに化學上よりして(一)肥肉を作ることに於ては硝酸鹽(二)神經及腦髓を作るに於ては燐酸鹽(三)元氣を增進するに於ては炭酸鹽其の主要なる動作を爲す

(一) 此の原料は主として穀物及動物の供給する處にして其の割合は三四、六「プロセント」より六、五「プロセント」の間にあるが穀物中小麥は一四、六大麥は一二、八裸麥は一七、〇豌豆及蠶豆は凡二五、〇にて動物の肉中「ハム」は三五、〇「プロセント」豚肉は一七、五にて魚類は其割合甚だ低し

(二) 神經及腦髓を作るに於ては魚類は他の食物に冠たる程にて三乃至七「プロセント」の割合なり就中鮭は六乃至七を含有し大麥は二、四裸麥は三、〇小麥は一、六蠶豆は三、五を有す動物の肉は凡そ二「プロセント」

にて唯「ハム」のみ四、四を含有す果實にて波斯棗は四、五の多量を含有す

(三) 澱粉、砂糖、脂肪の類を主とす而して尙食料の撰擇に就て注意すべきは(イ)消化(ロ)肥肉(ハ)不消化物の三者にして

(イ) 消化の遲速は其食物の種類に依り各〻差異するを以て消化力速にして且つ滋養分多き食物を喫することに注意すべきことは普く人の知る所なるが其著しきものを擧ぐれば林檎は一時間半にして消化し甜菜乾酪は六時間を經過せざれば消化することなし

(ロ) 何れの食物たるを問はず之を喫すれば肥肉を新陳代謝せしむるの働を與ふるものにして澱粉質の食物を爲すものと動物の肉を喫するものとを比較する時は後者は前者よりも勞役堪ゆるの力に乏しきものなりといへば前に述べたる如く肉、菜其他雜食せば其中に於て彼此各其短を補給することを得べし

(ハ) 食物の不消化は其食する所の分量及其の種類に依るものにして特に調理如何に關す米の粉末及小麥等に存する炭水化物は〇、八乃至一六「プロセント」黑麪包馬鈴薯の類は八乃至一八「プロセント」の割合を以て不消化なる物躰を其儘躰外に排泄することあり一躰食物は多量を用ゆれば不消化に了る所の分量多く又植物性食物は動物性食物に比し人の多く食するものなれば其不消化なることも從つて多し彼の農夫が大量の食をなすは米穀野菜等植物性食物をのみ多く用ゆるに依るものにて之を消化する程の健康躰なるが故なり

人間の躰に要する所の滋養質には其の分量適度たるべきものあり之を保健食料と稱し往年内務省衞生局にて之れが献立を作られたるが其の二三を擧ぐれば

◎第一　鷄卵二個、味噌五匁、小松菜二十匁、胡蘿蔔十匁、百合二十匁、鯛三十匁、竹麥魚卅五匁、白米四合にて蛋白質一〇一、〇グラム、脂肪一九、二グラ

ム、含水炭素四四六、六グラムなる主成分を含有す
◎第二　牛肉六十匁、バタ七匁、鶏卵二個、馬鈴薯五十匁、パン一斤半にて蛋白質九五、三五グラム、脂肪四七、三三グラム、含水炭素四〇九、〇〇グラム
◎第三　牛乳一合、味噌五匁、葱二十匁、馬鈴薯二十匁、蘿蔔十五匁、牛肉六十匁、白米四合にて蛋白質九五、七グラム、脂肪二八、〇グラム、含水炭素四五四、三グラム
◎第四　豆腐廿五匁、豌豆十五匁、豆腐皮三匁、比目魚廿五匁、胡麻油一匁、鶏肉三十匁、味噌十匁、白米四合にて蛋白質一〇一、五グラム、脂肪一九、四グラム、含水炭素四三四、七グラム
◎第五　味噌五匁、豆腐十匁、鶏卵三個、比目魚四十匁、菠薐草廿一匁、豚肉十八匁、馬鈴薯卅匁、白米三合七勺にて蛋白質九五、六四グラム、脂肪四八、四七グラム、含水炭素四〇一、一五グラム

右含水炭素といへるは動物性幷植物性の各種の糖分及澱粉をいふものなり
尚食物の事に就ては種々盡さざる所あり又た近來陸軍藥劑監石塚左玄氏の化學的食養長壽說（上梓）あれど後日に讓り次に注意の二三を記して筆を擱く
◎例へば肉類野菜等の新鮮なるもの或は調理せるものとに係らず永く空中に曝露する時は香味次第に變化し後ちには遂に嫌ふべき臭氣を發生し口に容るべからざるに至る之れ主として蛋白質の醱酵を起して分解するものにて此際糖分澱粉の如きも醱酵を起し酸臭を生ず此腐敗即ち蛋白質の分解幷含水化合物（砂糖澱粉）の變化はバクテリアと稱する黴生物の作用に起因するものなりバクテリアの話は前號にも見えたれば略す
◎さりながら食料品中特更らに醱酵を起さしめて其香味を賞するあり例へば澤庵漬及糠味噌漬の如し之は其原料なる糟及鹽を混合して糠中にあるバクテリアの漸

次繁殖して蛋白質澱粉を分解し醱酵するものなり納豆の如きも豆を沸煮して之を藁に包み攝氏三十度內外に温め置きバクテリアをして自由に繁殖せしめ豆中の蛋白質を分解せしめたるものにて又た右の中には多量のペプトンを存すといふ

◎バクテリアに種々あり腐敗を誘導するもの或は病毒的バクテリアもあれば日常食物の殺菌法（水其他飲料の沸煮と食物を熬煮若くは焙炙する等）は最も注意すべきことなり

◎水は常に一滴中にすら許多のバクテリア（傳染病流行等の際は一層注意すべし）を含有すれば一旦濾過して後ち沸煮すべし

◎蔬菜菓實魚鳥獸肉等の生物には皆バクテリアを含むものと思ひ熬煮するか或は能く中心迄熱度の達する樣焙炙して食すべし

◎食物を貯藏するに鑵詰となすには肉類野菜の如き一度煮沸してバクテリアを殺滅するも外氣に觸れて再び來襲を受くることあれば一度煮沸したるものを熱湯にて洗滌せる鑵に入れて蓋を密閉し再び熱して殺菌し外氣の侵入を防がば可なり

◎夏時防腐用に石灰を加へて魚肉等を保存するが石灰バクテリアを殺滅するも食料品は丁寧に洗滌して調理せざるべからず

◎然し飲食物にのみ注意して其器具箸拭巾等の淸刷法に注意せざる時は折角の注意も水の泡に歸することあれば食器拭巾等は沸水湯にて洗滌するを可とす（終）

初春の料理

同じ食物にても料理の法如何によりて旨くもまづくもなると今さらにあらねど、一家の庖厨を統ぶる主婦はその折々のもの丶料理心得は勘要なり。料理の手際よきはたしかに家內經濟の一つにてまた實に家庭和樂の

一法なればなり。初春の惣菜料理の一二を見聞せるまゝ記せば、

◎鯛うしほ　鮮腹を去りよく洗ひ適宜に切り、鹽をふりて三十分間ほど置き、水にて洗ひ笊に入れ沸騰ちたる湯を掛け、水に冷し置き、鰹節汁を鍋に入れて沸たゝせしところへ鯛を入れ、鹽醤油にて鹽梅し、碗に盛るなり。但し鹽梅は鹽味にて醤油をひかえたるが佳し。

◎鯛ちり　前の如くして洗ひ程よく切りて骰子形豆腐と盛合せ、別に卸生姜焼海苔等小皿に入れ、また別に橙酢柚子酢の中一品と醤油を別々に置き小鍋にだし、昆布を敷き湯をさし加へ座敷にて火鉢に掛け、鯛と豆腐に火の透りたる頃掬ひ出し酢醤油やく味にて食ふなり

◎蜊の杉田煮　大あさりを鹽むきにし貝の汁を別の器に取り置き、玉子を割りてよくかきまぜたるを剝身と共に小鍋にて焙り、玉子煮の如くし、さて此中へ前の貝汁へ食鹽少し交たるを入れ、またザッと煮あげるなり。之に千切柚を口とし器へ盛りて、さて蓋の緣底へ梅花一二輪を置きて景樣とす、淡泊にして味美なり。

◎さつま煮　鶏肉を骨付のまゝ切りて鍋に入れ水煮をなし、次第に起つ浮粕を掬ひとり粕の無くなるを度として、人參午房大根銀杏里芋筍子葱豆腐などの中二三品を撰み善く〳〵湯煮にして味淋又は砂糖にても少し加へ、醤油にて味をつくべし、少し汁あるを宜しとす。汁には卸し生姜妙なり。

◎鮟鱇のいり鳥　小切り身にして胡麻油にて焙り味淋と醤油にて味をつけ山椒の粉をふりかくべし。

◎半片の雲丹田樂　半片を幅五分丈一寸位に切り湯煮にして竹小串に挿し、雲丹を酒か醤油にて塗る。

◎白魚の一ちよぼを四つ五つに分けて極細き串にさし、霜降、鹽水にてコロし遠火にさッとつけ焼にして

膳に上す、粉山椒をふりかくる可し、白魚の筏焼とは是なり。また雞卵を解きて上に塗り遠火にて炙るもよろし。

◎款冬の薹を細かにして油でイタめ佃煮にすれば、貯藏によろしく一寸うまきものなり。

◎鮹をさいの目に切り油にてイタめ味噌と砂糖にて味をつけ煮る、豕煮とて旨味多し。

◎筍と獨活を湯がき、味淋と醬油にて味つけ味噌にて木の芽和へとす。

◎獨活を心にして油揚の薄くへぎたるを巻き乾瓢にて結びて好く煮るべし、信田卷出來るなり。

其他布巾に豆腐をのせ温灰の上にて乾かし切りて田樂焼とし木の芽味噌ぬる木の芽田樂、さてはあんかけ豆腐のさくら豆腐等種々あるべし。

味淋をうまくつかひえば如何なる料理家にもなり得べしとかや。

婚儀の衣裳

婚儀は人間一生の大禮、男女共に最も心を用ゐて嚴格に行ふべきは今さらいふまでもなけれど、女性に在りては特に衣裳に華美をこらさんとするは古よりの習慣なるのみならず、こは大禮なる婚儀といふことに對して至當なることと信ぜらる。平常は綿服をまとふて經濟的に生活するとも婚姻の際には其分相應及ぶ限りの費を出すも奢侈にはあらじ、そは婚姻といふことを重ずる上に於て最も必要なることなればなり。婚姻の精神を重ずるが故に、その儀式をもまた鄭重に嚴格にすべし。儀式に伴ふ衣裳また此理に於て然るべき用意あらまほし。

今西京呉服店の報ずる所によりて當今婚禮衣裳の標を記すれば左の如し。高尚優美の嗜好日毎に進歩せる今の世ことを標準とせばよし貴賤貧富その級に應じて違はあれど思ふに時におくるゝの虞なからむか。

◎其一(振袖)　染裲襠は平鹽瀬紅掛地に五ッ紋(直徑鯨尺一寸三分)の袖下及び裾模樣にして土佐風の蓬萊山又は五節句友仙彩色ものに刺繍をあしらいたるもの(代價五十圓)◎刺繍裲襠は本紋綸子の黑地五ッ紋(同上)袖下及び裾模樣源氏總刺繍とし刺繍は平糸刺繍に金糸をあしらいたるもの(代價三十八圓)◎織物裲襠は倭錦 又は佳良美織にて黑地又は錆白茶地に六ヶ間位の有職菊桐模樣(五十圓)◎裲襠裏地は緋紋鹽瀬又は緋羽二重にて裾廻りに松實を金泥にて散らしたるもの又は背中に泥霞飛鶴を付くるも能し(二十八圓)◎帶付は御召綸子地に疋田絞り涙に千羽鶴又は扇散らし尤も疋田上り適當ならんか(六十圓)或は又同じ地合に總刺繍模樣江戸解又は松竹梅色糸刺繍も可なり(四十八圓)三枚襲は濱縮緬地とし上着は黑五ッ紋(鯨一寸)源氏貝桶極彩色友仙紐總刺繍入、中着は緋地五ッ紋(同上)の上着同模樣貝は白上げ、下着は白地藍紋同上にて中着と同樣の彩色

◎其二(振袖)　刺繍裲襠は綸子黑地五ッ紋螺鈿刺繍水に片輪車の裾模樣(五拾圓)◎織物裲襠は黑地又は白茶地六ヶ間八ヶ間模樣(四十五圓)◎裲襠裏地は緋綸子又は紋紗綾(十二圓)◎帶付に本紋綸子疋田絞り又は疋田唐織(五十圓)◎三枚襲ねは矢張濱縮緬地にして上着は黑五ッ紋(鯨一寸)刺繍裲襠と同模樣兩褄水に片輪車總白上げ、中着五ッ紋上着と同模樣にて紅地白上げ、下着五ッ紋上着と同模樣の白刺繍(三枚仕立上げ八十五圓)

◎色直　三枚襲ね紋羽二重地にして千歳利休又は柳茶色の兩褄とし上着は五ッ紋(鯨一寸)遠近の梅又は君が代模樣(三枚仕立上げ百三圓)或は三枚襲ね紋羽二重地の紅掛納戸又は深川鼠等の五ッ紋(同上)裾模樣は四君子又は都名所、近江八景等(同上九十圓)◎半衿は白鞘形綸子地に肉入紅糸刺繍縁を金「モール」にて括りたる

もの(二圓八十錢)◎帶は白茶地緞金通し古代錦二ヶ間又は四ヶ間模樣(六十五圓)◎長襦袢は綸子地疋田絞り飛模樣又は縮緬紅地白上げ刺繡入り敷松葉にこぼれ梅或は江戸解刺繡模樣を可とす(廿三圓)◎腰帶紅地古金襴(三圓)

◎詰袖　上着地合は平鹽瀨標色五ツ紋(鯨一寸二分)住の江又は松島、庭園模樣(四十三圓)、中着は同地合に桃色無地、下着は同地合の白無地(三枚仕立上げ七十五圓)◎半衿は白鹽瀨金「モール」刺繡(二圓五十錢)◎帶は錆茶地八ヶ間十ヶ間位の佳耳美織又は蝦夷錦、色直しには黑地有職模樣(五十圓)◎長襦袢は紅地縮緬又に綸子地に白上げ香の圖菊刺繡にてあしらふもよし又は有職蝶鳥の白上げもよし(十八圓)

女兒の手鞠歌に就て

女兒の遊戲澤なる中に、手鞠とお手玉とは最も普通に多く行はるゝものなるべし。此手鞠とお手玉が古くより行はれて今なほ廢らざるは、其一方には女子の運動法に適ひ、一方には唄ふ歌の調子ありて自から心神を和げ、身躰精神兩つながらその快樂に適ふが故なり。

さればこの遊戲は長く存せしむべきものなると共に、その歌ふ唄はまた兒女の敎育上に影響あることを考へて、なるべきたけ卑しからず、品性を養ふに足るべき歌をば唄はすやう心がけんと、家庭に主たるものゝ務なるべし。現今流行の手鞠唄種々ある中の一二を引かんに、

おこんこのお嫁入、此小袖が百七ツ、それほど仕立てやるからにやく、嫁に往ッても出て來るな、朝は早起き、九十九枚の戸を開けて、隅から隅まで掃き出して、家の明りで髮を結つて、かん／＼、お釜で飯焚いて、ちやん／＼茶釜で湯を沸かし、爺さん婆さん起きやんせ、今日のお茶は何ぢやいな、鹿尾菜に油揚がんもどき、先づ／＼一貫貸しましアした。(手鞠唄)

古調にて小學校などにてあまり唄はれねど、富みたる町家の家庭などに唄はるゝものに、

ナンチ畑、荒物町の染屋の娘、姉と妹を並べて見れば、姉は好かない朝顔のう花、妹今咲く白菊のう花、姉にや少しも望みは無いが、妹ほしさに立願かけて、一に岩船お地藏樣よ、二には新潟白山樣よ、三に讃岐の金比羅樣よ、四には信濃の善光寺樣よ、五には弁天の若宮樣よ、六に六角觀音樣よ、七つ七尾の天神樣よ、八つ八幡の八幡樣よ、九つ熊野の權現樣よ、十で處の氏神樣よ、掛けた御立願叶はぬなれば、前の小川へ身を投げ捨てゝ、三十三尋の大蛇と成りて、水を染ましてくろ〳〵と捲いてエやろ（手鞠唄）

などあり、前のは多少家庭の嫁姑などの間柄をほのめかしながら無邪氣なるが、後のは男女の情に及び、特に身を投げて蛇になるなど思ひの恐ろしさなどを歌ふたる、これ等は柔かき女兒の心を刺すこと少からざらん、勿論意味もわからで唄ふが多かるべけれども、かゝる歌も家庭教育女兒のしつけ方の上に隨分に力あるとを考ふれば、家庭を主どる人々ははかなき俗唄なりとて等閑に見過さんとあるべからず、記者は大方の家庭の主婦、母たる人に望む、文筆の心がけあらん人は清くして品格あり、さりとて理窟に落ちざる無邪氣なる俗唄を自ら作りて其の兒女等に唄はせんことを、あながち難き事にてはあらじ、此等の歌若しくは古の歌を標としてそれに調子を和せんには、あつぱれ新しく有益なるおもしろき替歌成らん、家庭の整理、兒女の教育等改むべきは澤なれど勿論急にするとは難し、此等の細小なると、難からぬとより初めむは所謂改良の一端なるべけれ。

小兒の世界

新桃太郎（續）

や、ゑ、

坊ちやま一行は中等列車へ乗り込んで、いろ〳〵昔しの御話をしたり、鬼ケ島へ行つたら何を一番先へ取つてやらふか、僕は大砲、ペチは小判、五助は柿の種、イヤ御結びの方がいゝなんて云ひ乍ら、大笑ひに笑つて居ますと、其の中にガラ平の聲が聞へなくなつたの

で、何樣した事かと思つて見ますと、向ふの隅に躱だけは見えますが首がありません。あの野郎又何か巫山戯ていやがるんだ何樣して呉れやうつて、五助が行つてイキなり足を引張りますと。大變々々、ガラ平は窓で首をしめられて、グウ〳〵云つてるんですものを。

それから坊ちやんは忙てゝ窓を上げて、首を抜いてやりましたら、ガラ平目を白黑して、

「ア、、有りがたい、御かげさまで助かりました、ア、有りがたい」

「ガラ平、御前は何んだつてまあ、ソンナ眞似してるんだい」

「へゝゝゝゝ」

「へゝゝゝゝじやないよ、何樣したんだい」

「へゝ、實は今あそこの處を通りますと、何處かの女の人が泥鰌を笊へ入れて持つて居たものですから、へゝ、平常もの樣に一寸やらかそうと思つて首を出しますと、女の人は急に後の方へ飛んで行つて、窓がガタンと落ちて來まして」

「馬鹿、御前もよつ程馬鹿だチエ、汽車は飛んで歩いてるんじやないか、ほんとに馬鹿〳〵しい」

「ヘイ」

「ヘイ、じやないよ」

ガラ平は此んな間抜けた事ばかりしては坊ちやまを困らせましたが、それが又長道中にはいゝ慰みになりました。山北で坊ちやまが鮎の御鮨を買つた時なぞも、ガラ平いかにも食べたそうな風をして居るので、

「ヲイ、食べたいか」

つて御仰いますと、

「アユ、アユ、左樣で御座い」

なんて大きな聲を出してそれから坊ちやまから一つ戴くと、

「アチラでも御用と御仰る、コチラでも御用と御仰

る、アイ〳〵左樣で御座い」

つて大騒ぎに騒いでとう〳〵沼津まで騒ぎつゞけに騒いで居ました。其の中にペチは寢てしまう、五助も無言つて、坊ちやまは雜誌を讀みはじめますと、ガラ平は、是はガラ平躍りで御座いつてえんで、御幣をこさえて口へくわえて、ペタ〳〵パタ〳〵あつちへ行つたりこつちへ來たりして居ましたが、今度は輕業曲藝で御座いつて、自分の首で輪をこさへて見たり、ドグロをかいて見たり、ベツカツカウ見たいな顏をして、坊ちやんの處へ行つて、ヒドク叱られて、ハウ〳〵の躰で逃げて來たりなんかして居ました。

やがて日が暮れて滊車へも燈火がつきますと坊ちやまは皆を集めて、粟餅をたべさせて、それから暫らく又御話しをして居ましたが、いよ〳〵御やすみなさいと云ふので、ペチは坊ちやまの足下へ、五助は枕元へ寢る事になり、ガラ平は晝間あんまり騒いだから坊ちやまの枕になつて、其の長い首で襟卷をすることになりました。

明くる朝皆んなが目をこすり〳〵起きた時には滊車は何處を何樣來たのか、虎の河停車塲と云ふ地理書にもない所へ來て居ました。

「五助々々、虎の河停車塲つて、一躰此處は何處なんだらふ、」

「私しにもサツパリ解りません、驛夫に一つ聞て見ましよう」

丁度その時驛夫が來ましたから

「若し〳〵此處は一躰何處なんですか」

つて聞きますと、

「鬼ケ島の虎の河停車塲です、エイ、虎の河、虎の河、地獄、極樂行乘り換へ、エイ虎の河、虎の河」

「坊ちやま〳〵、もう鬼ケ島へ來たんですとサ」

「何、鬼ケ島、虚言をいつちやいけないよ、鬼ケ島に

停車場なんかあるものか」

「デモ、鬼ヶ島だつていひましたよ、御覧なさい、ソレあそこに鬼ヶ島警察署出張つて書いてありますよ」

「ソーカ、ドレ〳〵、ア此りや來たのかなア、サアそれじや下りろ〳〵」

と云ふので、ガラ平眞ッ先に飛び上り窓から首を出して口で戸を開けて、ペチは荷物を持ち出す五助は兵糧を背負ふ、ウントコサノ、ヤレコラサで、先づ兎も角も停車場前の御茶屋へ這入りました。坊ちやまはかね〳〵御祖母樣から伺つてた鬼ヶ島とは丸で勝手が違ふもんですから、若しや間違ぢやないかと思つて茶屋の御神さんに聞て見ますと矢張りほんとの鬼ヶ島で、昔し桃太郎と云ふえらい人が寶を取りに來た事があると云ふ事ですからイッソ打ち明けて自分達も其の寶を取りに來た新桃太郎だと云ふ事を話して、い丶智慧でも借りやうかと思ひましたが。待て〳〵此の間叔父樣に伺つた三國志の御話の中で、計は密なるを尊ぶと云つたのは此處の事だ、敵には何んでも内所〳〵何しろ五助出掛けやうッて、それから同勢一人三匹御茶屋の門前に勢揃して、眞ッ先には御池のガラ平、平常から長い首を尚一層長くして其の先へ旗をつけて、可笑しな調子でブップクブップクブーつて云ひながら行きますと。次には門脇の中納言ペチ盛、ブチ色おどしの鎧着て、一尺二寸の大丸太を小脇にかい込み、ワンとも云はずに立つて居ました。其の次が總大將坊ちやま左右衛門で、軍艦ラシヤの半づぼんに水兵形の帽子をかぶつて、緣日で買つた五錢の豆鐵砲を肩に掛け采配手にもつて進め〳〵つて云ひますと、橋場の五助入道猿公、眞赤な面に眞赤かなチヤン〳〵着て、何奴、此奴の用捨はねえ片つ端から皆殺しだぞと怒鳴つて、足なみ揃へて進みましたので、其處等近所の人達は何かヽ

ア來たんだらふ、救世軍か、廣目屋かつて、瞬く間に黒山のやうに集まつて來ました。

(未完)

小説

椎の蔭

金子笹下庵譯

(三)

半時間後の自分の位地は頗る變つた、久しく逢はざりし舊友は歡迎してくれて、互の境遇の甚く異つたのを可笑がつた、友といふのは二十年前も今も少しの變りなく快活な、肥えた男で、唯だ青年の時の敏活なところが少し消えたようである、友はクリスマス祭の種々な要意を話して了ふと自分を客間に導いた、そこには澤山のお客が已に集つてゐたからで。

自分は幾度か椎の下の失望した少女の姿を思ひだした、けれども一言も口には出さなかつた、今迄自分はクリスマス物語を隨分澤山讀むでみたが、デンマール家に起つた如きことは未だ嘗て聞かなかつたのである、自分が客間の戸を開けると、もう立派に常盤木や燈で飾られて、室の空氣が非常に暖まつてゐた、樂しさうな人々のクリスマス語と青々とした常盤木は一々自分の胸を打つて、此暖な室を去つて死ふと迄決心した失望せるあはれな少女の面影をちらつかせた、室は隈なく常盤木で、廣き階子段から書齋まで能くゆきとゞひてゐた、友はそれを指さして、

「ね、あれは皆な娘達が致したので、」

大きな高き窓が四ツ、ストーヴ燭臺その他數知れぬほどの額などが整然として備はり、麗はしき花や果實が澤山に飾られてある、友は自分を先づ丈高くて高慢らしき婦人にひき合せた、高ぶりげに群集を見をろしてゐた彼女の眼は忽に自分の方に轉じた、それもこれが

友の細君なので紹き合された時初めて知つたのである、次は二人の娘にひき合はされた、姉のクラサは自分と少しの言葉を交はしたが妹のヘレナは一言も口を開かなかつた、今度は自分を長男にひき合せた、美男で、快活で、才氣ある、母親の沈むだ美をうけて、浮いて高慢らしき處だけはうけつがなかつた、自分と彼とは逢ふ間もなく、親しくなつて、出來得る限りの尊敬を自分に拂ふと彼は白狀した、疑もなく長子が井は父の誇の一ツとなつてゐたのである、彼はロンドンの辯護士で、既に多少の聲名を成してゐたが自分は彼と言葉を交はした時、どうも彼の心が平穩かならぬことを發見した、いふのは時々眼から顏から、心の苦しさを洩しかねてゐたので。

友は自分を順次他の客にひき合せたのち、室内を物足らぬげに見まわして、

「クラシヤ、! ヴヰオラは何處に居るかな、」

長女は少し考へて「存じませんよ父上、」

「何故今夜こゝに居らないのか、皆な一緒に樂しむはづぢやないか、」

クラシヤは自分の方を顧きながら「ですがヴヰオラと一緒に樂しむつて誰でも出來はしまいと思ひますの、」「いゝや、何故こゝに居ないのか」と友は叱りつけるように言つた、

「存じませんてば、も少し前でした何だか苦い顏して出てゆきましたつきり私は見ませんもの、」

友は妻のところに行つて「ルイサお前はヴヰオラが何處に居るか知らぬかい、今夜何故こゝに居ないのだな、」

「私は存じません、あの娘も親父の死んでから大分變になりましたよと、」さも冷淡に言ひきつたので、自分は此の言葉に甚く胸をうたれた、友は又同じように「だがまあ如何したんだな、今夜家に居らぬなんて、」

「否えね、貴郎、實は私やあの娘をこゝに置くつて好ましくないですから、暫く自分の室に行つて居れつて言つてやつたのです、」

「クリスマスの晩でもか」と情深き友は言つた、

「さうですとも、平生だつて」と耐へきれぬような聲で答えた「貴郎それでいゝぢやありませんか、ヴヰオラは今夜客間にやまゐりませんからね、」

「そりやいかん、」と言つて自分の方をふりむきながら「變だね君、婦人ツてわからんぢやないか、」

自分は何とも友に答ふることが出來なかつた、で此時友の家庭のあらましを想像して細君は高慢もの、娘は大人しく、息子は快活な秀才とのみこんで了つた、

「誰れだつて胸に骨はあるもんですからな、少し御逗留なさればわかりますて、」と言つて友は頻りとヴヰオラのありかを尋ねてゐた、けれども誰の答も知らぬとばかりで、

「少し御免下さい、レヰチル君、」

自分はヴヰオラの穿鑿と知れたから、友の出ていつた後は室の隅から隅を見まわしてゐた、妙えなる音樂やら、面白き會話やら、舞蹈やら、遊戯やら何等の快絶！

自分は又椎のもとの少女のことを思ひだしてゐると友が歸つて來て眞直に自分の前に歩みよつた、

「少し、君にお話があるんですが、」

自分は彼に從いて行くと「君はジョン、ルッベンのことでお出でしたんですね、」

「さうです、然し今夜は一切お預けまうしたいので、」

「いやさうぢやないんです」とせきこんで友は言つた、

「そのことぢやないので、私は自分の家庭の樂しくない理由を少しお話し致したいので、」

「貴家の樂しからざる原因ですつて、」と操りかへした、

「愚妻はルッペンが借財して死んだと思つてましてな、それを私が拂ふかと心配して居るんです、それはとても出來んのですけれども、」

「何故又ルッペンが借財して死んだと思ふんです」と自分は尋ねた、

「左樣です、それがどうも變なんですて、勿論印度へ着きましてから、一度は手紙をよこしたのですがさつぱり要領を得ませんで、私の推す處では多分、彼方に到着すると直ぐ結婚したのですな、その婦人といふのがあるひは財產でもあつたものか、兎にかく御互に愛し合つた仲とは思はれます、であの娘を私の處によこしました時は君のほかに托する人もないから預かつてくれろッて言ふばかりでした、私の考ではヴヰオラが生れると母親が死んだのですな、隨分あの娘も可哀相でしたらう、丁度私の家へカピテン、アンデルセンに連れられて來たのが七歲の時で、可愛い悧潑な兒でしたな、それからつていふものは此處に居りきりです、左樣でした、そのアンデルセンつていふ者にも傳言しまして、印度にゐては娘の身體のためにならぬから、私共に宜しくたのむといふようなことでした、」

「それや又隨分亂暴でしたね」と自分がいふと友は變な顏をして、

「能く御聽き下さい、私や決してヴヰオラばかりを可愛がりはしませんがな、どうも其あの娘のことで始終うまくいかんのです、第一妻が拒むでせう、がその頃幸にルッペンから手紙が着きましてな、而も養育金が添へてあつたんです、そしてこれから每年何程宛か送るから娘の敎育だけはしてくれろといふんで私もそのつもりで居りました、處がその後三年も無音でしてな、それから又突然一二度もありましたかい私からも三四度だしましたらう、大抵は妻のヴヰオラに對する擧動も打ち明けましてな、で死ぬ二

年前は何の音沙汰なしで、唯つた一度急に國に歸るつて電報がとゞいたまゝなんです、それもこれも可いさしましてゝす、弱りますのはあの娘を私共の手に殘して逝つて了つたことです、な、勿論私や構はんです、が妻が承知しませんので、」

「へゝえ、それではルツペン君が多少殘して死なれたことは御存知ないですか、」

「存じませんな、然し若し殘してゆく位なら、小供に送らん理はないでせうが………、」

「それは何でせう、澤山金をためてふいと歸つて來て君を驚かさうと思つてゐたのかも知れませんて、」

友は重さうな頭をふつて、

「そんなことはないでせう、妻は借金を殘して死んだつて曰ふんです、終局私共が拂はんけりやならぬッて心配するんですな、」

『成るほど、もめるつて仰有るのはそこなんですか」

と自分が尋ねたら、

「否え私や何でもないです、唯だ妻が好まんもんですからな、それでもめますので、それに息が非常にヴヰオラを愛してゝまして、今日でした到頭私と妻の前で、ヴヰオラでなければ一生妻にはもたんて言ふんです、ヴヰオラも又拙息をひどく好いてるさうで、」

音樂も舞蹈も總て樂しきクリスマス祭も此時全く了つてしまつた、自分は友からまだヴヰオラに紹き合せられないで。

（四）

翌くる朝は麗はしき日で、旭は已に氷つた雪の上にかゞやきはじめた、自分らは共に朝飯についた、友は頻りと食後こぞつて、一里ばかり隔つたる寺に行くことから雪の氷を歩む樂しさなどをとりとめもなく物語つた、自分が丁度席についた時、ヴヰオラがはいつてきた、昨夜椎の下で見とめた蒼白の顔色は何處へか消え

て唯だ飽くまでうつくしく、とても死ぬと決心したその同じ人とは思はれぬ、宛然女王でゝもある如くうるはしく、雅びやかに整つてゐたので。

自分はヴヰオラが室にはいつて來た時、他の婦人の顔色を見て皆な少しく嫉妬むでゐるといふとを知つた、友がヴヰオラの前で、自分をお前のお父樣の友達だとひき合せた時、彼女の優しき眼が自分のと思はず出逢つて、あゝ父のお友達と微につぶやいた、片時もヴヰオラの顔を放さず見つめてゐたがガヰはねたましさうに自分の方へ歩み寄つた、まこと若き人々の戀、口こそいはぬ長き物語は彼らの眼から顔から明かに讀まれたがヰは確にヴヰオラを崇拜してゐたのである、

「ヴヰオラやこゝにお座わり」と言つてガヰはその次に座を占めようとした。

「ガヰお前は私の傍においで、少し話があるんだから」と大きな聲で母が言ふとガヰの口唇は忽ち青ざめて來た、けれども彼は行かないで「私はヴヰオラに用がゐりますから話はお後にねがひませう、」

「ヴヰオラ、母樣は何時もお前の傍がおすきだつていつてらつしやるぢやないか」と姉のクラシヤがいへば「お前は何時も氣がきいてゐらつしやるのね」と妹のヘレナもさしでた、食卓が忽に沈むで來たので友は

「お前達は何を言ふんだな、氣をつけなさい、朝からそんなことを言ふものがあるものか」

ガヰは父の勸告で默つて了つたがヴヰオラの顔色はまた蒼ざめてゐた、次の爭はガヰとヴヰオラを一緒に寺へやらぬと母が言ひ出したので、自分を呼んで。

「レヰテル樣、まうし兼ねましたが貴君ヴヰオラの氣をつけて下さいましな、拙息と一緒にはやられませんですから、」

「然し御夫人」と自分が言はふとするのを遮つて、

「貴君に是非願はなければなりませんので、」

自分は若し夫人がヴヰオラの資産として二百萬圓現在爰にあると知つたなら、どれほど夫人の擧動が違ふかと心潜に考へてゐた。

今でも忘れはせぬ遠き森なかを通ふ寺へのそゞろありきの樂しさ、地は固く氷つて、雪につゝまれし森の一つらは白き帳幔の如く道に添ふて横つてゐた、太陽は雪をきらつかするばかりに照り、葉もなき大きな古木は青空の下に高く、いかめしく聳えてゐた。

ヴヰオラは自分と椎の下を通りかゝつた時、甚く恥ぢいつてその優しく、うつくしき顔を自分の方にそむけた。

「私や恥しくなりました、貴君が昨夜こゝで私を救つて下さつたのと思ふと何だか變ですね、昨夜はほんとに失望して、まるで氣が違つてたんですね、」

「さあお話しなさい、昨夜の始末を、覺えておいでゝせう、私は貴孃のお父樣の朋友で、又貴孃のお友達ともなつたんです、そして貴孃に善い報せを持つて來たのでしたな、」

「私には信じられません、可い報せなんて、」

自分は心のうちで、二百萬圓の遺産といふことが彼女にわかつたらどの位驚くものかと想像しながら、

「夜前の理由をすつかりお話しなさい、勿論貴孃が幸福でなかつただけは知つとりますが何か別に御失望なさる深きわけがあるんでせう、」

俄然うつくしかりし彼女の顔は赤くなり、眼は自分の方にとひるがへつた。

「それは非常なことなんですの」と言つて少し笑つてゐた、「どうしたんですそれや又、」と尋ねると彼女は自分を思はず可笑がらせる程大聲で笑つて、

「でも私にや今話しきれませんわ、」

「それぢや極く初から少しづゝお話しなさい、貴孃の覺えていらつしやるだけをサ、」

クリスマスの樂しさうな連中は自分らの前に連れだつて、友の大きな笑ひ聲も聞えた、友は何時も細君の前で樂しさうに笑ふのが癖かして。

「私や印度にゐた時分のことは能く存じませんの」と彼女は口を開ひた、「何だか夢のように眞黑な、日にてらされた印度人の顔を覺えてゐるきりで、私やその頃官員樣の寡婦のとこに預けられてゐましたさうで、丁度六歳の時まで私を養育てくれました、それから大病をわづらつて、到頭英國へまゐつたのです、私共はその頃貧困つてゐたものか何か能く知りませんが此の廣い世間で一番寂しいものだつたことは確ですの、私の父は大層私を愛してくれたさうですが顔すら能くは覺えません位で、時々逢ひに來てくれましたが何時も急いてましてね、私がも少し居て下さいづて言いますと父樣はね何時もお前のためにこんなに忙しく働いてゐるんだからつて、私や一時間と一緒に居つたことは御座りませんの、それから病氣になりまして、なほりかゝるといふと涼しい海風や數知れぬ朝夕を船のなかに送つて漸くデンマール家に着いたんです、」

「隨分厭なお話でせう、お厭ぢやありませんか」とヴイオラは眼に涙を浮べながら言つた、「私がこゝへまゐつた時は全くの小兒でしたが私のマノル家の者に嬉しがられなかつたことは朧ろげにわかりました、私が來ましてから、もう十一年にもなりませう、けれども一日だつて邪魔にされぬ日はムりませんの、私や怨みも致しません、初から伯母樣は私の來るのを厭がつて居たのださうで、決して私は無理とも存じません、然しいくら子供でも邪魔にされるところに居る位つらいものは御座いませんですわ、」

「伯父樣の方は私を可愛がつて下さつて、一度もきびしい小言なんか聞いた例はムいません、明暮私の氣

をつけて下すつてね、恰で御自分で娘のように思はれてゐたんです、伯母樣はさうでないものでしたから、そのため時々爭論も起りましたんです、私がこゝにまゐつた最初から伯母樣は私を厭つて衣物や食物までも惜がつて、隨分ひどい扱に逢ひましたの、時々私も耐へられなくなつて印度にでも行うかと思ひました、もしお父樣が側にゐて下つたら、どんなに私を可愛がつて下さるなんぞと度々夢にも見た位です、」

「然し娘達は貴孃を愛してくれましたらう」と自分は尋ねてみた、

「さようでした」と言つて少しためらひながら「私や不幸の中にも唯つた一ッ慰があつたんです、」

「なるほど左樣でしたらう」と自分は答えた、

「ガ井樣が私を愛してくれましたの、」と少し聲をふるはせて「家にお出の時は何時も私の肩を持つて下すつて始終私の望をつないで居てくれたのです、然しこれが又ガ井樣のため大不幸なので、絶えず伯母樣を立腹して、已に夜前の如きもガ井樣を家へは置かんてさわいだのです、」

「えゝ昨夜そんなことがあつたんですか」と自分は繰りかへして尋ねた、

「さうなんです、私は全然、うち明けてお話ししませう、それはこうなんで、一昨日ガ井樣がロンドンから歸つて來まして、伯母樣の前で私を妻にするつて言つたんでせう、處が伯母樣はもうケート樣ッていふのを嫁はうと思つていらつしやるんです、此娘は二萬圓の持參金があるさうなんです、ガ井樣は勿論承知なさらないんで、私でなければ妻はもたんて仰有るんです、ですけれどもそれは私や出來ないものと存じますわ、」と意氣高く言つた、

「それぢや如何うなさるんで、」

「私やクリスマス祭の終る迄、待つて居りまして、それから何處へか行くつもりです、さうでした、貴君が私を助けて下さるんでしたね、私に必つと何か働き場處を見つけて下さいましな、さうすれば私は獨りで働きます、どうしても私やガ井様に嫁して、あの人を一生苦しましめるやうなことが出來ませんからね、」とはつきり言ひきつて默して了つた。(未完)

花すみれ

生田葵山人

夜はいたくも更けたりと覺しき、拾二時にや近からん、「ミンチエスタア」の鐘は未だ響かざるも、街路の氷を碎く馬車の軌は少なくなり増りたり。いざ今宵も破れたる寐臺の上に薄き衾を纏ひ、冷やかなる夢を結ばん、見るも悲しき此部屋に淋しく己が影を目戍りて過ぎ行く身の憐は此末何時迄か續く可き、寄る年波に關守なく、此國に來りてより早や二年を過ぎたり。若き命に匂ふ戀の花さへ保つに由なく、石像よりも冷たき心を持ちて日ねもす街より街に樂器曳き鳴らし、情を袖に縋らぬ迄に、さもしき藝を優しき人心に賣り行く悲しさよ、何時の日か幸福と名くる謎語の解かる可き境遇は我に來るならん。懷かしきは八重の潮路の程遠く太平洋の彼方なる故鄉の空ぞかし、よしや父母なくとも、賴る可き親類はなくとも、隅田の月の夕、千代田の城の八重霞、春秋に樂は盡きざるものなるに。」譜を前に今迄調べたる「バイヲリン」下に置き、斯く獨言は、流るゝ如き黒き瞳を持てる處女なり。身にこそ處々繼足の當りたる羅紗の衣裳を着けたれ、腰に迄永く垂るるを頸の邊にて紅色の「リボン」にて結びたる髮は、此國にて見る可き波高き黄金の色ならで、漆よりも黑く紺瑠璃の如き艶を有せり、豊なる頰の桃色に染まりたる、若き口元には花よりも匂やかなる優しさの

漂へる、誰が目にも美くしと見る可し。此頃高貴ならぬ人の仲間に、噂高く日本より來りたる音樂師と云ひ囃さるゝは、此處女の身上ならんか。

處女は優嫺なる姿にてやをら立ち上り、破れたる窓を押し開けば、北亞米利加の冬の月は肌寒き光りを投げて、彼方に一層高く健全なる市制の美を誇る如き議事堂の上に懸れり、眼前には罪惡と醜陋の潜む魔所と云はるゝ「ミニヨン」の街は、全く淸き月光に拭はれ、恰も今迄の深き罪を懺悔し、改めて惠深き天の光榮に浴せんと神の膝下に跪踞く如く、白く裝はれて横たはれり。未だ寢ぬ人もあるめり、五階六階打重なりて出張りたる少さき窓には、燈火の洩るゝも見ゆ。四邊寂として折々聞ゆるは加奈太行の貨物積みたる列事の今發せんとするを知らする滊笛のみ。

暫しは骨を刺す寒さを厭はで、白き腕を差し延べ、扉の木框を握りし儘半ば身を前に額に懸る後髪を小指に搔き上げ、輝き渡る月影を恍惚として見上げ居りしが。美くしき顔は次第に雲の懸る如く悲しみを帶び來りて、何事をか思ひ沈む樣なり。

憐れ處女の心は遠く彼方なる今宵開かる可しと過ぎにし日より噂高き府知事の舞踏會に走せ居るなり。其耳には市中音樂隊の奏する婉麗なる「ソナタ」の曲響き、其眼には銀燭燦しき下に、「ボンチット」戴きたる夫人、黄金の衿飾り卷きたる令孃、名譽ある軍人、年若き紳士などの打交りて「ツルワ」踊る姿の麗はしくも映じたる。其處には星と光りを爭ふ金剛石、光彩陸離たる眞珠なども左程に迄珍重せられざる樣の、黄金の指輪一つだに持たぬ我身に思ひ合され。思ふとはなしにホット突く息太く、輝く月に白く想念を書きたりしが、不圖我に回りたる顔には恥かしき色を浮べぬ。斯る事を思ふけ貧しき身を一層貧しき地位に落すヨりか、分をも知らずしてあやもなき事を望むは賤しき心情なりと

心附たるなる可し。少しく身を後へ曳きて兩手を窓の敷居に懸け、見るとはなしに淸しき瞳を動かして夜色靜なる四邊の光景を見廻せしが、其顏には再び悲しき影の上り來れり。

彼處に見ゆる燈火洩るゝ窓の下には、可愛子に乳含くませて守歌唱ふ母もあるならん、濕やかに優しき夫と物語る妻もあるならん、さては去り難き用事にて外出せし父を待詫ぶ處女もあるならん、されど天外孤客父なく母なく異郷の冬の月を、五階の屋根裏に泣く我如き人はあらざる可し。富は働けば得らるゝ物の身の貧しきを嘆ず可きかは。よしや其日の生活に事欠く悲しみはあるとも、産れし故郷の水を汲みて温かき團欒の席に連なる身なりせば。貧にや涙の氷る貧の苦しみは、温かき慰藉の言葉に解く可きものなるに。

斯く思ひ行く内に處女の心はいつの間にか、八重の潮路を遙かに越えて、夢寢にも忘れざる懷かしき故鄕に遊びぬ。身は東京の一隅に賤しからず生立ちし身の、振袖の袂を追風に飜して花は櫻を小金井に眺めたる、化粧美くして我姿人形となる鏡の前に口紅装ひし事など、幼稚き時の行動より、高等なる學科を受け居りし事など思ひ行く果は、十六歳の秋悲しく別れたる父母の俤の浮び出され、思はずも涙に眼を濡ほしたりしが不圖我と共に此國に誘拐されし婦人の、今も同じ此街に、恥は譬ふるに言葉なき醜業婦き身に成り下り居る事の心附れ。思ひ較べて幸福なる身よと回顧り、落つる涙を振り拂ひぬ。

此時處女の眼には黃金彫ばめたる寐臺、柔らかき衾、媚めかしき俚謠書きたる譜、心を亂す火酒の壜など、總て「マリア」の像の下に跪かんよりは、道知らぬ處女の接吻をこそ願ふ役德漢の好む品の數多くが映れり。其ヨりかは、我姿眺めて羨やましき思を頰に浮かべながら。放寬げたる胸の間より醜く乳を顯はし、帶

ゆるく大股に歩む憐なる女の姿を五人迄も思ひ浮べぬ。

夜色荒凉として窓に映る燈火の數も今は僅かに五六を餘すのみ。冷やかなる風は無言の中に過ぎ行きて、寒さは骨を刺す斗りなるも、處女は窓を閉さんとはせざりき。燃ゆる斗りの同情を友の上に注ぎて我を忘れたりしにやあらん。

世の人は醜業婦は皇國の恥辱を海外に云ひ擴むる悪魔なりと罵れり。彼等は人間の姿こそ備ふれ、只食する事と、身を飾る事とを知る動物のみ、能は意識にもあらで功名心を打消す戯言葉を話し得るのみなりと笑ひぬ。譯知らぬ人の眼に然映るも無理ならじ、事情知る我にすら悪事に打勝つ心を持たねばこそ、賤しくは思ふもの丶爪彈きせんとは思ひもよらぬぞかし。罪は彼方にありて此方にあらぬなるに。

其初の輕卒なりし罪こそあれ。盲目の杖を奪ふ如く東西知らぬ地に誘拐きよせ、甘言、强迫、暴力、威嚇とあらゆる手段にて暗路に導かんとする悲しさ。故郷に居りてさへ女とし云へば獨立の成難く、兎角は松に搦む姫蔦の吹く風に靡き勝ちの身、拒む力のある可きかは。よしや一旦は正しき道をこそと、意を決して其境遇を脱がるとも、語るに友なく縋らんに知己なき身の所詮は飢の日を追ふて身に迫り來る、云はゞ思ひ定めし其心は死の穴へ陷し込む悪魔の使となるなり。

思ひを翻がへして言葉の儘に從はんか、女の眼には分けて美くしき寶石の指輪、黄金の留針など思ふが儘に身を飾る嬉しさ。其身にしては只優しき一人の夫より惠まるゝと、數多くの夫より受くるとの差あるのみ。譬喩ふれば己が命を眼前に懸けて、生き永らへんと思へば身に着くる穢き衣裳を脱ぎ捨て、我が持てる錦の衣に着換ふ可しと勸めらるゝに異ならず。心弱き身ならずとも、生存らへんと思へばこそ清き心清き身をと

思ふなれ、何も一時の苦痛、心さへ濁らざりしならば、時を得て日本へ歸るとても、と、しほらしき心に己が心を慰めて誰も陷り行く身の涙なり。

多くの中には斯く迄も思ひ付かで、我は何處迄も女の身なり。よしや勞動けば過ぎ行かるゝ事業のあるとも、女の取る可き手術にあらぬ限は、操を破るこそと思ひ付きて成りし人もあるならん。世の人は必ず賤しき心態よと蔑すむなる可し、されど其は僻事なり。男は數多くの女を犯すとも、餘りと責められぬ如く、女性には死する迄も天より受けたる女性、容色を守らんとする特權はあるものなるに、我は只斯る弱き心に數へられたる身をこそ悲しむのみ。

飽く迄熱き同情と、眞心を持ちて優さしき處女は暫しなりとも朝夕共に暮らせし知人の上を思遣り、あらぬ方を眺め居たりしが。見る見る眉は昂り、眼は仇に對ひし如く輝きぬ。今更なから誘拐かされて來りし其初の思出されしなり。

皇國の恥辱も人の困苦も回顧らず、只一身の利益をのみ計る人非人とは、實にも彼の如き人を云ふならん。不思議にも其身軀の生きながら腐らざる事よ。彼國にて日本の裁縫師五人斗り求むと我が友より云ひ越しぬ、行かんと思ひ給はずや、勞働の時間は八時間との事なり、されば餘暇には好み給ふ書籍も學ばる可し、獲難き幸福なりと我は思ふなれ、婿君など持ち給ふならばと。蜜よりも甘き言葉の數々、思ひ出すだに口惜し。横濱を出づる時秀でし富士の姿を回顧り、互の胸に畫きたりし想像の如何斗り麗しかりし事よ、浪路の上に一點の影も止めざりしに。

此地に着きてよりの彼等の待遇、滅さんと思ふ敵には先づ恩を加へよとの諺は忘れざりしに。恐ろしき魔醉劑與へらるゝ間と母の懷に温かき夢見る如く思ひ居りしおぞましさよ、謀られしよと心附きたる時は最早遲

かりき、三晝夜續けて湯水をも與へず闇室に閉じ籠められたる苦しさは。

藝は身を助くるの仕合と云ふ、されど我に「バイヲリン」の音を樂しむ心のあらざりしならば、やをら今日の身にある可きかは、優しき母様の「バイヲリン」彈く事を教へ給はざりしならば、恐ろしき强迫の言葉に打勝つ勇氣のあらずして、憐なる友と同じ命運に落ちしやも圖られざるに。我は只眞心を捧げて惠深き神の大御心を感謝し奉らん。

淸き心、正しき道の上には愛の光りの輝くなり、世界は廣くとも邪慾の渴止む可き水はなきものと最期の際に迄仰せられし母の教を忘れしにや、憐は我よりも不運なる友達ばかりかば、盲目、啞、聾と數ふれば濱の眞砂の數にも劣らざる可し、健全なる身の樂しみは、境遇のまにまに視る眼のさまざまに。金剛石よりも美はしき星の光、鈴の音の如き鳥の囀づり、香はしく匂ふ園の花、夕暮の空染むる雲の色彩、盡きぬ自然の巧は變らぬ愛の光りをほの見せて、慰藉の言葉を與へ、希望の心を漲らし、若き命の焔を送るものなるに。暫しなりとも神の定め給ひし命運を疑ひ、身の薄倖を嘆きしおぞましさよ。

月を浴びる乙女の姿、神々しき迄に美くしかりき。淸き瞳、蕾の如き唇、「バワリヤ」の神像よと思はれぬ。頭を少し斜に再び四邊の光景を見廻したりしが、風さらさらと黑き髮を吹き亂しぬ。燈火洩れる窓は最早一つだに非ずして、月のみ高く議事堂の頂を離れて輝けり。身を引きしよと思へば窓は音もなくて靜かに閉されぬ。床を踏む輕き履音の聞へたりしが、軈て寂寞なる「シニョン」の街に天使の聲の傳はりぬ、其は處女の毎夜寢に就かんとする前に唱ふ讃美歌に合奏する「バイヲリン」の響なり。軈て其も止みしよと思へば間もなく燈光は滅しぬ。美はしき月の光は恰も菫に似た

る處女の胸に樂しき夢を囁く如くに乙女の惡を照らしぬ。あはれこの生活いつまで續けむとすらむ。（完）

雜　錄

女子の書簡文（二）附瀨川采女正が妻の事。

伊　那　六　茛

書簡文を一貫して、なほひろくいはゞ、文章を一貫して貴ぶべきは、誠實といふことなり。これ、あへて女子の文章のみに限るにはあらねど、女子のに、この誠實といふもののなくば、實に手にとるものだになからん。かへす〲も、文にたふとぶべきは誠實の二字にこそ。むつかしき漢字を、こと〲しくとり陳ねずとも、たゞ、人の卑むなる平假字または片假字のみをもて綴りたらんとも、その文に、誠實だにあらば、讀むひとを動かすべく、鬼神をも感ぜしめん。假字文のことにつきては、他日いふことあるべし。

親に對しては親を戀ひ、夫に對しては夫を戀ひ、子に對しては子を戀ふることとは、人の至情なれば、書簡文においても、亦殊にその情を盡すべきは當然のことなり。おのれは、今こゝに、左の一篇を掲げて、その後に、その評論をこゝろみんとす。

瀨川采女正のその夫におくりし書。

便の船をよろこび、そゞろにとり向ひまゐらせ候。まづこの文したゝむるゆゑよしを述べるなり。

絕ゆるまもなく思ひはべることとも多かめれど、心を合せ語らふべき人もなければ、閨さびしく、ひとり片敷く袖の露、床は海、枕は山と立ちのぼる胸の煙はるゝまもなき涙の雨そゝぎ、何時をかぎりの露の身の消えやらぬほども恨めしきぞかし。其のあらましをいさゝか知らせまゐらせ候。限なき心のうちまづ訴へむと欲することは、夫を念ふ情にぞある。入りみだれたる情緒をうつさむと欲するからに、かやうにあやなせ

る文字をつらぬる、あながちにつくりたる筆つきといふべからす。誠にやみがたき至情より露出せるものなり。眞情の人を動かすこと、以て見るべし。

そこほどその御許といはんが如し。は、世渡るわざの事しげきにとりまぎれ、もはや、此處三字此の極などのことはおぼし出さるゝこともなみの音、すさまじき御心とやなりぬらんと、おもひの種心のうちにしげりあひぬるまゝ、硯に對ひ、ひとり煩らふことその墨も涙の海とやなる。

行く水に數かくよりもはかなきは、
おもはぬ人をおもふものかは。古今集

とよみおく「よみおかれたる」とあるべし和歌のふることとまでも、古今集には「おもはぬ人を思ふなりけり」とあり。作者ふとおもひあやまりて、思ふらのかはとしるしたるなるべし。吾が身の上におぼえて、其の人の心の内推しはかり、少しは慰めぬ。

人の心をおしはかるは、とりもなほさず、人の同情を喚びもさむるにこそ。中心を訴へむに人なければ、誠に古歌をおもひ出でゝ、無限の恨を慰む。無限の恨慰め盡さず、すなはち、更に、次に「思へば〳〵」と文を起し來る。

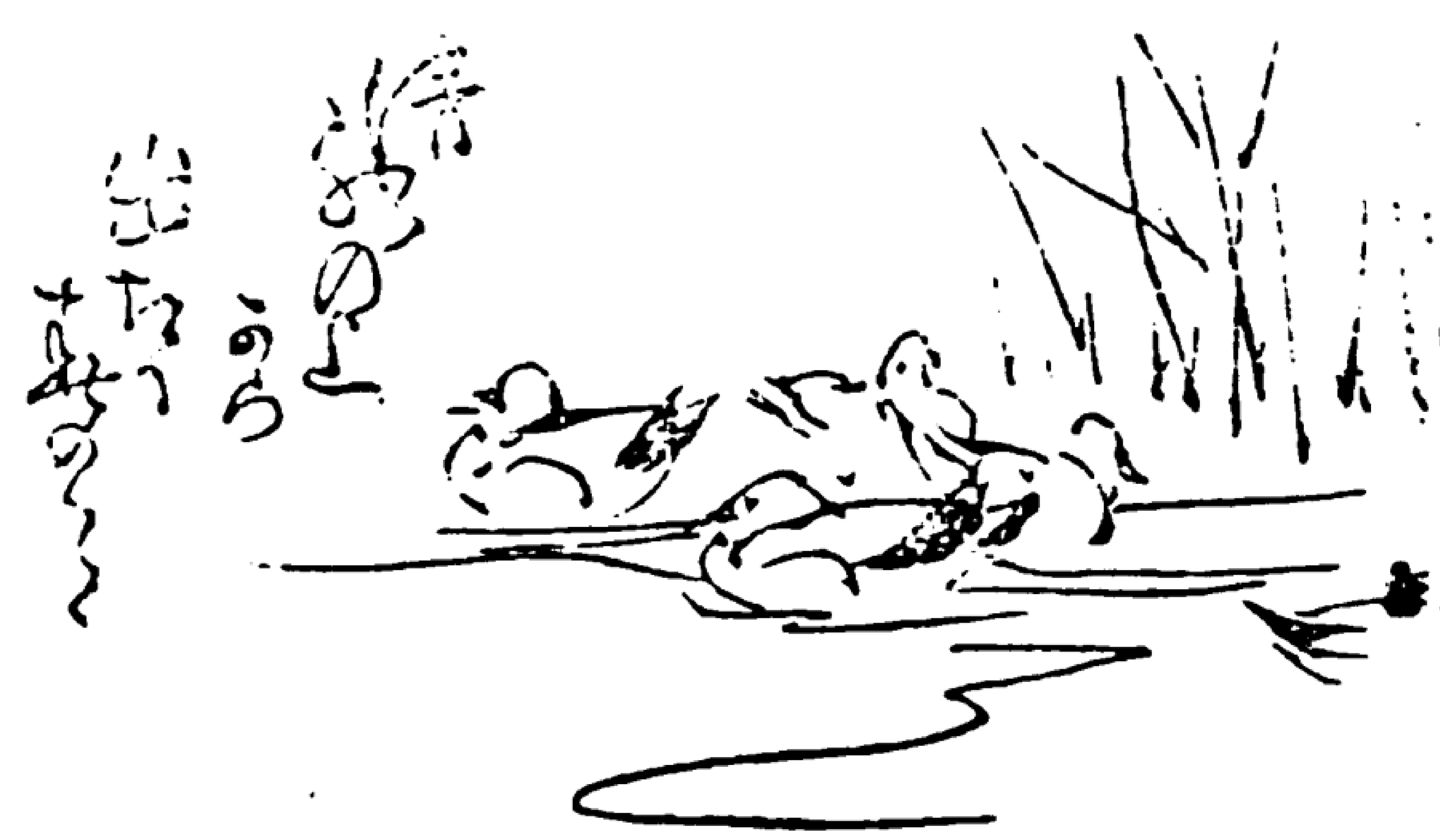
思へば〳〵、添ひまゐらせぬ昔もありつるに、こは何の報にておはしますぞや。「おはします」は敬語なり。此處は、夫の上をいふにもあらねば、「候ふぞや」とやうにあらたむべきなり。あさましかりつるわが心かなとはおもへども、夫婦とならずとて、亦天縁なれば恨むべきことにはあらぬを、かくの如く、しばしのわかれの程だに堪へがたくおもふは、そも何の應報ぞと、みづから己をあさましく思ふなり。よきにとまらぬ心のくせとして、よきほどに制しとゞめかねたる心の癖ゆゑにのこゝろなり。また戀しうおもひまゐらせ、物の怪もあるやうに人もいひなし、妖怪などのたゝりの爲にしか夫を戀ひしたふぞと人はいひなすとなり。われも亦、心の正しからぬことを知れり。

恨の數々述べつくして、やう〳〵おのれに反りてわが心を考ふ。

そも〳〵、心は身に添ふものなれば、身のまゝになるべきもののなるか。されば心のまゝには身はなるものとこそ見えはべれ。まことに、心は身の主ならしと、古き文にも多く見えしが、げにさも覺えぬ。

文氣やう〳〵沈まんとす。よく筆路をたどりて、作者の心中を窺ひ見るべし。

いかなる神の結びあはせにか、かくあさはかなる契とはなりぬらん。或る人の、深う悲びあへりしことのありしを、いや、それは、はかなきことにてはべるなり。たゞ思ひ棄てさせたまへと諫めつることもありしが、さきには人を諫め勵ましつるを、今は、吾が身の上になりぬれば、却りて事の是非を判斷しがたし。其の質暗うして、吾が身暗愚の性質として、あやなきことをなん思ひ焦るゝも、さほどにもなきことを辨別もつかず思ひ焦るい女の身なればとて、またくちをしからざらめや。心を心のまゝにせざらむも、なほあきらかならずおぼえはべりぬ。たゞすの神の御心には違ふことにてはべれども、これより後は戀せじとこそ祈り申すべけれ。古今集にこひせじと御たらし川にせしみそぎ神は受けずぞなりにけらしもなどの歌あり。吾が身を顧み、吾が身を責め、吾が心を責め、つひに、神に祈りても戀せじとすることこそ、哀情一句は一句よりせまり來る。切實にして究極せる婦人のかよわき心の奥を見る。



古より一例すくなき高麗もろこしとやらんへ渡りたまふ。かぎりなき海山を隔てゝ、互に風のたよりをさへきゝかねまゐらせ候へば、かく思ひ絶えんとせしも亦宜ならざらんや。更に思へば天正十八年の秋より、以下往事を追懐してしるせり。高麗の國へ御出陣あるべき旨おほせありしかども、更にまことゝも覺えはべらで、多くの月日をすぐしはべりしが、いつの間にかあらん、文祿の年の三月にも移り來て、あすは高麗の國へ船出したまふなると、何方もこと〳〵しうしく罵りあへりぬ。ぬ文字不用大かた、夜もなかば近う更けしかば、行くすゑのことなど、かはらじとのみ語りつゝ頼め

おきつるに、夫に賴ませおきつるにはや、あけがたの空になりて、
別をいそぐ鳥の聲々うちしきりしかば、

身はかくてさすらひぬとも、君があたり、
去らぬ鑑の影ははなれじ。

と詠みおく和歌の如く、是をかたみにと、疊紙なが
ら殘し置きたまひしを、まことに袖より外にもらす
かたもなく、恨みては讀み、讀みてはかこち、朝な
夕な詠めくらしはべりぬ。

思ひつゝ寝ればや人の身えつらむ。
夢と知りせば覺めざらましを。古今集

と小町（小野の）がよみし言の葉もげにさることぞかし。

かぎりとて別るゝ道の悲しきに、
いかまほしきは命なりけり。源氏物語桐壺の卷

古歌をひき來て、わが思を述ぶる、この女の情操おもふべし。され
ど古歌、古語などを引用することは、女子はよく〳〵注意すべし。
やゝもすれば、さかしらだちて、みきゝのくるしきものなり。

まことに、はかなき命ながらへ、かゝる思ひもおさ
ましくおぼえはべれども、今ひとたび、見もし見えも
し、つもりぬることもはらしまゐらせたく候うて、
あだなる露の玉の緒も露の如き生命もながゝれとのみ祈るば
かりにてこそ候へ。何事も〳〵、あはれとおぼしめ
し出でさせられ候はゞ、數々御うれしく思ひまゐら
せ候。

あはれさおぼしめし出でさせられ云々の一句、畢竟この一篇の大主
意。主意のきはめて簡單なるに注意すべし。

申したきことゞも、此上なうこの外なほあまたおはしまし候へ
ども「おはしまし」又あやまり用ひられたりあわたゞしき出船のいそぎにと
りまぎれ、いかゞ申し候ふや御許たまはり候はゞ。
めでたくかしこ。

これ結末

繰りかへし〳〵、その後、消息のおとづれもおは
しまさず、おんゆかしさの程堪へがたく、あまり
に目も恥かしくこそ候へ。まことに出でやらぬね
やの裡、深きおもひの淵となりたる〳〵。

かくあらん行方を知らで、頼みつる
　　我が心をば誰に嘆たん。

これは、みづから思ひよりにておはしまし候（おはしまし候。これもまた）おんはづかしくこそ候へ。めでたく〳〵。

　　五月九日　　　　菊

　瀬川うねめ殿にて
　　　人々申したまへ

この書簡如何にしてか世には傳はれる。乞ふ、下の一節を讀め。「薩州島津内小野攝津守優にやさしかりし息女をもちはべりしが、肥前龍造寺が家臣瀬川釆女正に嫁しぬ。釆女正高麗在陣のをりふし、彼の妻あこがれしおもひの程を、聊物にまるし侍りしを便の船にことづておくりけり。をりふし難風おびたゞしく吹き來て船は損じ、荷物は博多の浦へ寄り來るを、漁夫拾ひ上げ侍りしが、その内に塩染やうの紙にてよく包みたるものあり。披いて見れば、文箱とおぼしき物はべり。ほどき見れば、詩書などもけだかく尋常ならぬ文箱なり。賤しき者などの披露すべきものにあらざめりとて、處の吏務へさしあげぬ。吏務うけ取りて將軍の御前衆へかくと申しあげはべりければ、すなはち秀吉公へ文箱の符をも切らずして上げしかば、右筆にてはべる山中山城守をして御一覽あるに、女の文にて、筆勢いとうつくしく〳〵書きつゞけたり。……」（太閤記）



かくて秀吉は、この妻女の心を酌みて、龍造寺に命じて、瀬川釆女正を歸陣せしめきといふ。曠世の英雄秀吉も、實に感動のあまりにやかくは情あるさばきはしけん。この書牘に一貫せる夫を戀ふる心

の誠は只に貞婦の鑑といふべくこそ。

嗚呼婦の夫を戀ふるは實にこの瀬川の妻女の如くなるべし。たゞにこの情の人を動かすのみならず、行文すべて悽婉の致をきはめ、ちとの疵あるにかゝはらず、看る者をして、その濃なる心情を想はしむ。叙情の文の至れるものといふべし。されども、この文、その大要をつまめば、たゞ、夫に逢はざるが故に戀ひしさに堪へず。この心酌みてあはれと思ひたまはれといふに過ぎず。そも〳〵彼の夫采女正は當時如何なる身にかありし。萬里の異域とはいへ、公の命を奉じて、その職に勤めてあるものにあらずや。秀吉の征韓の擧の得失利害はしばらく云はずあらん。たとひ夫を戀ふる情は、切にして且質なるも、敵を獲て歸れ、さらずば楯にのりてかへれといひてその戰塲に臨まんとせる子を勵ましたりといふ古の希臘の婦人に對して耻づる色はなきか。もとより、かれは人前もあるべく、これは秘密なる文書のうちのことなれば、この秘密をとらへ來りて、あながちに酷論すべくはあらねど、奉公の爲に夫を勵ます一行の文字を欠きたりしは、誠に千歳の大恨事といふべし。これをかの（前號に掲げたりし）木村重成の妻の書簡に比べてはいかに。文章の一點にいたりては殆優劣あらざるべく否、或は、かへりてこの瀬川の妻のかたや優りたらん。されども、いはゆる龍を畫きてその眸を點せざりしものなるは、これ萬世婦人の龜鑑とすること能はざる所以なり。惜むべし〳〵。願はくば明治の婦人、深くこゝに鑑みて、其の文と情とを學び、更にこれを勵ますに烈日の如き義理の判斷を以てせよ。かくして、はじめて日本の婦人は歐米の婦人をも凌駕するにいたるべし。おのれは、こゝに我が國の古代の婦人の歌數首を、萬葉集の中より撰びて、いかにその時代の婦人の氣象のをゝしかりしを味はんとす。

吾がせこは物なおもひそ、事しあらば、
火にも水にも我なけなくに。

たとひ水火に入らんほどの大事ありとも、わがあるからは吾が夫物を思ひたまふなとなり

あり磯越え外行く波のほかごゝろ
われはおもはじ、
命死ぬとも。

吾が夫は海を渡りて外へ行きたまはんが、われは命死ぬともやあだし心をもたじとなり。

さぬぬ夜は千夜はありとも、
吾がせこが
思ひ旋ゆべき心はもたじ。

吾が夫とふしごを共にせぬことの千夜はありとも、君をして後悔せしむる（吾が心のかはりたろにつきて）如きとはせじとなり。

天地の神に幣おき齋ひつゝ
いませ我がせな我をし思はゞ。

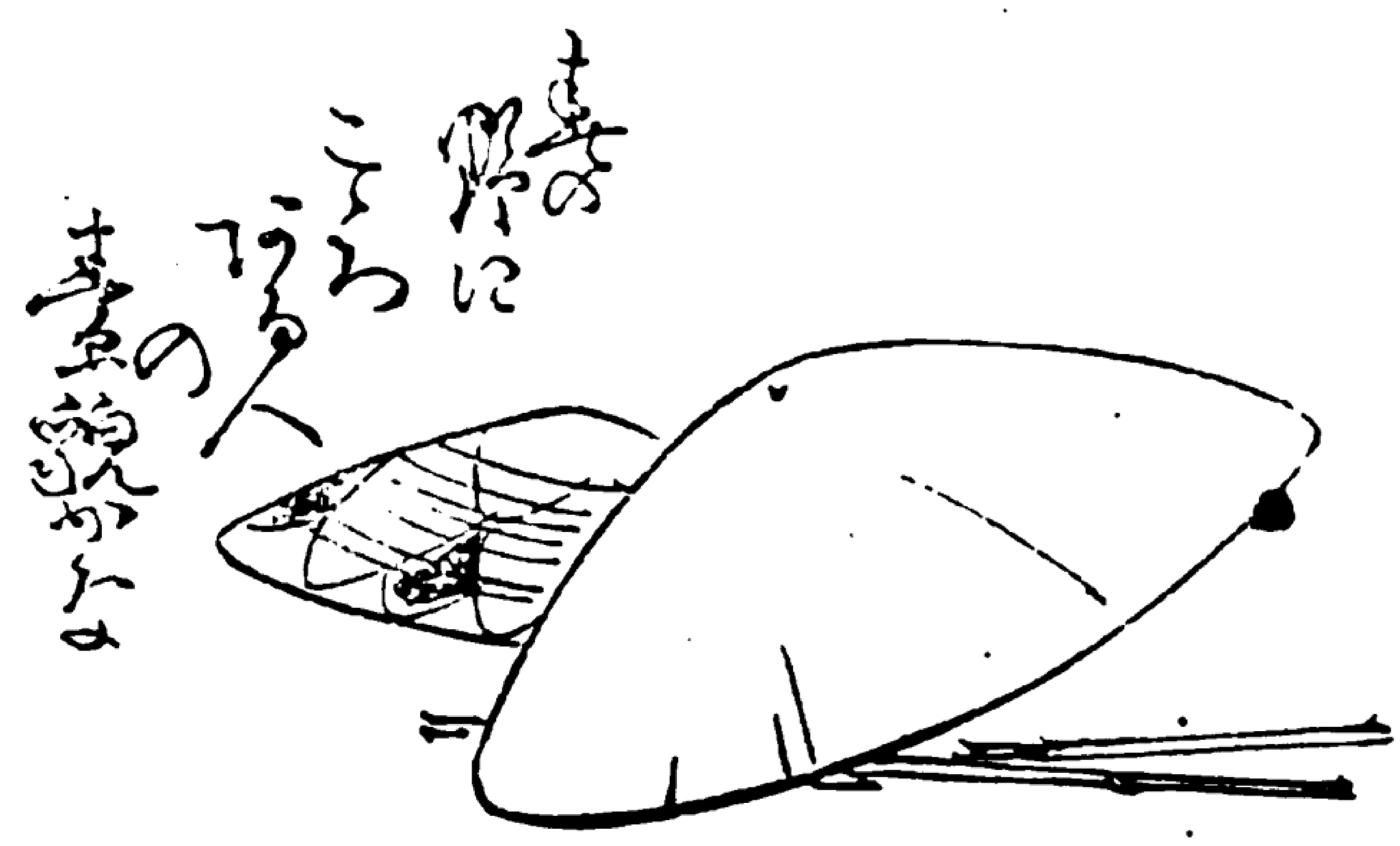
吾が夫われをおもひたまはゞ天神地祇を齋い祭りて安穩にましませよとなり。

君が行く海邊の宿に霧立たば、
我が立ち嘆くいきと知りませ。

栲ぶすま新羅へいます君が目を、
今日か明日かといはひて待たむ。

新羅へゆきたまふ君に逢はんことを別るゝ今より今日か明日かと、神に君の平安を祈りて待ち卒らんとなり。いはひて待つといふ處に心をつけて見よ。

情のやさしきうちにも、凛然たる氣象あり。諷詠して味ふべし。



貧家の一日

一　布衣

坊ちやん御目覺め遊ばした、それ御手水、お湯と傍から持上げるやうにして育つる人々の身の上は夢にも知らぬ貧家の小兒、朝むつくりと起るが否や、さア便所といふても裏向ふ十二軒の箱長屋に總た一ツの總後架、井戸といひても其の

通り、一個の釣瓶を十何軒して汲む事ゆゑ、起ぬけから井戸端は透間なく待かけて漸と一と手桶汲んで來た水を土瓶にも取り飯をも炊ぎ、殘つたのを少しづゝ鐵葉の盥に取り分けて家内五人の口嗽水とするほどの切なさ、主人は此の貧窟にお定まりの朦朧車夫、一日の稼ぎ高平均三十五錢あつても此の節飯米なら潤ぶり二升と買へぬ仕末、やう／＼妻子の手内職にて家賃を拂ひ、薪炭、香の物を買ひたして、かつ／＼に暮して行く世帶と知るべし。

生命の綱の飯は缺さず毎朝の煙りを揚げて、今やう／＼炊ぎ畢れば、妻は差しあたりて御菜の穿鑿、庖廚をあさりて鹽の外には一と撮みの菜の葉もなき有樣なれば、まづ前夜の殘餘を財布の底に搜ぐりて味噌を二錢に汁の身の葱一と束ね、買ひ求めにと出で行く後より鈴を鳴らして例の煮豆屋は來りぬ。向ふ三軒兩隣り此處へも此處へもと、重茶碗、丼、皿、小鉢を持ちたる手は打付竹の格子戸より降るほど顯はれて、ヒシホ、金山寺、薤、隱元豆一品づゝ買ふて朝のお菜は調ひ朝餐滯ほりなく濟めば、天氣摸樣を窺ひて主人は出仕事の仕度にかゝる、昨日三貫五百の稼ぎ高は米代、屋賃に殘らず遣ひ果して妻が手内職の足袋の底縫百足の賃錢僅かに十五錢のあるを草鞋代に二錢、煙草に一錢五厘、時借りして出て行けば、跡に小兒は五厘學校へ急がんとて授業料を強請、毎日二枚づゝ白紙を貰ふは物の耗えなりといふ程に辛くも古帳面の餘白の切れやら青梅綿の包紙を皺伸して間に合せたるも憐れなりき。

家計を幇くる二人の娘の姉は板紙の箱を貼るとて近所の仕事場へ行き、妹は下駄の緒の内職ありて是れも同じく通ひ勤め、辨當のお菜の毎日／＼同じやうなるは人前悪しと女ながらに少な事に氣が揉めて何にしやう彼にしやうと、揉めば結局錢のいる事偶には御晝食に鮨でも喰ふと言ひ出せば其樣な事して一日の賃錢をど

うするのかと母親に戒められて不性無性に出て行きぬ。

妻が内職の足袋の底縫も晝前十五足縫ひあげずば、一日の埒は明かずと思ふ程に朝餐の箸を投げると直ぐに掛りても兎角に暇間多く捗の行かぬものなるに午前も九時過ぎ纔て十時頃ともなれば近所の道樂娘の今御目覺めといふ顔付にて寢衣姿で入り來り長く起きれば朝の御膳が一度省けて三錢五厘の儉約など、御定りの冗談言ひ〳〵近所合壁の人の噂、男女の影口、有た事やら無い事やら、果は前夜は何處其處の寄席へ行つて誰某れに何を奢られたのと浮氣らしい物の言ひ振り、惚けた口の利きやう、芝居が見たいの假聲が聞きたいの、何が見たい、喰いたいのと五月蠅事の數々、其處等で

り。

突然響く午砲の音に吃くりし、今鳴つたのは硝子場の氣笛それぢや最う御晝かと慌忙て〵歸り行くも道菜な



午砲鳴つて小兒は學校より歸り來る、手足を墨だらけにして衣服を裂いて居るは喧嘩の果か、讀本に墨汁澑されて翌日から習ふ事の出來ぬと泣きつ喚きつするかと思へば膳立する母親に向ひてお晝のお菜に何を喰べるの角の魚屋を見て來やうか、販臺にどつさりあッたよ、鯖だの、比目魚だの、鱈も、蛤蜊も、廉いじやないかと强請りかゝるも無理ならず、近所合壁は其の日暮しの貧人ながら口には奢るが此の窟の習ひ、三軒目に掏摸の親方の家あり。毎日何處から稼ぎて來たのか、十五六を頭にしての小兒の一群は、鮨、天麩羅の立喰、

汁粉、大福餅と屋臺店をあさり軍鶏屋へ上つて大袈裟に札紙幣きつて飲食するを見習ふては、おれも彼等の仲間に成らうかと羨み嫉むも是非なし。

往來は晩の豆腐屋の呼聲長く、土方人足、日雇取、製造塲の通ひ工女、一日の勞働に疲れたる工夫のいろいろ隊を成して歸り來れば、緣日商人、夜店師は地藏、毘沙門の今夜の賑ひを心當してそれ〲荷物を擔ぎ出し、おでん、燗酒、大福餅、野店の屋臺店、燒鳥を商ふもの、蕎麥がきすいとんを商ふもの、皆それ〲荷車に屋臺を載せて夜の稼ぎに出づるもありて、歸り來るもの出て行くものにて一時は旁午雜沓を極む。

主人が仕事の歸りを待ちかけて日濟屋は門口より聲かけて入り來る、それ通帳はどうした、それは質屋の方

おや、今日は二日分濟して貰いたいと苦い顏も商賣、

トパクザと日暮元のごたつき中に夕餐の仕度もまづ調ひて膳に向ひながら主人が今日のわぶれを言ひ出せば女房は諸色の騰りし事を喞ち、娘小供は仕事先にて手間賃の吝くなりし事を呫き、小兒は膳の上に魚肉のなきを不足がるに是れも無理はなくして果は段々世のつまりゆく噂、三年前は二貫取つても米が二升は買はれたり、今は三貫取つても草鞋蠟燭に遣つて仕舞へば餘に米一升がかつ〲にて煙草一と玉も買ひ難き始末といへば姉娘はいつそ內職を廢めにして女髮結にてもならうかと言へば、妹娘は田舍奉公に出れば三十圓位借りられると早身賣の沙汰に及ぶも情なき事なり。晩餐果つれば家主差配人來りて日掛を集め、八時、九時に至れば二錢の量り炭に火地輪と火鉢と行火に入れて跡に殘る粉ばかりの火も熄へ〱となり斯くてはならずと漸と消炭次いで夜寒を凌ぐも早手燭に油減りて燈明

もとぼ〱の憐れ世帶や。

女流の歌俳

一栞庵

圓珠尼の歌

上野國沼田の里に、享保の頃圓珠とい
ふ尼ありけり

あらいその岩に砕けて散る月を
一つになしてかへる浪かな

その歌をよみたりけるに、彼方此方の
人聞傳へていつしか雲の上のやごとな
きあたりにも聞えたりけん、御門こよ
のうめでさせ給ひて、

上野の沼田の里にまどかなる
玉のありかを誰かしらまし

との御製を下し給へりしとぞ、まこと
にゆゝしくもめでたき事にこそ。

游女珊瑚の歌

京都島原に遊女珊瑚といへるありき、



たゞやたれたれかは今日の夫ならん定めなき世に定めなき身は

とよみたりけるを、武者小路實陰卿きこしめして、な
なめならず稱歎あり。いとあはれにもおぼしければ、

川竹のうきが中にも敷島の
道に情の色は見えけり

とあそばして、人傳手に送り賜はりし
とかや。

眞淵門下の二才女

紀の殿につかへまつりしもみ子は、又
の名をやしほの子とも呼びて、老ひて
は萱子とも唱へき、眞淵門下の才女に
して、家集一卷あり。ある時清信院よ
り、ひいなの童、鹽貝をみがきものせ
しなど數々賜はりし折、

あら磯に沈みはてゝも大舟のおもひたのみしかひをこそ見れ
うつくしき振分髪を見るからにすゑ長からん事をこそ思へ

又同門にてよの子といへるは、同じ殿に仕へて瀬川と
ぞ呼けり、姓は鶉殿氏なり。さほ川と名けて家集一卷

あり。水上の月を題にて

古里の佐保の川水流れても世にもかくこそ月はすみけれ

また木曾路の記とて、寛保八年五月紀の國へまかりつる折の紀行一卷あり。江戸を立つ時人の許より、

君がゆくわかの浦わにゐるたづのたづきの知らず我やなりなん

などいひておこしければ。その返しにとて、

世の中のたづくしくは思ひやれ雲井のよそにひとりなく音を

となして送りたりける。

三田茂左衛門が妻の歌

尾張國名古屋の人、三田茂左衛門が妻井上氏は、夙に才女の聲あり、尼了然と佛の道を語りける折、

常に行く道ならはこそ世をうみの蜑の舟にものりて渡らめ

尼了然は同じ國の人にて、植山十藏といへる儒臣の母なり。夫に後れし時容貌の美しく、年若かりければ、懸想する人もあるがうるさくて、額に二所まで燒鐵をしあてゝ、そのさまをそこなひ、かざりをおろし尼とはなりけるなりと、共に正德の頃の人なり。

祝部成仲女の歌

成仲其子を失ひて愁痛の餘りにや

もろ共に越えましものをしでの山又おもふ人なきみなりせば

として其女の許に送りたりしに、女とりあえず返にとて、

君がためいさゝ命のをしきかなかゝるうき目をみせじと思へは

父子の情見るからに涙ならぬはなし、二首共に新拾遺集に入りたるもことはりなり。

小野寺秀和が妻の歌

名は丹子、灰方氏なり。和歌の道に秀でゝ才女の名今に傳へぬ、秀和父子江戸にて吉良を討ち、死を賜はりし由を聞きて、

夫や子のまつらんものをいそがまし何か此世におもひおくべき

とよみて、其儘食をたちてみまかりつるとか。

梶子の歌

梶子は平安祇園南林茶店の女なり、幼きより和歌を好み、夜毅の歌世人の夙に知る所なり、年十四の折なり

ける、歳暮の戀と題して、よめりける歌に

戀々て又ひさしくせもくれにけりなみだのこほりあすやさけなん

といへる名句あり。家の集一巻名けて梶の葉といふ、其女百合子も亦名歌多し。

遊女吉野が俳句

名は徳子、父松田菜元和中さすらひて京に在り、扇折をなして業としけるに、父母共に世を去りて、身は島原に遊女となる、廓中の櫻いと美しふ咲き亂れたるを見て

ことにさへ嘆な吉野の花盛

これより吉野と人は呼なしけるなり、和歌管絃の道にもたけ、能書の聞えあり、灰屋紹益が妻となる。吉野が秘藏の蟹の盃世に名高し。



竹岡尼の歌

室の遊女たりしが、容貌美しかりければ、源頼基朝臣之を寵し、京に伴ひ居ると一年、棄てられて室にかへる、又遊女の行をなさず。一日頼基朝臣西州より京に歸るの途すがら、船を室にとゞめけるに、髪をきりて之を陸奥紙につゝみ、

つきもせぬうきな見るめのかなしさに
あまさなりても袖ぞかわかぬ

と一首の歌を添えて船中に投入れ、尼は一生を播州竹岡の庵に送りはてけるとよ。

園女櫻花の歌

伊勢内宮の神官荒木田一有の妻なり。門前垂枝櫻あり、花盛に咲き出でゝ、往來の人の目をひきしかば、誰彼となく之を折り去る者多かりければ。園女此時十一歳の少女ながら、

めづるさも手折ぞ花の惜ければたゞ見るのみをいへづさにせよ

となんよみけり、人々世に傳へて、又枝を折るもの無きには至りき。後尼となりて智鏡と號す享保十一年四月廿日江戸深川にみまかりぬ、年六十に餘れり。

佐介貞俊が妻の辭世

貞俊北條氏に臣たり、元弘の亂貞俊敵に捕はれ、最後に臨みて、衣と佩刀とを僧に托して妻に送る。妻之を見て歎き悲み、

たれ見よとかたみを人のとゞめけんたえてあるべき命ならぬに

と一首をとゞめて、刄に伏したりける。

大内義隆夫人貞子の歌

貞子は内大臣藤原秀房の女なり。義隆京師に朝す、國に寵妾あり、貞子時服など贈りて其つれ〴〵を訪ひ慰め、一首の歌を添えぬ、

身をつみて人のいたさぞ知られける戀しかりけり戀しかるらん

と貞子は多く京にありけるが故なり。妾其志に感じ、落飾せんと乞ふ、夫人ゆるさずして共に睦ふ、義隆に仕へたりけるとか。

游女夕霧の俳句

京島原の游女にして俳諧をよくす、寛文十二年扇屋四郎左衛門大坂新町の廓に移るの時、共に大阪に下り、延寶六年正月六日沒せり、

見の親の手笠いさはぬ時雨か那

の句、世傳ひて以て名吟となせり。

柴田勝家夫人小谷方の歌

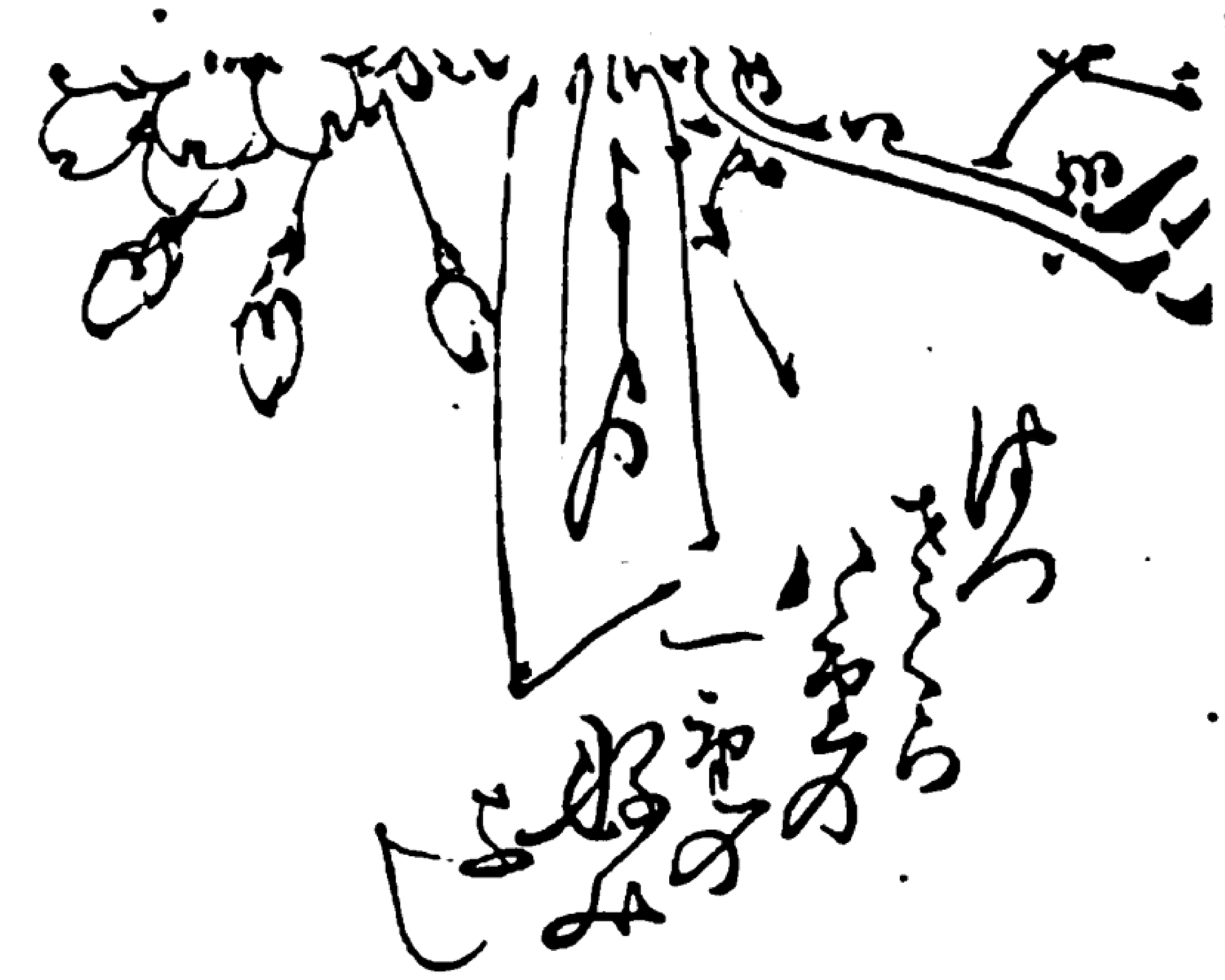
小谷方は織田信秀の女、信長の妹なりき。淺井長政にとつぎて三女を生む、長政亡びて三女と共に再び柴田勝家に嫁せり。天正十一年秀吉越前に來り、勝家が城北莊を圍み、城既に陷らんとす。勝家死を決して盃をあげ、其室小谷方をして去らしめんとせしも。小谷の方涙を垂れて應ぜずして曰く、妾既に淺井氏に死すべかりしなり。今君が爲めに死せんとせめてもの思出にて侍べるなり、とて三女をば中村文荷齋をして城外に送出さしめ、勝家と共に自刄してはてぬ、年三十七。

折柄杜宇なきければ、
さらぬだにうちぬるほども夏の夜に夢路をさそふほとゝぎす哉

矢島楫子女史の談片

女子學院—女子と英語—英語敎師—その敎授法—卒業生の職業—その家庭—矯風會—婦人とその眞人—老人會の起因—その感化—老婦人と孫女

女子敎育に矯風事業に專ら女子精神界の發達に熱心鋭意なる矢島楫子女史を、麴町二番町の女子學院に訪ぬ。學院は下町の塵を離れて幽靜なる地に派手ならぬ西洋館、緑の樹葉常磐の色濃かに、門を入りて道の左右に茂りたる、氣自から淸し。奥まりたる西洋風の建物が女史の居宅なりと聞きて訪ひ二三の少女出で來りたるに刺を通づれば、やがてチルの綿入れたるに被布着たる老婦人の束髮せるが出で來て此方へと導かれたるは廣やかなる應接室、椅子卓子兩三個を置けり。老婦人は寒暄を述べて椅子に凭りたるこれぞ女史その人なりき。



女史が風采は端正温雅のうちに嚴肅の格ありて、さすがにまた快活なる擧止、淡泊なる言動おのづからその人格をあらはせる心地せり。

女子學院の創立は明治九年、系統は新榮女學校と櫻井女學校との合同より成れるものなり。生徒敎養の目的は善良なる家族をなすに足るべき智德を具ふる女子を養成し、併せて普通學敎員たる撿定を經て資格を得るの準備をなすに在り、基督敎主義を以て敬神の念愛國の情を涵養し家事經濟兒童敎育等の眞法を習熟せしむ、女史の語られし所によれば、

女子敎育の盛にせざるべからざるは勿論なるが、其敎育上女子が外國語（重に英語）を知らざるは確に缺點なれば、英語の習熟は思想智識品性の上に於て必ず等閑にす可らず最も切要の事なりとす。是が基礎となりて女子が社會の一の勢力となり、國家の爲め人類の爲に裨補る所あるべきなり、女子敎育が振はずば、日本は到底文明となり幸福を得るといふと能はざるべし。

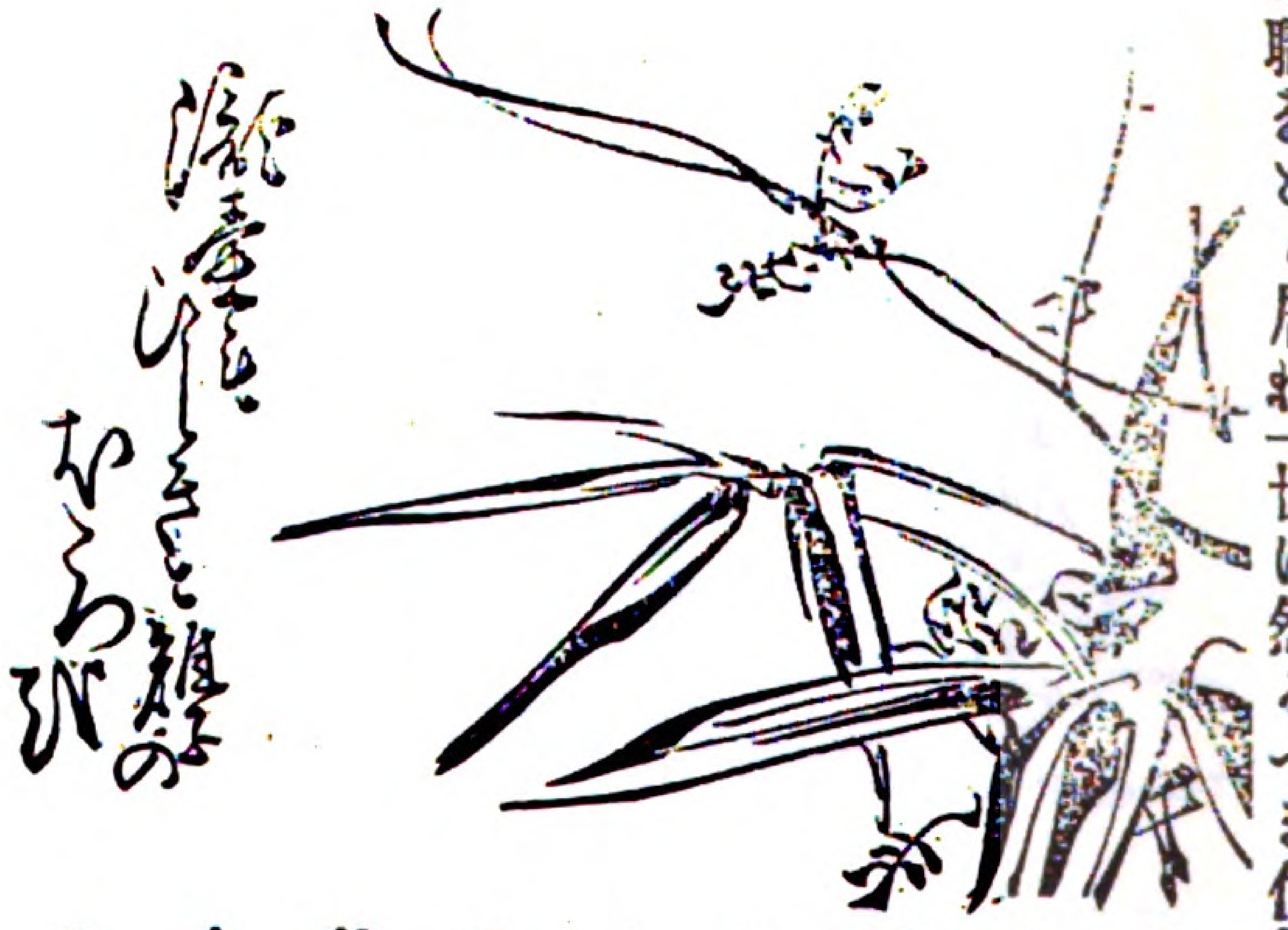
されば英語は予が心を用ゐて女子に習熟せんとと務めしむる所なるが、今日の學制によると高等小學卒業にては到底英語を習ふ初歩にも行かぬゆゑに、女子學院は爰に英語を加へたる高等小學科（四年）を設け本科四年を經て先づは英語の習讀も自由なるに至るやうなし、それより敎師の資格あらしめん爲に、高等科（二年）を置き文學心理學天文學基督敎正據論等に及ばしめ、研究の科となせり。故に此校全科卒業には、尋常小學を卒へてより大抵二十歲位に達するなり。

さてまた女子と英語との關係につきては、國語上の事は日常言語の自然より讀書も自然容易なれど、英語はまづ語を覺えて書を讀み得るに至るまでが難しく骨折なれば、此處に注意して敎授法に呼吸あり、英語敎師は外國婦人なるが、熱心に敎授するまゝなるべきたけ多く覺えさせんとす、生徒はまた能きれば能きるだけおもしろくなりて多く覺えんとするより、その如くなしゆけば、必ず限あるの能力害を蒙りて、却て身心上の健康に禍を招くとあるが故に、此點につきては、生徒に向ひ、なるべきたけ覺え方を扣え目にせよといふなり、十分習ふべきところは六七分にして置くかよろし、輕く／＼と傍より生徒に注意す、こは敎師の方にいふときは敎授上の妨げとなれば、生徒の方にそのつもりにて居るやう言ひ置くにこそ、生徒自からは知らずともあまりに能力を用うは大なる害となればなり。此間の手綱の執りかたは頗る難かし。

卒業生は皆遊び居るものなし、過半は主婦となりて家政上に從ひ、他は音樂英語の敎師となり孤兒院貧民院若しくは西洋人の敎師等となりて、その職をとり居れり、一般に良好の結果を得居るなり。

校よりの出身者の家庭の樣は、やはり到底舊き習慣には勝つと能はず、多勢に無勢の有樣にて、最も良き境遇は、舅姑の人と別居して居るもののあれど、大概は同居服從者の位置にあり、勿論これは道德上然るべき事なれども、自分が學校に居て抱いたる考を實地にあらはし居るといふものは此點からして少し。

矯風會の事業の如きも、女子の本分なれば、位置といひ見識といひ、先んじて力を盡し得べくまた其人も爲さむと志ある婦人にても、家庭上の煩累の爲め、またま良人の情を損する爲め、そのまゝ引込思案に了るもの多し、こは今日の情態上、止むを得ぬとながら、世に然るべき伎倆ある妻持てる良人はまた此邊に注意されて幾分の自由を婦人に與へまほしきものにこそ。(此項女史の意を擴充して記す)

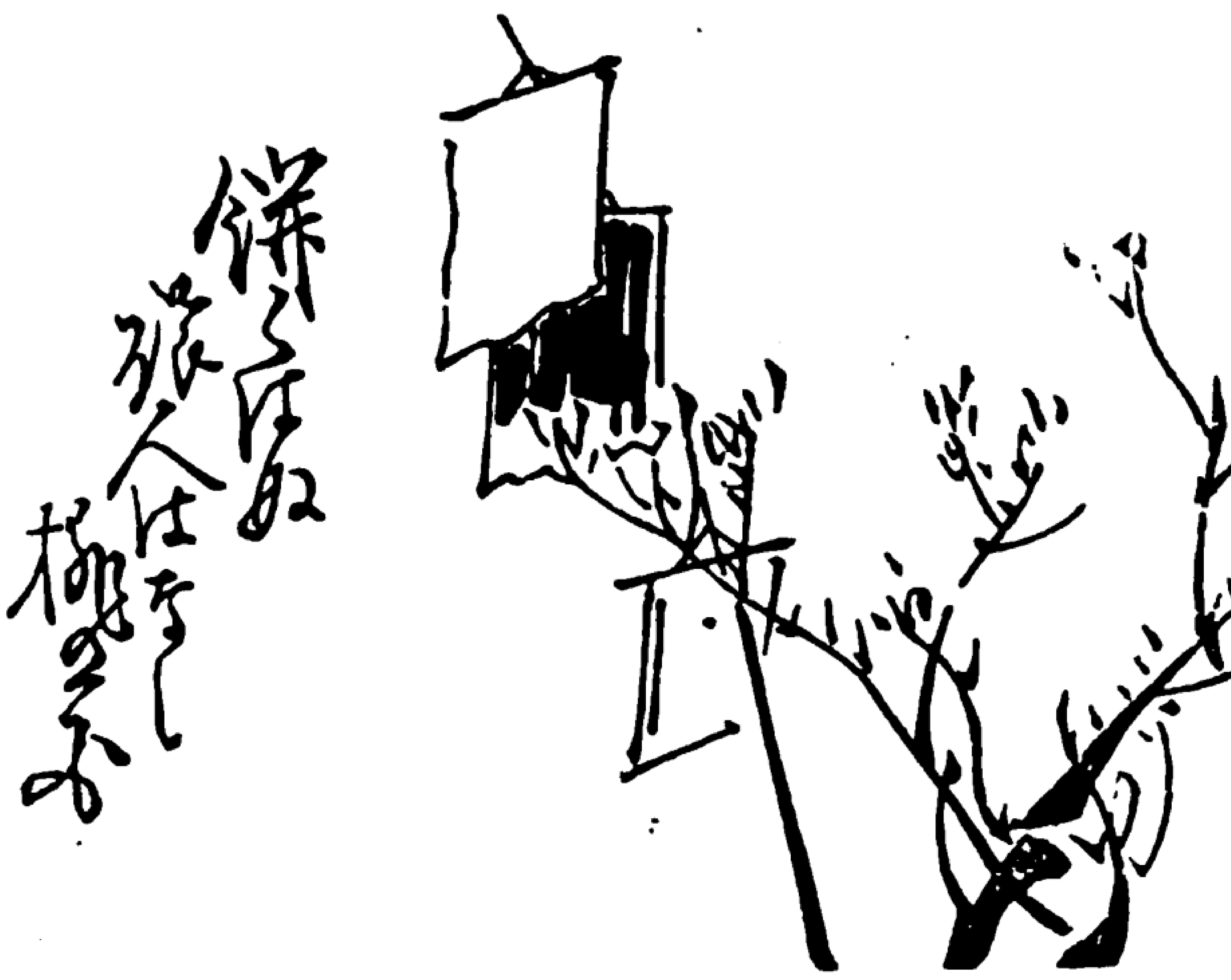


かゝることのなほ滿足に行き屆かざるも、皆家庭上の組織の全く整はず改良に赴かざるがためなれば、家庭の事に就ては、整理すべく改良すべきものゝ多きは勿論、予が家庭上あまり多くのいふべき事あるが爲に、如何にしてよきかといふに寧ろ意見といふもの迷ひ居るなり。横井さん(女史の姉君)の意見にては、まづ家庭の改良は、嫁に對する姑等の方より實行せられねばならぬ、老人の方にて氣をつけねばならぬ、さするに

は老婦人會を組織し、互に談話し老人の意見交換といふやうなる風にしてゆくは、家庭を改良し進歩せしむる一方なりとの思ひ付より、今日の老人會は成りたるなり。

老人會は互に其家に集會し、茶菓子とか壽司とかいふ御馳走を食べて談話するなり、若き方には若き方相應の話柄あると共に、老人にはまた老人相應のおもしろき話もあり、おかしき事もあり、利益になる話あり涙の話しも笑の話しも、種々樣々と互に語りあふその効益は少からず、かくして今日もなほ續き居るとなるが、家庭上相互の効果は大に著るしきものあり。

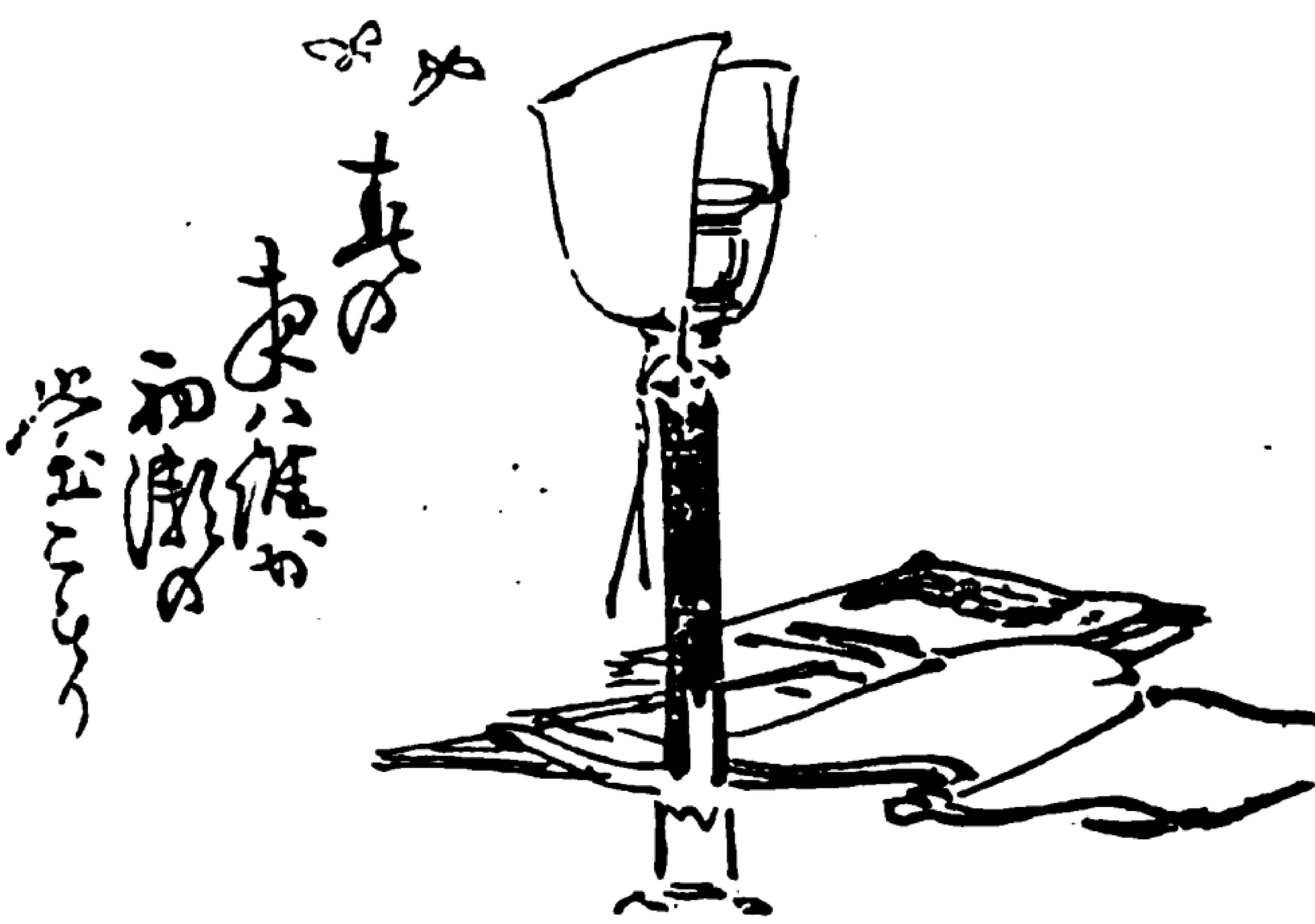
老人會に就て、その感化の一ともいふべき美しき話あり。會員中に三井へ出らるゝ波多野氏の老婦人あり、孫孃何子十一二にならるゝが、「お祖母さんが老人會へ行かるゝから、わたしも何かためになることをしませう」とて、毛絲細工の巾着袋とか、布切のつきあはせとか、その手にて出來るだけの種々のものを作らへ、それを親戚の方々に賣り、幾らかの金額にされては瀧の川の孤女院に寄附とす、老婦人はもとより兩親の方々も少女のとゆゑ長くは續かじと思はれしが、孃は老婦人に「お祖母さんは何時まで老人會をするんです」と問ふに、「お祖母さんは死ぬまで老人會へ出るのです」と答ふれば、「わたしも死ぬまで、これをやりますよ」とて、今になほ老人會と同じく此孃の事業はその朋友の方々をあつめて、續き居るなり。こは老人會の感化の一面ともいふべく、美しき話柄なり。



家庭改良の意見とては別に無し、無きにはあらねど、いふべき事多くて、孰れよりすべきといふに迷へばなり。されどこの老人會の如きは、確に家庭の平和をはかり安寧幸福改良をなすの良き一方法なるべしと思ふ。

女史はなほ多くの談話を記者に語れり。記者もまた女史の經驗談その他につきて問ふべき事を多くもてりしが、時少くて果さず、他日を期して辭し去りぬ。文中もし誤あらばそは記者誤解の責に歸すべし。

因に記す、女子學院は麹町區上二番町に在り、院長は矢島楫子、教授は澤原奥山横井井石三谷の諸婦人、高津荒井重見岩佐の男教授、英學及音樂は米人シリケン外三婦人なり、束脩貳圓授業料壹圓五拾錢寄宿費は四圓特に六圓の部あり、寄宿舎は家族團欒の形を作るに適せるやうの組織あり、記者の見る所によれば、端正嚴粛なる矢島女史の感化は、學院生徒の中にわたり、女子をして社會に盡し得べき學識と思想との教育を施こさんには、適良の學校なるを信ず。蓋し學校は組織の完全ならむよりも、校長の感化あると最も多く効果あるべければなり。



社會

◎皇族の御婚儀　小松若宮依仁親王殿下の御婚儀は二月十日を以て舉げさせられ、御息所は從二位公爵岩倉具定氏の息女にて、御名を周子の御方と申さる。御齢は二十三華族女學校を卒業したまひ此度香川子爵の御媒妁にて宮に御輿入あらせらるゝ事となり、勅許を得たまひ

たるなり。今御婚儀の大畧を記さんに、御式塲は赤坂葵町の御殿、御式は和洋を兼ね、御服裝は供奉護衛の面々は洋式なれど、御献色目は悉く本朝古來の樣に從はれしといふ。午前正九時若宮殿下葵町御殿へ御參着同時儀仗兵到着、引達へて宮の別當高﨑正風男名代丹羽家令上野御用掛周子の御方の御迎として岩倉殿へ向はる。岩倉殿にては具定公同夫人、周子の御方を伴ひ御待受あり、名代は若宮殿下の參らせられたる御飾花を捧げて周子の御方に進め奉る。九時三十分周子の御方御出館、御裝は洋式婚禮服、騎馬の先導、護衛にて馬車葵町の御殿へ着、家扶家從の面々は、御門外に、女中は御玄關に迎へて最敬禮。宮家の女中に導かれたまひて葡萄の御間に御休憩、同十時に御婚の式を擧げさ



せらる、御塲所は四君子の御間、若宮殿下は大禮服、周子の御方はやはり婚禮服にて御着座あり、御媒妁別當家令祗候す、御座定まりて御二方へ御献を供へ御盃を進む、御献の色目は

御献色目
一昆布　勝栗　熨斗
一雜煮
一吸物
蓬萊臺
御星の物
御三つ土器
瓶子
瓶子
銚子
提子

等なり、御式塲の狀を寫すときは左の如し。

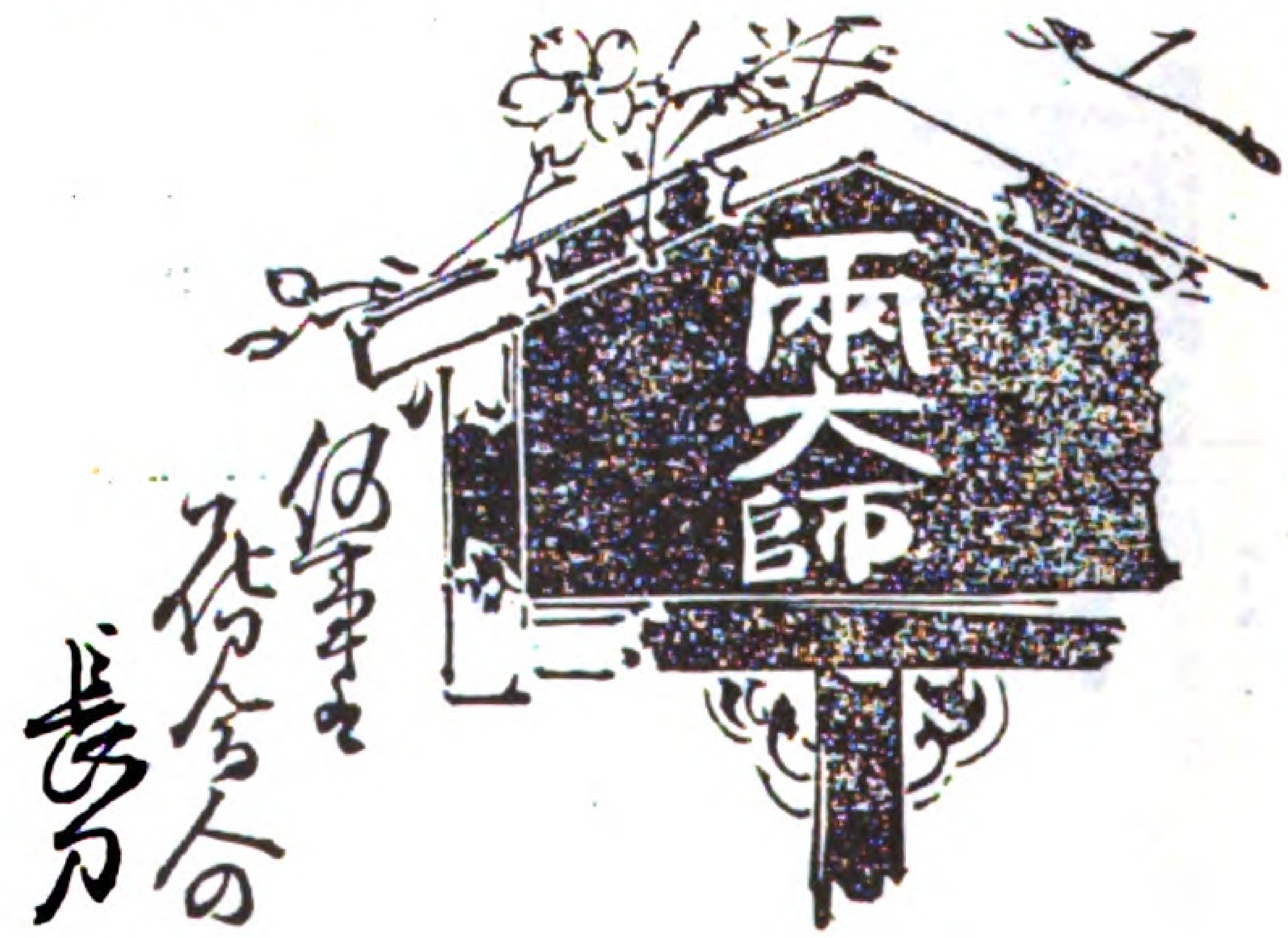
御三つ土器
蓬萊臺
御星の物

初
銚子　瓶子　盃臺　瓶子　提子

御二方の
○　雜煮　熨斗　吸物　下捨
○　吸物　熨斗　雜煮　下捨

御媒妁人
同夫人
陪膳女
陪膳女
陪膳女
家令
別當

畢て御退席、御休憩の後御對面席の廣間に入らせられ松宮彰仁親王殿下並に御息所頼子殿下左に御着席、若宮殿下並に周子殿下右に御二方と御對座あり、御献色目は雉子と承はる。別當家令祗候陪膳四人下に侍す、御献の御四方御盃ありて御式畢る。正午御四方へ御禮御膳を進む、岩倉公爵同夫人御媒妁香川子同夫人高崎別當丹羽家令上野御用掛御陪席家扶家從女中等御祝申上ぐ、午後一時三十分宮中より勅使侍從御差遣、午後二時皇后陛下の御使參入、二時十五分皇太子殿下の御使參入、畢りて若宮御二方には御裝を大禮服に更め給ひ、午後三時御馬車に御同乘御參內謁見御禮の上賢所御參拜あり。之にて御婚儀全く終を告ぐ。當日周子の御方並に岩倉家より宮へ參らせらる御土產品の二三を記せば、



依仁親王殿下へ御贈品（周子の御方より）

一御帽　一個　一御禮服　一領
一御劍　一振　一壽留女　一折
一こんぶ　二折　一鮮鯛　一折
一御樽　一荷（以上御料金）
一銀製卷莨箱　一對　一同御灰切　一對
一蒔繪御手箱　一個

同殿下へ御贈品（岩倉公爵及同夫人より）

一生鯛　一折　一御樽　一荷
（以上御料金）

彰仁親王殿下へ御贈品（周子の御方より）

一紺緋羅紗御洋服地　一卷　一紫檀御書棚　一個
一銀龍銀製岸上双鷺置物一箇

同御息所頼子殿下へ御贈品（同上）

一銀製花盛器　一對　一御洋服地　一卷

彰仁親王殿下及同御息所へ御贈品（岩倉公爵御夫婦より）

一生鯛　一折　一御樽　一荷

尙各宮家、御親族方へ縮緬其他御料金等の御土產くさ〴〵ありと知るべし。

◎露伴の女子見　幸田露伴子去月の新小說紙上に女につきての說種々ものされたるが、そのうちの一二抄す

れば、妻につきて曰く、

妻にありたきは、夫の業を夫の業のみの業とおもはで、夫の業やがてわが業なりと常々思ひしみてあらん心がけなり

美女につきては

美しく生れつきたる女、十人に六人は心驕れり、美しく生れつきたる女、十人に六人は智乏し、十人に六人は命薄し、家を破れるものゝ母、十に六は美人なり、浮き名の淵に沈み果つる女の母、十に六は美人なり。

醜婦につきては

十に六は醜く生れつきたる女、心ひがめり、迷深し、片意地なり。

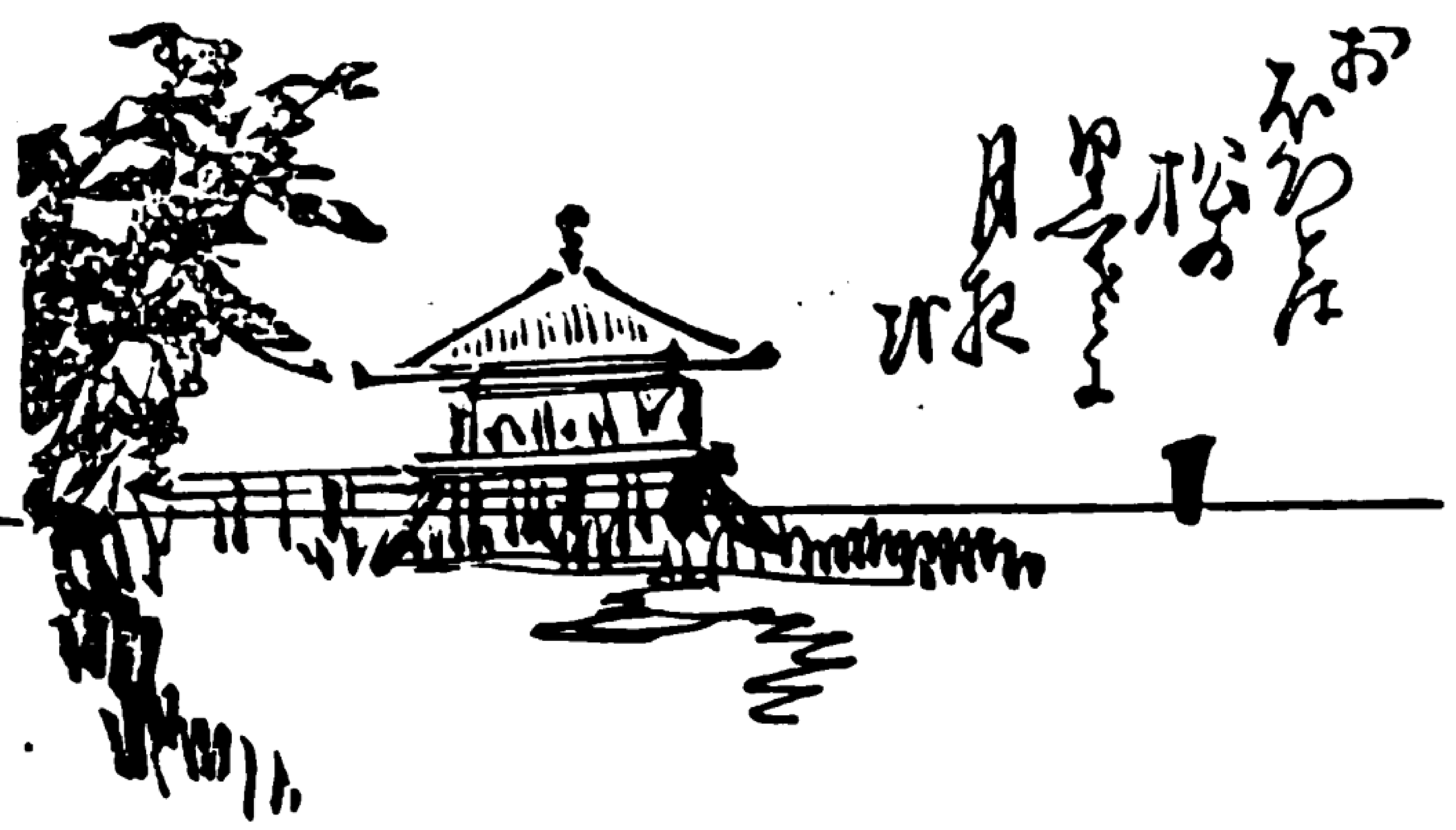
女の衣につきては

腹のあたりに益無き襞をつくりて襞筋となく縫ひつけたるは見たるさまよろしからず、脇をあけたるは、冬寒かるべく身の毒なるべし。男女の衣のいづれもよからぬは襦なり。男は袴を用ゆればなほよし、女は歩むともかなはぬ衣つけたらむは決してよき事なるまじ、智ある人の眞接を得て改めたきは今の服裝なり。

洋服は昔羅馬といふ刑罰に似て醜し我邦人の倣ふは愚なり。

之を讀みて幾分の省るに足るべきものあらむ。

◎汐干狩と摘草　春風柳を吹きて寒からぬ時節となり



節句の雛祭もはや終りて、花見の時節遠からず、汐干狩と摘草は此間の女子の遊戯なるべし。潮干狩に注意すべきは、水中を漁り歩くに足の裏を傷つけぬ事なり、草鞋などを穿かむは最も安全なるべし、汐の滿ちくる時刻に注意して船にはなれぬ心がけあるべし。摘草はまた長閑に興深きものなれ、草畑る野邊に半日の運動、女子の躰にも心にも此上無き益なるべし。山や林の蔭にて餘り日の照らぬところに生ゆる若草を耳とす、蒲公、嫁菜、土筆、野蒜、田芹、芽出し蕗、野生三つ葉等、いづれも柔かなるを摘みて、浸し物とす、茹過ぎず香味を失はぬやうすべし、甘味は味淋よし砂糖はよからず、いり芥子をパラ〳〵とふりかけたる方香味多しとかや。寄せて精進のかきあげとするもまた妙なら

む。都にては早稲田、雑司ヶ谷、向島の田圃、田端、三河島の邊そのよき場所なり、地方にありては、一町ゆけば一望の青草萠えて茵の如き春景色、あはれ女子の喜ばむ時節は來れり。

平和（口繪の解）

翁は綿を繰り媼は絲を紡ぐ、住むところは茅屋、坐するところは荒蓆、綿の堆き中に、浮世の浪額に數を寄せ重ねたる老夫婦、心は頭に戴ける白髪の清きよりも潔く、惠深き日の光を浴びて、かれ等の務むべき業をば、



世にも欲ふとなきさまに安らけく穩かに務むるや。其分に應じて勞働き其分に應じて衣服飲食す、平和安寧は富めると貧しきとの區別はあらず。試に此老夫婦の住居生活の内外の情景について、讀者各自の想像をなし見たまへ、慾の巷の塵の汚れよりはるかに隔たりたる樂園に遊べる懷あらむ。



紅梅や主の齋顏あり　青牛
尼の子の元服したる彼岸かな　助骨
谷底に小さき人の畑打つ　碧玲瓏
侍の醉うたるをなぶる小蝶かな　子規
堤越して鳥居見えけり春の風　狸伴
藤色のお高祖頭巾や春の月　一寸
舞姫の鼓あぶるや春の雨　樂天

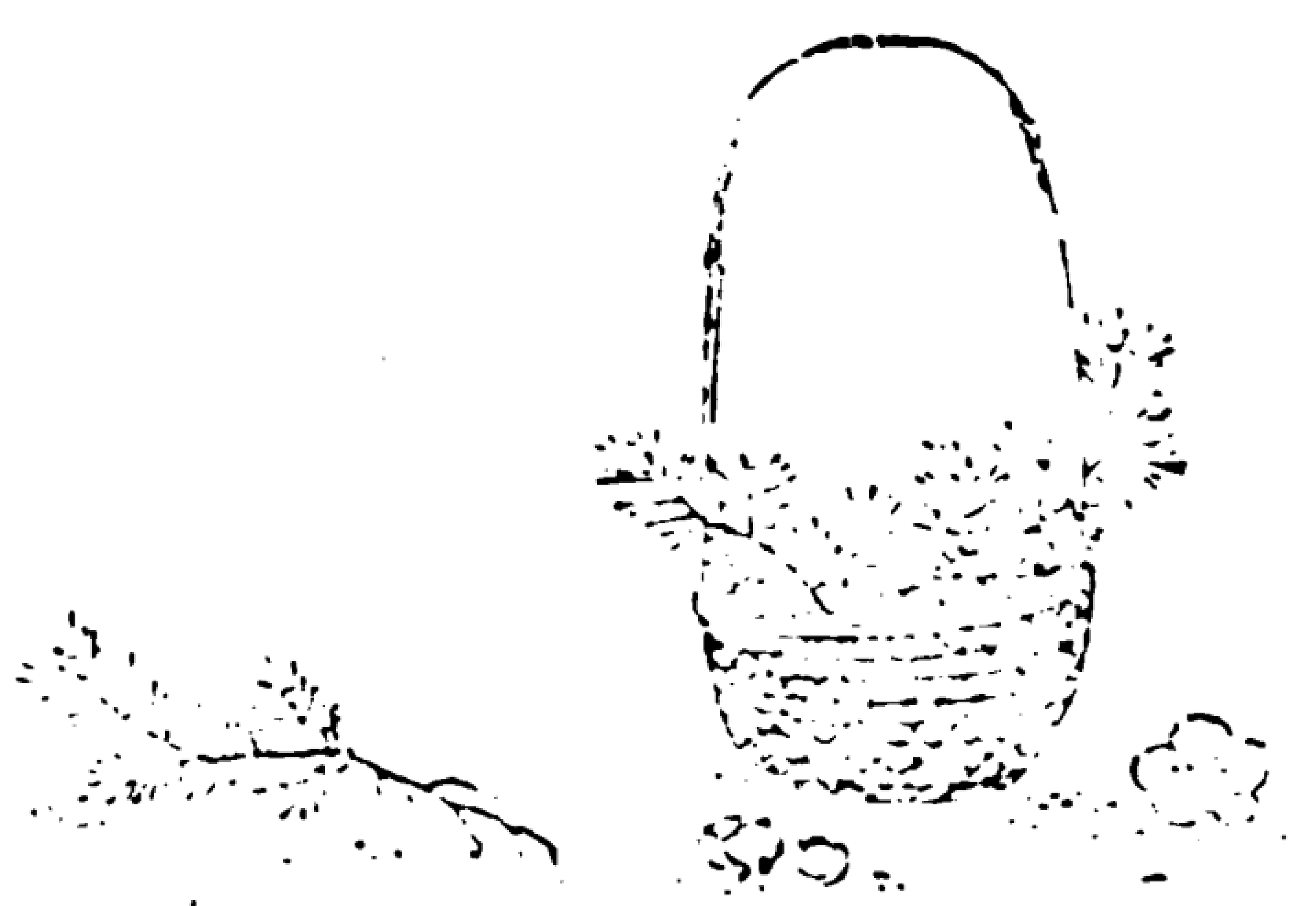
社告

寄書募集

從來讀者諸君より文藝詩歌等の玉稿投寄相成候處編輯紙上の都合も有之乍遺憾一々掲載の運に致し兼ね候ひき次號より左の條項に據りて寄稿を歡迎す

一　地方風俗習慣上につきての所見若しくは所感、
一　其地方に於ける時々の見聞錄、
一　家庭に關する自他の經驗若くは出來事の見聞、
一　兒童遊戲の種類、
一　家庭日記の類、
一　童謠俚歌

此條項は大要に候無邪氣なる事つまらぬ事おかしき事にても諸君が見ておもしろし若くは益ありとせらるゝ事につきてありのまゝに記稿あり度候、總じて事實上に取る事ならば（些事なりとも）本社は喜んで掲載すべく候文章はなるべく短かきを可とす端書は最もよし



蘆花生編

世界古今名婦鑑

印刷中

紙數約三百餘頁

懐かしきは親戚故舊の寫眞帖なり。然れど日夕開き見て、志氣を興奮し、胸襟を開豁にするは、名ある秀れ者の寫眞帖を見るに若くはなし。

今此に出版するは、筆を以て寫せる古今名婦人の寫眞帖なり。金冠の女皇王后あり。文學者あり。美術家あり。社會改良家あり。賢母あり。良妻あり。烈婦あり。政治家あり。婦人新聞記者あり。家庭の光あり。社會の華あり。

加之、間々古人の金言、興味多き話、等専ら婦人に關するものを挿みたれは、山窮りて水出で水盡きて陸起るの面白味あり。

古今の秀れたる婦人を一室の中に集めて親しく其話を聞き其面を見るのみならず、現今世界の姉妹等が何事をなしつゝあるかを知る可きは、此名婦鑑なり。世界的日本の主婦女學生諸君は幸に一本を坐右に備へよ。

發行所　東京々橋區日吉町　民友社

親を持てる娘、夫を持てる妻、子を持てる母、女と云ふ女は見よ……

姉妹を持てる兄弟は繰り返しくて此廣告を讀み玉へ讀みて記憶し玉へ日本國に中將湯と云ふ靈藥あることを

中將湯の名譽

產科婦人科專門諸大醫の稱賛を得たるのみならず畏くも上宮様方の御用を蒙るに到る誠に本劑の名譽と云ふべし

醫學博士慈惠病院長 產科婦人科專門 高木兼寛先生（東京）

產科婦人科專門醫學士櫻井病院長 櫻井郁次郎先生（東京）

產科婦人科專門ドクトル 木村順吉先生（東京）

婦人科專門獨逸ドクトル 朝山義六先生（横濱）

產科婦人科ドクトル 佐伯理一郎先生（西京）

大坂緒方病院婦人科醫長醫學士ドクトル 緒方正清先生（大阪）

產科婦人科專門ドクトル 小林山卿先生（大阪）

愛知病院婦人科醫長醫學士ドクトル 柴田耕一先生（名古屋）

ドクトル婦人科專門グラヲエト、ハアマシー 大月文先生（福井）

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱賛を忝ふしたれども略す

子宮病血の道くすり 中將湯

●十年のちの道三週間に全治す●

●子宮病血の道產前產後の長き患ひ●下腹子宮腰足引つり痛み●下腹より胸先へ差込或は止氣を失ひ●息切し動氣強く腰より足部へ冷込み●手足しびれ●腫●月經不順●逆上頭痛眩暈甚しく●年頃になりて月經なき人又物事を苦にし氣分惡く常にふさぎ勝の人特に子宮出血白血長血帶下にて久しく患ひ身體衰弱せる病にても全治すること請合なり……（論より證據早々試よ）



定價

	一日	三日	一週分	二週分	三週
	七錢五厘	二十二錢	四十五錢	八十五錢	一圓廿五錢
郵送料	二錢	二錢	四錢	六錢	十錢

●中將湯は各藥店にあり無ば本舖へ申込あれ●東京市中は配達し●遠國は郵送す●本舖へ御注文の御方は病人の容體詳しく申込あれ

本舖 東京市日本橋區通四丁目七番地 津村順天堂

支舖 大坂堺筋町北入 津村順天堂支店

○家庭雜誌之愛讀者よ、諸君の知り先に於て若しも、子宮血の道さん前さん後の諸症にして種々の藥を用ひても此効なく困難する人あれば試みに此中將湯を服用せしめよ……百發百中

（明治廿五年十月十四日遞信省認可）（明治卅一年三月十五日發兌） 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社 秀英舍印行

No. 114.